

## 5 遺 物

大浦浜遺跡から出土した遺物は縄文時代から中世まで長期間にわたるもので、コンテナにして2000個に達している。遺物量で最も多いものは古墳時代後期の製塙土器で、次いで奈良・平安時代の製塙土器である。縄文時代の土器、石器も多く、コンテナ70箱ほどある。現在未整理のほうが多いが、ここでは整理の終ったものについて包含量から出土したものを主に、各時代ごとに説明していくことにする。

### (1) 縄文時代の遺物

瀬戸内海に点在する大小の島々には縄文時代を通じて各時期の縄文土器と石器の出土が報告されている。しかし、多くの遺跡が砂浜上に立地する地形から層位的に把握されている遺跡は限られたものだけである。

大浦浜遺跡から出土した縄文時代の土器と石器も包含層は認められるものの大半が散在的に出土したものであり、時期的に把握される遺物は少ない。このような状況から、極力多数の土器・石器を図化することに努めた。

### a 土 器

大浦浜からはコンテナ約10箱出土したがその多くは施文状態を含め文様構成の観察が容易でない。しかし、出土状況の項で記載したように、たては地区で前期前半・水路より北区の南側で前期末中期初・北側で後期前半の時期の土器が比較的まとまりをもって出土する現象がみられた。この状況から図示するものは一部を除いて大半がその地区である。

分類にあたっては、施文方法・文様構成を中心、I類—爪形文、刺突文・II類—縄文、撚糸文、条痕を地文・III類—磨消縄文・IV類—条痕、I~IV類として、さらに細分類を試みた。

#### I類（第94図）

- A—刺突文（2）
- B—爪形文（1）
- C—刺突文をもつ突帯（4）
- D—爪形文をもつ突帯（5~10）
- E—押し引きをもつ突帯（3）

A~Eは全て内面に2枚貝による条痕調整が施されている。また、3・4を除き口唇部に貝殻腹縁によるキザミをもつ。（11）は底部であるが2を除く他のものと明確な共伴であるためこの項に図示する。2は水路北区の南側で、他はタテワ地区より出土したものである。

#### II類（第95図）

- A—地文が縄文（18）
- B—地文が縄文で口縁部内面に縄文を施す（12）（13）（14）（16）（17）（28）
- C—地文が縄文で爪形文を施す（22）
- D—地文が縄文で突帯をもつ（15）（23）（25）
- E—地文が撚糸（19）（21）
- F—地文が垂下条痕（26）
- G—押し引き（24）（27）

#### H—その他 (20)

A～Hは器壁に薄・厚がみられる。大半が口縁部のみの破片であるため口縁下の構成は不明である。しかし、地文の状況は変化がないものである。20・21がA～H-50・51区から出土したもので、他は水路北区の南側で出土した。

#### III類 (第96図)

- A—口縁に繩文を施す (29) (30) (32) (39) (50)
- B—3本沈線 (33) (37) (46) (51)
- C—口縁部が肥厚 (47) (48) (49)
- D—多条沈線 (31)
- E—口縁部内面に繩文帯 (44) (45)
- F—口唇部に平行沈綫 (52)
- G—疑似繩文 (34)
- H—波状口縁 (40～43)
- I—その他 (35) (36) (38)

A～Iまで分類をしたが、共通要素も含んでいる。しかし、基本的な意味である。水路より北区で出土したものを中心に図示した。しかし、III類は少量ながら北区全域で出土している。

#### IV類 (第97図)

- A—2枚貝条痕 (53)
- B—口縁に円形竹管文を施す (54)
- C—巻貝条痕で口唇部にキザミを施す (58) (59) (60) (61) (62) (63)
- D—巻貝条痕 (55) (56) (57) (65) (66) (69)
- E—波状口縁 (64)
- F—一条痕調整後に沈綫 (66) (67)

2枚貝と巻貝による調整が施されているが巻貝と考えている中にごく細い条痕がみられるものもある。53はII類の周辺で出土したものである。他は北区全域から出土している。

#### その他の土器 (第98図)

(70) 巾具による太い沈線が横走する。(71) 口縁が肥厚し口唇部に太い短線が連続する。調整は、磨滅が著しく不明である。(72) (75) 荒いタッチのヘラ描き沈綫である。(74) 板状工具と考えられる調整後に半截竹管で格子状を描く。(73) 繩文施文後、円形の指頭圧痕が列点状にみられる。(76) 口縁端部に結節繩文を施す。(77) 口縁部に渦巻文がみられることから波頂部と考えられる。(78) (79) 約3mm幅の半截竹管で押し引きされている。(80) 突起部が剝離したもので内側に折り曲げられている。

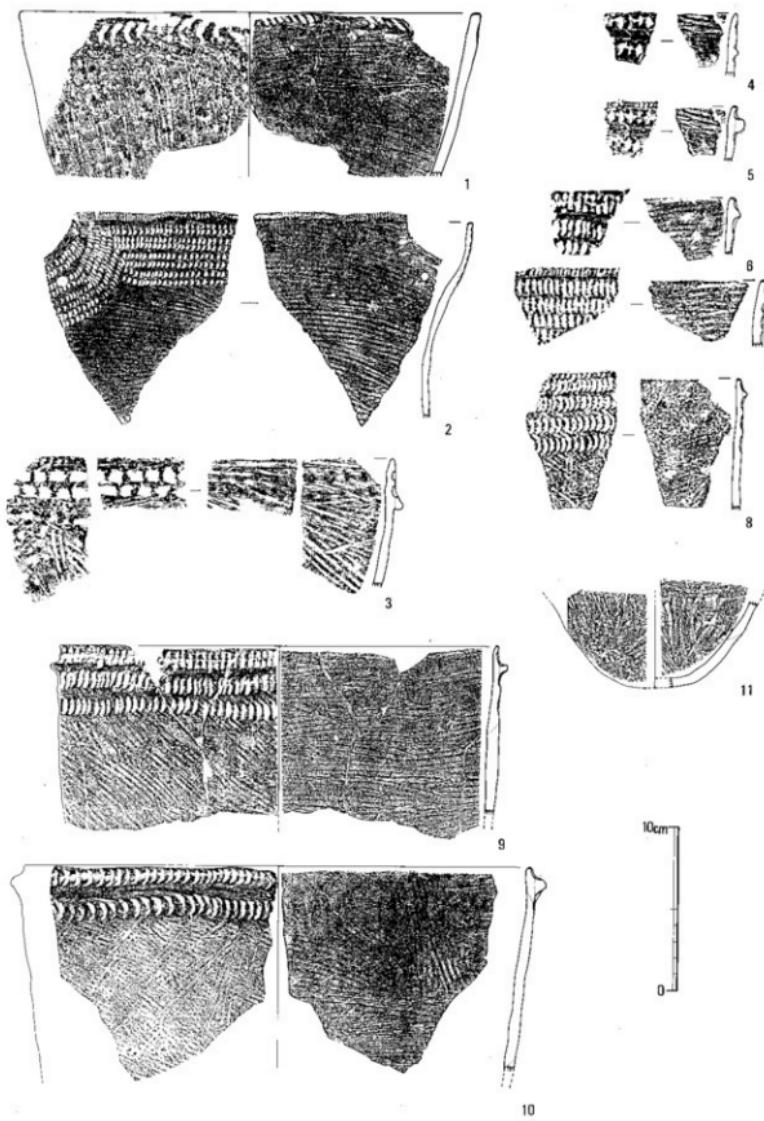
#### 底部

タイプに平底・上げ底・凹み底がみられる。(90) 2枚貝条痕が僅かに認められ(53)の底部と考えられる。(91) (92) 多孔底と呼ばれているものである。内面は粘土が隆起しているが全て下方からでない。

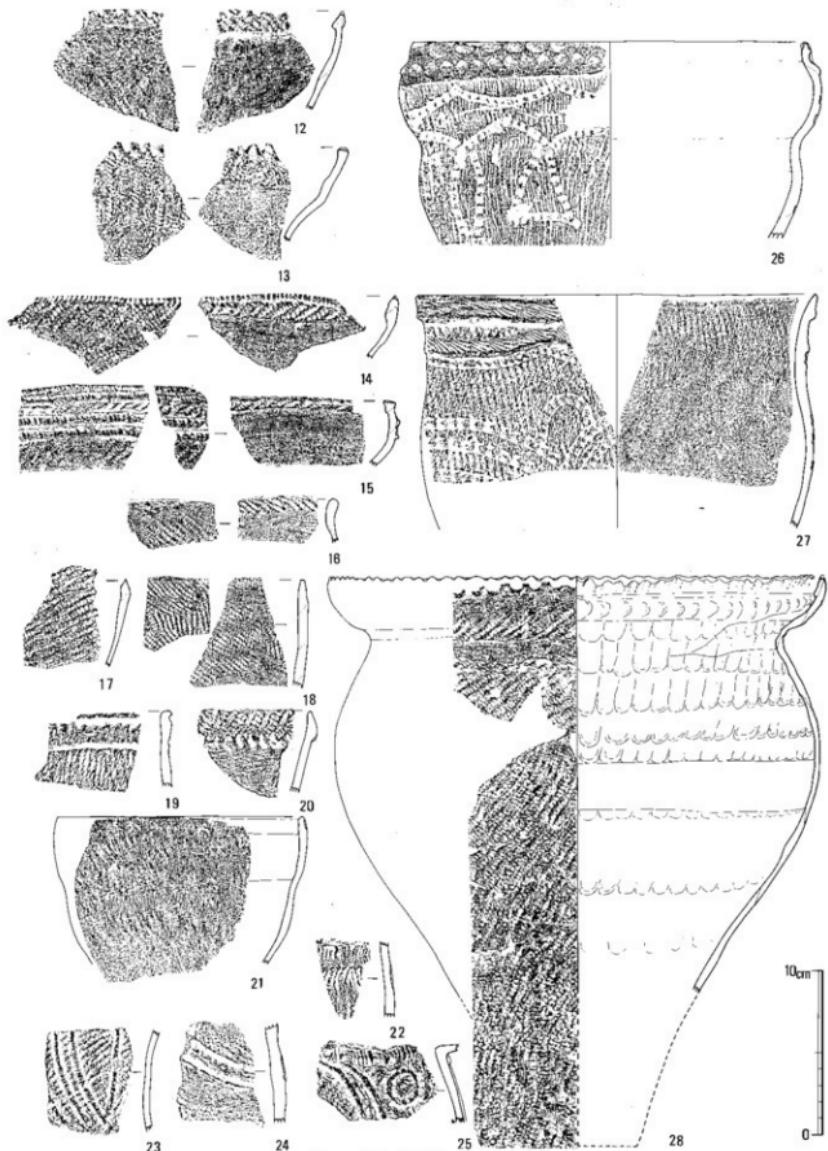
#### 土製品

中・後期の包含層から出土したもので、細かい円形の刺突が外縁に沿って直線的にめぐる。

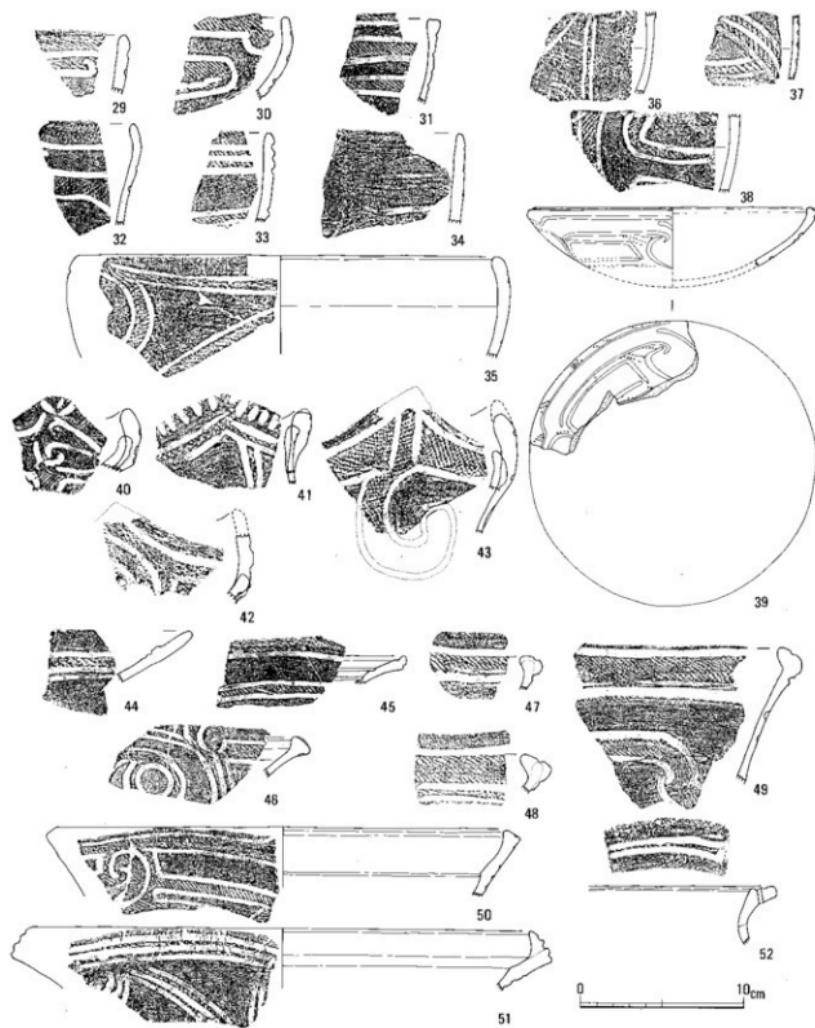
(町川)



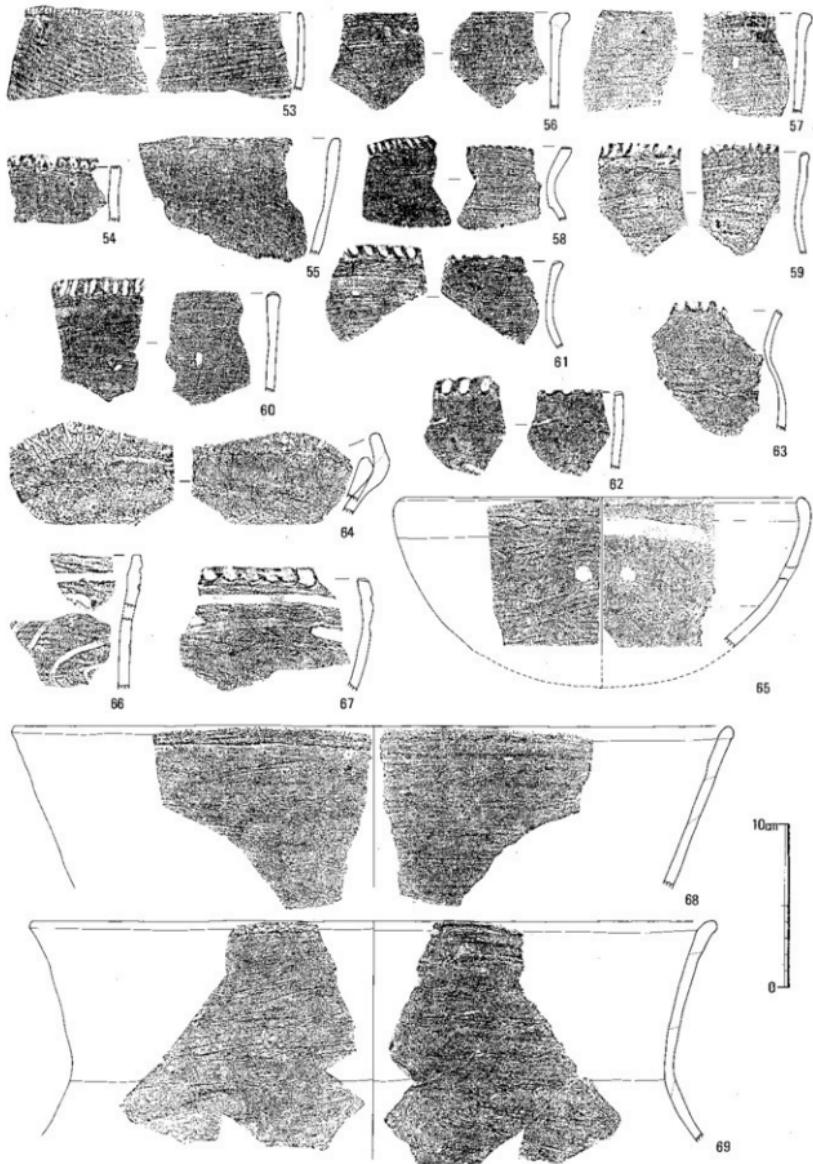
第 94 図 縄文土器実測図(1)



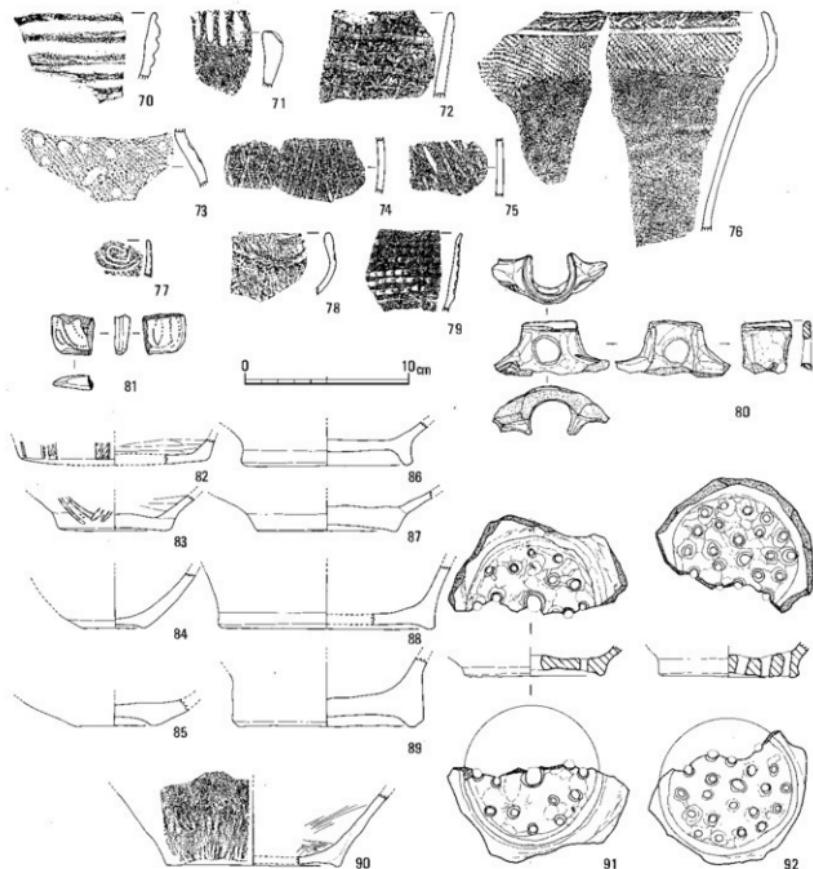
第 95 図 縄文土器実測図(2)



第 96 図 繩文土器実測図(3)



第 97 図 繩文土器実測図(4)



第 98 図 縄文土器実測図(5)

### b 石器（第99図～第103図、図版27、第3表）

今回報告する本遺跡出土石器は、D～R-27区～40区、水路以北区、工事用道路A地区の各地区より出土した石器で、二次堆積及び単純包含層内の石器類である。単純包含層の共伴出土土器（第95図～第98図）により、ほぼ縄文時代中期～後期のものと思われる。出土石器の完形品及び破片の総点数94点、サヌカイト剝片335点が出土した。その組成は、石鎌6点、石匙8点、削器53点、打製石斧5点、磨石11点、石錘5点、大形削器6点などである。

#### 石鎌（第99図1～6、図版27-1(1)）

1～3、二等辺三角形の凹基無茎式である。側辺が逆刺の先端までは直線的に伸びるもので、基部の抉りは異なるが、先端及び側辺は丁寧な調整剝離で、バランスもとれている。

4、二等辺三角形で、基部湾入が浅く平基式に近いものである。器厚は薄く、裏面は剝離面を残し、先端部及び側辺を細かく調整している。逆刺が左右欠損している。

5、両面共に剝離面を残し、先端及び側辺は調整剝離で、その際表面中央部で大きく階段状剝離が起ったと思われ、未製品と考えられる。

6、この石鎌は、第5層無遺物層より出土のものである。両面共に剝離面を大きく残し、全面共に丁寧な調整で、裏面で一部階段状剝離が見られる。大形のものである。

#### 石匙（第99図7～13、図版27-1(1)）

全てサヌカイト製の完形品である。横型5点、縦型3点の8点出土した。

7、一般的な横型のものである。つまみ及び刃部は丁寧な調整剝離であるが、裏面はつまみと両端部のみ調整剝離が見られる。

8、斜方向につまみを持つ横型のものである。両面共に粗雑な調整で、刃部は丁寧な仕上である。横長の剝片を利用している。

9、ほぼ真横で斜方向につまみを持つ横型のものである。横長の剝片を利用し、つまみ部及び側辺のみ調整し、自然面が見られる。剝離面を大きく残し、刃部はほとんど調整は見られないが、一部細かい剝離で使用痕とも考えられる。

10、横長の真上につまみを持つ横型のものである。両面共剝離痕が数面あり、表面の一部階段状剝離と自然面が見られる。刃部の調整は両面共刃部にそって細かい剝離が並列する。

11、横長の剝片を利用した縦型のものである。両面共に大きく剝離面を残し、刃部は両面共細かい剝離で調整している。つまみ部は片方よりの抉りである。側辺に自然面が見られる。

12、11と同じ、縦型のものである。つまみ及び刃部は細かい剝離の調整である。側辺に自然面が見られる。

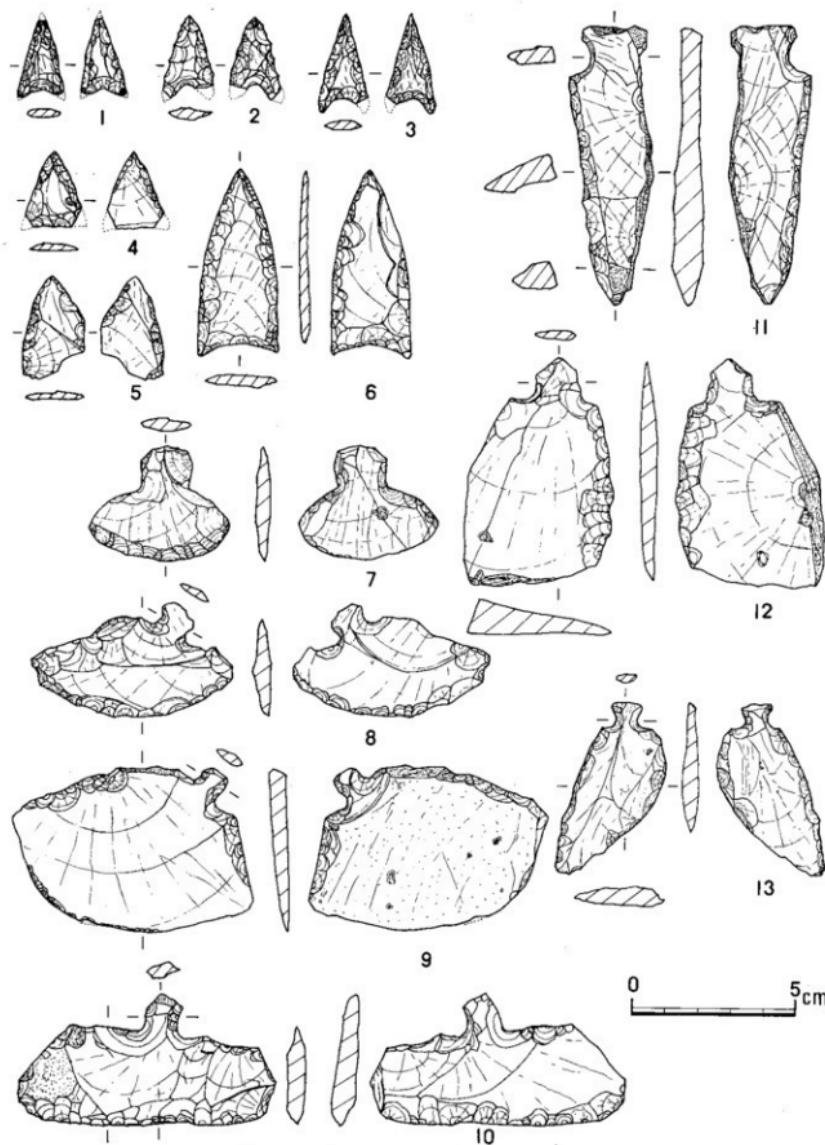
13、不定形な木葉形の縦型のものである。両面共つまみ部及び刃部を調整し、一部側辺も行なっている。表面は剝離痕が数面、裏面は主剝離面を残している。風化が著しく、小形である。

#### 削器（第100図）

全てサヌカイト製で、完形品及び破片53点出土し、全体の半数以上を占めている。

14、横長の剝片で素材をそのまま使ったと考えられる。刃部はほとんど調整はなく、一部使用痕と思われる跡も見られる。

15、14と同じ横長の剝片を素材として、刃部は表面のみ剝離調整があり、鋭い。



第99図 繩文時代石器（石鎌・石匙）実測図(1)

- 16, 両面共に大きく剝離面を残して刃部の調整を行ない、側辺は雑な調整で、階段状剝離も見られる。
- 17, 横長の剥片を素材とした長方形のものである。刃部のみ最小限に調整剝離し、片方の端部は意図的に切断し長方形にしたとも考えられる。
- 18, 横長の剥片を素材とした不定形なものである。刃部のみ両面共最小限の調整である。表面に3分の1ほど自然面が残っている。フィッシャー等が顕著に観察できる。
- 19, 横長の剥片を素材としたほぼ円形のものである。両面共全周に粗雑な調整があり、階段状剝離が見られる。
- 20, 円形を呈し、全周には調整がなく、部分的に調整が見られる。
- 21, 19の小形のものである。一部階段状剝離が見られる。
- 22, 両面共に剝離痕が数面あり、粗雑な調整であるが、刃部は鋭い。各所に階段状剝離が見られる。又、「石鎌」的なものとも考えられる。

#### 打製石斧（第101図）

全てサヌカイト製で、完形品ではなく、欠損したものが5点出土した。

- 23, ほぼ中央部付近で欠損している。刃部及び側辺は薄く、粗雑な調整である。裏面は剝離痕を大きく残し、両面共に階段状剝離が見られる。器厚は薄く、短冊状である。
- 24, 頭部のみで、ほぼ中央部より刃部にかけて欠損している。両面共に大きな剝離痕であり、両側縁は細かく潰れている痕跡が見られる。
- 25, 刃部のみであり、中央部より頭部にかけて欠損している。両面共大きく剝離調整。刃部は鋭く、側辺は階段状剝離が見られ、表面に自然面が残っている。

#### 磨石（第102図26～30、図版第27-(2)）

- 砂岩質・花崗岩質の石材を利用している。11点出土し、図示した以外はすべて破片である。
- 26～28, 円形状を呈している。26は、一部分だけ使用した跡があり、平坦になっている。27, 器面が荒く軟質であり、風化が著しい。28, 全周なめらかである。
- 29, 長方形を呈している。a～f面の全面を利用して、なめらかである。
- 30, 楕円形を呈している。a面の数箇所を局部的に研磨され、使用痕と思われる痕跡が見られ、平坦である。b・c・d・e面は堅い物を潰した際の打痕と思われ、d・e両面が最も明瞭な打痕が見られる。

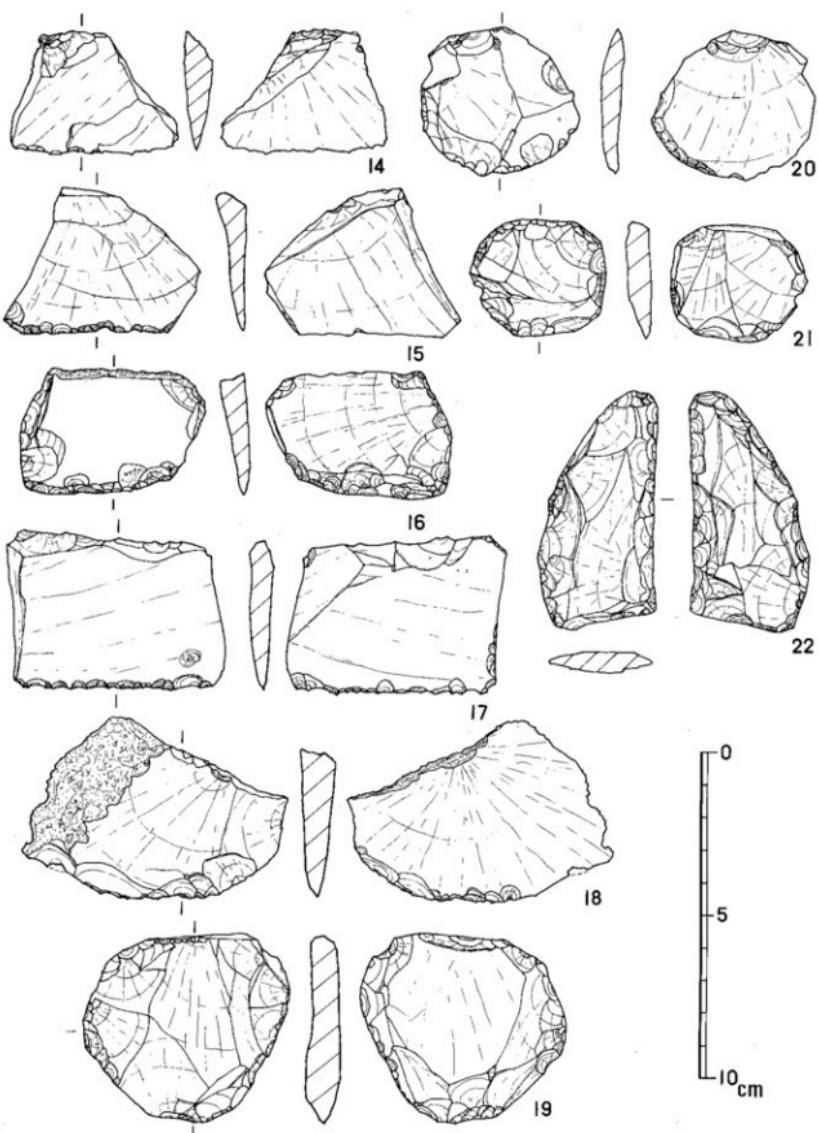
#### 石鍤（第102図31～33、図版第27-(2)）

全て自然礫を利用したもので、5点出土した。

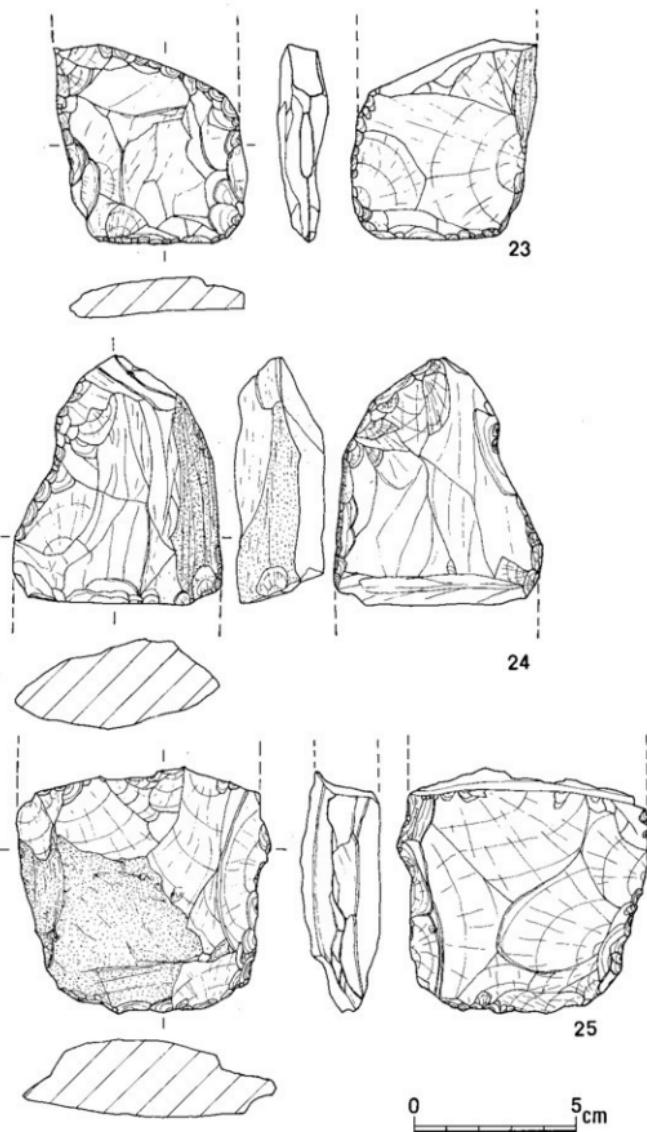
- 31, 不定形で扁平な礫を対角線の両端を両側よりの打ち欠きがある。
- 32, ほぼ長方形の扁平な礫の短辺部の片側のみ打ち欠きで、一方は階段状剝離が見られる。
- 33, 楕円形の扁平な礫の両端を互い違いの一方向より打ち欠き、その際大きく階段状剝離になっている。

#### 大形削器（第102図34・35）

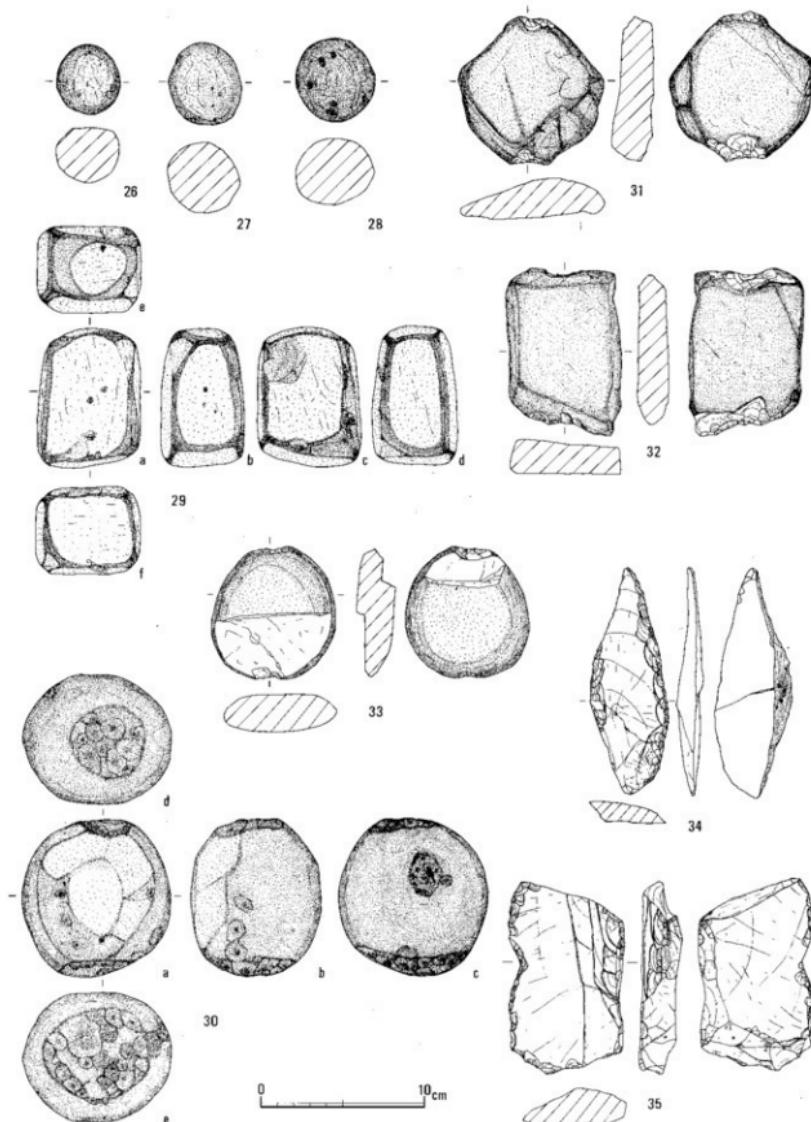
- 34, 横長の剥片を利用したものである。表面のみ側辺中央部、刃部に調整剝離があり、階段



第 100 図 繩文時代石器（削器）実測図(2)



第 101 図 繩文時代石器（打製石斧）実測図(3)



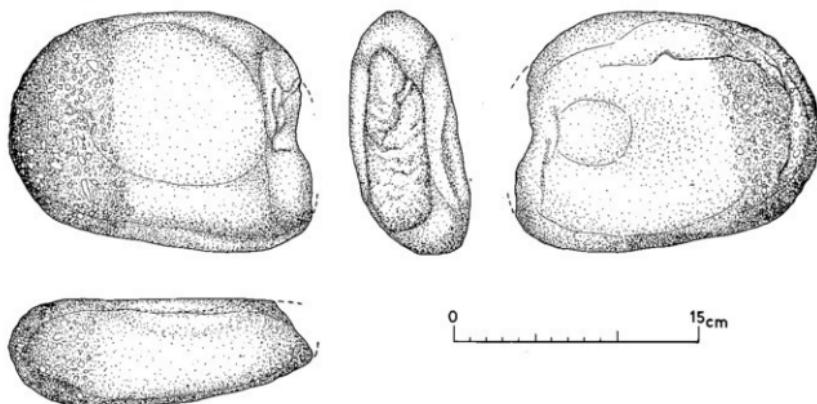
第 102 図 縄文時代石器（磨石・石錐・大型削器）実測図(4)

状剥離も見られる。裏面は剥離面を大きく残し、刃部先端部で一部剥離がある。自然面が見られる。尖頭器的な用途も兼ねているとも考えられる。

35. 横長の剝片を利用したものである。表面は数面の剥離面で、裏面は大剥離面を残して一部自然面が見られる。刃部は両面共に細かく丁寧な調整があり、中央部で幅3cm、深さ0.5cm前後抉られている。

#### 石皿（第103図）

扁平な長楕円形を呈している。両面共に使用されたと考えられる異った楕円形のくぼみがあり、材質は砂岩で4分の1ほど堆積時の石目が見られる。残存状態は長さ18.5cm、幅14.5cm、厚さ7cm、重さ2,450gを測り、わずかに端部が欠損している。



第103図 縄文時代石器（石皿）実測図(5)

以上、今回報告した石器類については縄文時代中期～後期にかけての包含層内の出土がほとんどである。本遺跡の調査は、昭和57年度も継続されるので、出土石器の形態・分類については来年度とし、縄文土器・石器類は、今後の研究に貴重な資料となり、大きな成果であった。

(田村)

第3表 出土石器計測一覧表

〔( )を付けたものは現在値を示す〕

捕獲番号	出土区画	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	角度 (度)	備考
図99-1	K-34	石鏃	サスカイト	(2.4)	1.5	0.3	(0.7)	37°	
2	K-38	〃	〃	2.1	1.6	0.4	(1.0)	70	
3	Q-38	〃	〃	2.6	1.6	0.3	(1.0)	35	
4	J-30	〃	〃	2.4	1.6	0.2	(0.8)	55	
5	K-31	〃	〃	3.1	1.9	0.2	1.4	65	
6	J-28	〃	〃	5.5	2.4	0.3	6.4	67	第5層の無底物層より出土
7	K-34	石鏃	〃	3.5	4.1	0.4	5.9	45	
8	G-51	〃	〃	3.4	6.1	0.5	10.4	45	
9	G-51	〃	〃	5.0	6.9	0.6	22.8	45	
10	N-40	〃	〃	4.0	7.9	0.8	24.5	70	
11	P-34	〃	〃	8.6	2.2	0.9	19.3	60	
12	M-43	〃	〃	6.9	4.5	1.0	31.3	45	
13	N-47	〃	〃	4.0	2.7	0.5	7.6	70	縄文時代後期の土器が最も集中し共伴出土
図100-14	N-40	削器	〃	3.8	5.1	0.8	13.9	30	
15	K-36	〃	〃	4.5	5.2	0.9	19.9	20	
16	K-38	〃	〃	3.9	5.4	0.8	20.5	45	
17	M-40	〃	〃	4.8	6.4	0.7	34.2	45	
18	N-41	〃	〃	5.6	7.9	1.0	31.8	55	
19	L-41	〃	〃	5.8	6.1	1.0	45.9	75	
20	N-47	〃	〃	4.5	4.8	0.6	15.2	80	縄文時代後期の土器が最も集中し共伴
21	M-41	〃	〃	3.6	4.2	0.7	14.6	45	
22	K-36	〃	〃	7.0	3.6	0.6	23.1	45	
図100-23	D-27	打製石斧	〃	(6.1) (5.4) (1.4) (57.8)	50				中央部で欠損している。
24	I-36	〃	〃	(7.7) (6.4) (2.8) (155)	〃				
25	N-39	〃	〃	(7.4) (7.8) (2.3) (165)	55	〃			
図100-26	M-39	磨石	花崗岩	4.2	3.9	3.4	59.2		
27	M-42	〃	花崗岩質	5.0	4.4	4.3	142		風化が著しい
28	M-42	〃	〃	5.2	4.9	4.0	130		
29	N-39	〃	砂岩	8.5	6.3	5.3	500		縄文時代の中頃の遺物と共に
30	M-42	磨石・敲石	硬質砂岩	9.7	9.2	8.1	1040		
31	M-48	石鏃	花崗岩質	8.9	8.8	2.5	225		縄文時代後期の土器の最も集中し共伴出土
32	M-48	〃	砂岩	10.2	6.9	2.1	245		
33	N-40	〃	〃	8.1	7.6	2.3	206		
34	M-47	大型スクレーパー	サヌカイト	14.0	4.7	-1.4	69.6	45	
35	K-32	〃	〃	11.3	7.0	2.9	206	70	

## (2) 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は、前期に属する土器が大半をしめ、中期後半頃に比定される土器が少量と、後期末頃の土器とに分けることができる。後期末頃の土器は、ヤケヤマ東麓地区で一部確認されている他は、A・B-50・51区付近に集中しており、大浦浜でも北部に偏る傾向が指摘できる。

弥生前期の土器は、第104図のような範囲に集中して出土している。後世の擾乱土中から出土したものが多いが、後世の遺物をまったく含まない良好な状態で出土した土器も多い。この前期単純包含層は、基本的に三層に分けて取り上げており、弥生前期上層・下層・最下層と一応区分している。

最も数量が多いのは上層で、下層・最下層の土器は量が少なく、器種も限定されている。前期集中区画外でも単独で数点出土したが、土層をこの地区的基準に合せることができないので、一応擾乱層出土のものに一括した。

最下層の遺物としては、第105図1～7がある。壺は段を持つもの、甕は無文のもの・段を持つものの、ヘラ描き沈線を持つものがある。口唇部の刻目がないものもある。又、7のように沈線多条化の傾向も見ることができる。

第105図8～14は下層の土器である。壺は口縁部の立ちあがりがゆるくなり、段を持つもの他に頸部に断面三角形の凸帯を持つものなど多様化していく。甕にも沈線・段+沈線のものが見られる。

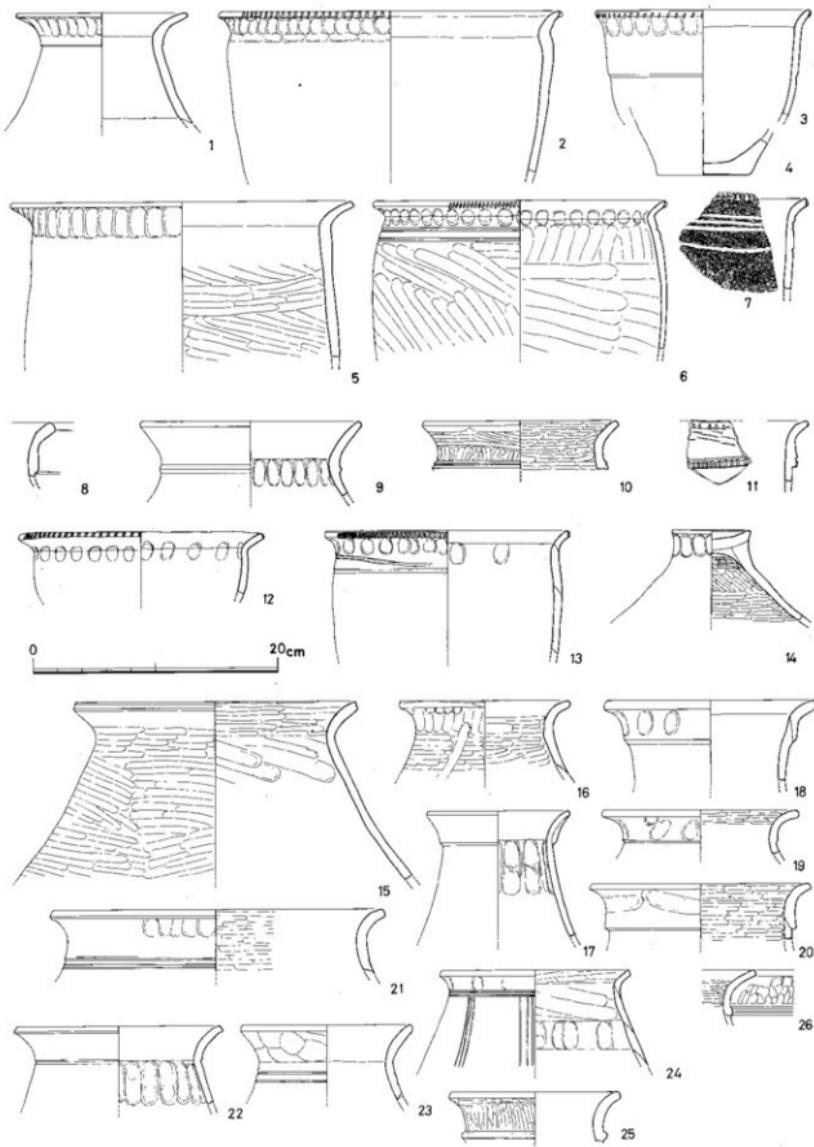
第105図15～26・第106図は上層の土器である。壺には15・16のように無文のものと、17～20のように段のみのもの、21・22のように段+沈線のもの、23・24の沈線のみのもの、25・26のように削り出し凸帯を持つものなど、下層の資料に比べてより多様化が進む。壺の文様としては、連弧文・木の葉文・24のような多条縦線文などが見られる。なお、この層から出土している木の葉文は有軸木の葉文のみである。

第106図、1は、特殊な壺形土器で、体部は砲弾形を呈するものと思われ、口縁部がラッパ状に開く。口縁部内側に向いた連弧文を施している。内外面の文様はすべてヘラ描き沈線である。現時点では類例を見ないが、西部瀬戸内の影響を受けているものと考えられる。2～8は甕で、段・段+沈線・沈線のものが見られる。文様帶に伴う沈線を除けば、沈線は基本的に一条である。

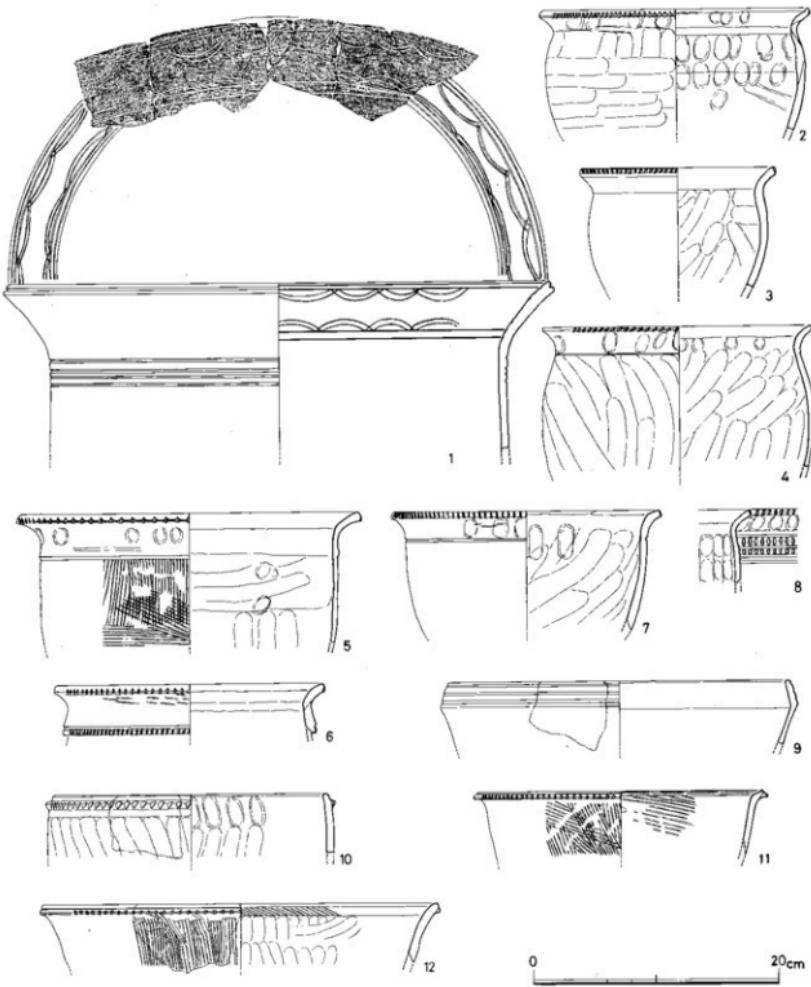
9～12は、繩文時代晩期の深鉢形土器の破片と考えられる。9は口縁部に凹線風の沈線をめぐらせており、やや古い様相と考えられる。10は貼り付け突帯に刻目を施す手法から、前池式<sup>(1)</sup>に相当すると考えている。11・12は類例を見ないが、前池式よりも後出のものであろう。なお、上層・下層には樋原式文様に類似したレリーフを持つ土器片の出土もある。

															22
															21
															20
															19
															18
															17
															16
															15
															14
															13
															12
															11
															10
															9
															8
															7
J	I	H	G	F	E	D	C	B	A						

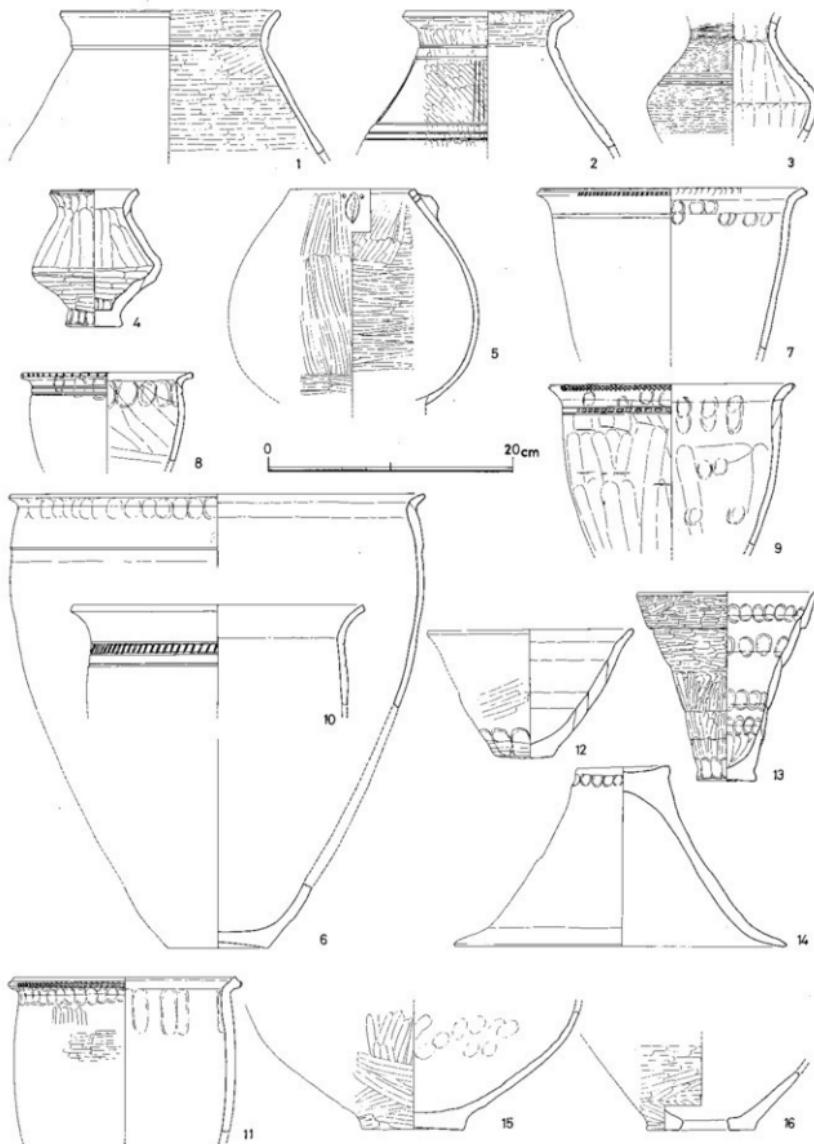
第104図 前期弥生土器出土個数分布図



第 105 図 前期弥生土器実測図(1)



第 106 図 前期弥生土器実測図(2)



第 107 図 前期弥生土器実測図(3)

第107図は、擾乱層から出土したものを抽出して図化した。13は鉢形土器であるが類例を見ない。

以上、図化した土器を中心に説明を加えたが、擾乱層中からは、典型的な削り出し凸帯・貼り付け凸帯を持つものが数点出土している。又、中部瀬戸内では前期後半から出現するであろう倒Lタイプの口縁を持つ壺も数点出土している。

この時期の土器以外の遺物として、土製紡錘車が5点程出土している。他にサヌカイトがコンテナ6箱程が検出されている。石器の大多数をしめるのはスクレイパーである。他に石鏃・石錐が見られる。

(真鍋)

#### 注

(1) 高橋 譲氏の編年観に従えば、最下層の土器をI-a期、下層・上層をI-b期としてとらえられよう。無軸木の葉文は昨年度報告しているように擾乱層中から10点程出土している。上層には一点も見られないで、最下層・下層に伴っていた可能性が高い。

高橋 譲「弥生土器一山陽I-」『考古学ジャーナル』No173 1980 ニュー・サイエンス社

(2) 南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」『私たちの考古学』7 1956 考古学研究会

## (3) 古墳時代の遺物

## a 製塙土器

大浦浜遺跡全体でのI・II類（第6章第2節）の製塙土器の出土状況は次の3つに区分することができる。

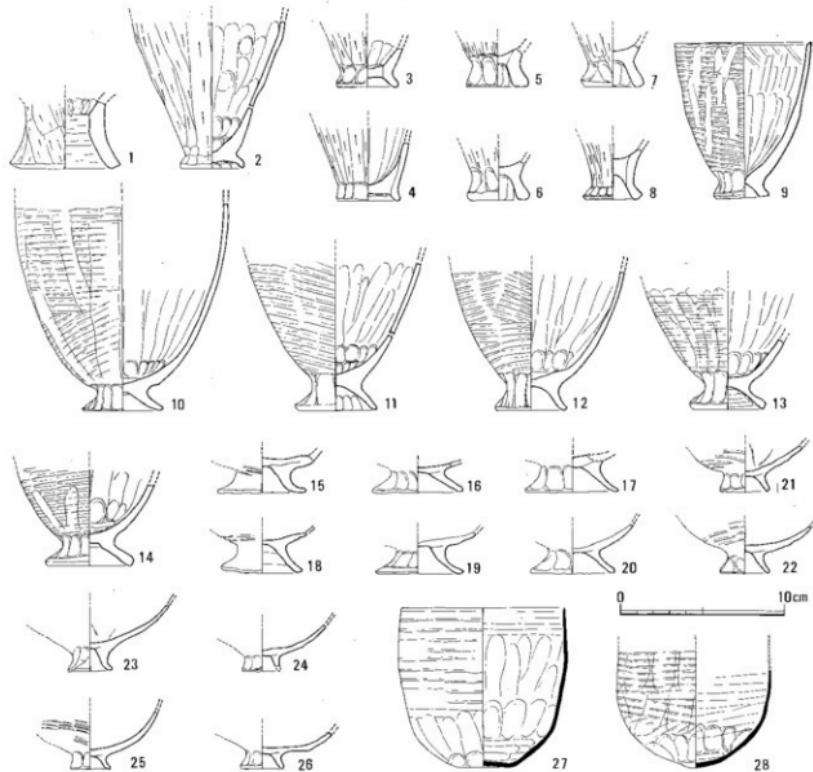
①土器群・土器溜と併出する。

②古式土師器の包含層に併出する。（ヤケヤマ東麓第4層等）

③土坑中に古式土師器と共に伴する。（E-14区SK1・G-15区SK1・予備調査III-10-X・Y区等）

これ以外に単独で出土するものも多く、濃淡の差はあるが、大浦浜全域で確認されている。

第108図1は、弥生時代中期末の仁伍式に比定される脚台である。内外面ともにヘラ削りが見



第108図 脚台付製塙土器実測図

られる。この時期のものは、浜全体で現在3点確認しているが、3点とも単独の出土である。

2~8は、A・B-50・51区の出土で、7点のみ図化した。この資料は同一層から出土しており、同層位には大浦浜I(第6章第1節)の土器が含まれる。脚台は3タイプに分けられる。Aタイプ-2~4は、低い脚台で外面は指頭圧痕を残す。Bタイプ-5~7は、倒壊形の脚台に近い。外面は指頭圧痕である。Cタイプ-8は、A・Bタイプに比べてスマートで外見脚台も低いが、相当のあげ底を呈する。このA~Cタイプは、体部外面をヘラ削りするが、脚部にヘラ削りが及んでいない点が注意される。

9は、大浦浜遺跡で叩きが採用された段階の資料で、少しだけ倒壊形の脚部を持つ。単独出土で、現在のところ浜では唯一の資料である。

10~14は脚部がやや扁平である。底径が広がる点に注目すれば、大泊三層式に相当すると考えられる。15~20は10~14よりも、より薄く広く開くもので、山田・原もしくはI-10類に相当するものである。21~26は脚部の退化現象にあるもので、脚台の縮少化は体部の器壁が薄くなつた点に起因する。

これらの資料の直後に、より小さな円柱形を呈する脚台もある。次の27・28に至る過渡期に位置づけられる。山田・原からI-11類の体部は27・28のようなコップ状を呈するものであつたと思われ、27・28の出現で脚台の時期を終了する。27・28の資料については、土器群と共に出土する他には包含層を形成しておらず、非実用的であるとの考え方もある。南東浜Iに類例を求めることができる。

古墳時代後期の製塙土器は砂浜の西半分の包含層から出土したものがほとんどで、遺構出土のものは極めて少ない。出土量は莫大で一部分しか整理はすんでいない。

今回は基礎的な分類作業を主目的として、G-6区の包含層の整理を行った。以下に、器形の特徴、叩きによる分類、叩き目による分類と器形との関係を述べることとする。

器形の特徴としては口縁部が外反する例は少なく、同一叩き目のものでもくびれ部が明確なものと不明確なものとの双方がある。外面は口縁部のみに叩き目を施しており、体部には指頭圧痕が顕著にみられる。また、あかぎれ状の跡が観察できる。内面は外面とは対象的に平滑にナデられ、口縁部に指頭圧痕が並ぶ。部分的に大変細かい刷毛がみられ、口縁部には僅かにあかぎれの跡が観察できる。

断面観察によると、口縁のくびれ部は肥厚しているが、これに比べて体部は薄い。胎土は石英・長石・金雲母を含有しており、長石は石英に比べて粗粒である。

ここでは、最も顕著に差異が認められる叩き目によって分類作業を試み、I~VII類、そして量的に少ないものをVIII類として8分類をおこなった。叩き目の説明は次のとおりである。

#### I類(第104図1~10)

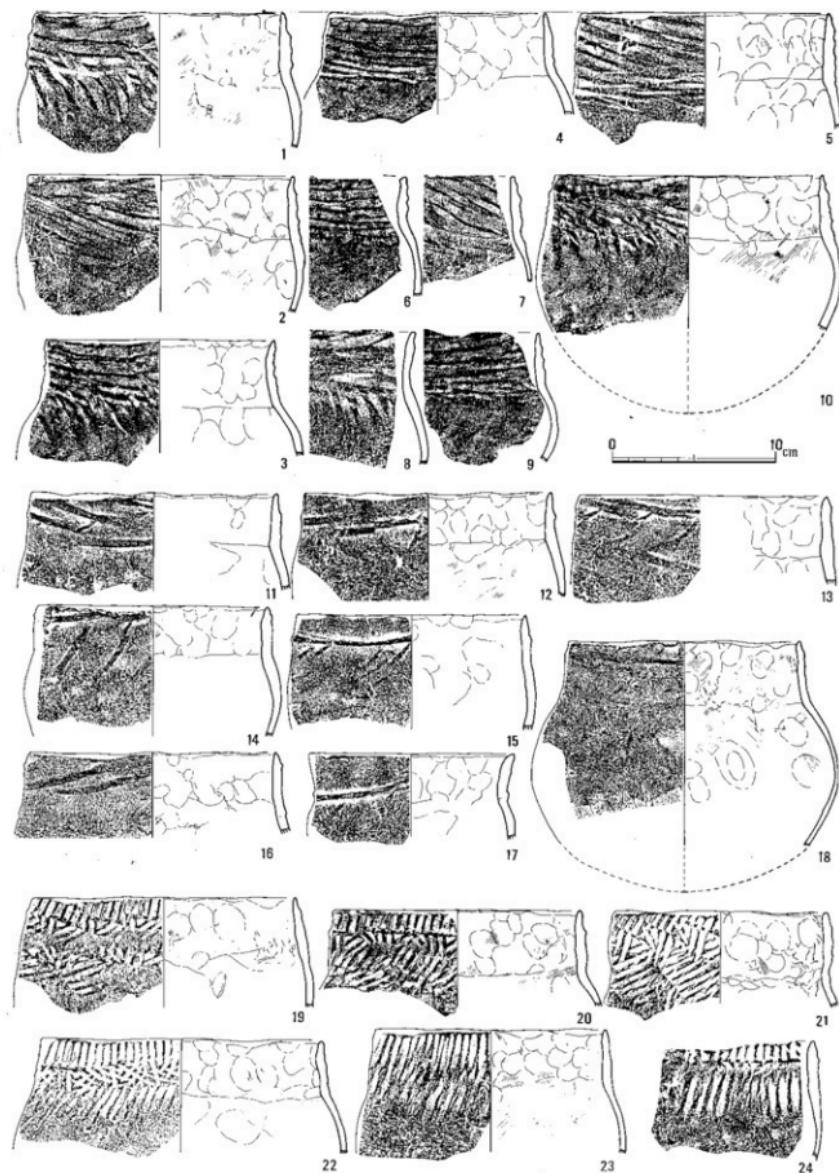
一般的に知られている形であり、当初最も多量に有ると考えていたがG-6区の結果ではII類に次ぐ量であった。平行・斜平行・2方向の直線がみられる。

#### II類(11~18)

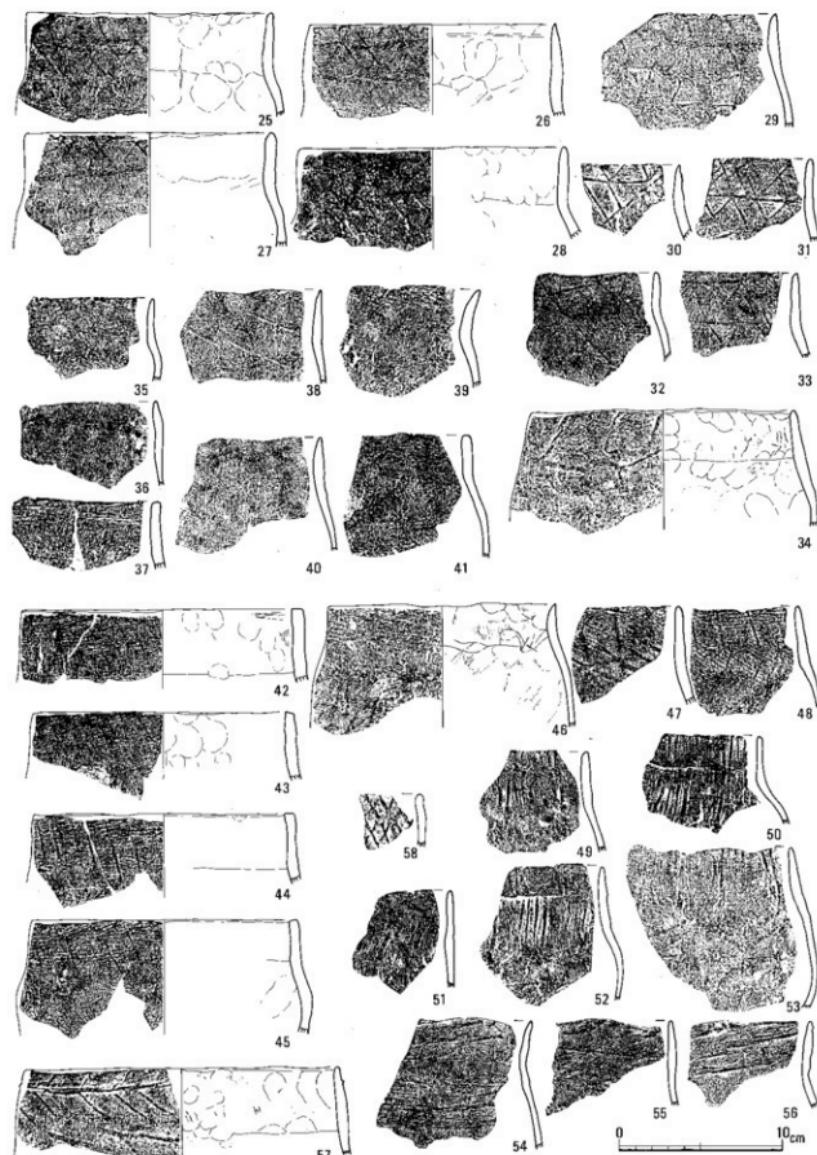
横方向の線は太くその下に下がる線は短い。全て2つの線は突き抜けることはない。また、それは直角ではなく左下がりの例しか現在の所みられない。

#### III類(19~24)

細くて間隔が密であり、口縁上方にみられる跡は複雑である。



第 109 図 古墳時代後期製塙土器実測図(1)



第 110 図 古墳時代後期製塩土器実測図(2)

分類	模式図			
I	\\\\\\	==	///\\	///
II	/	—	/	/
III				北北
IV	XXX	XXX	XXX	XXX
V	無文			
VI	====	=====	=====	=====
VII	+++	+++	TTT	++
VIII	□□□	□□□	□□	XXX ←←← / / /

第111図 古墳時代後期製塙土器叩き模式図

## IV類（第110図25～34）

全体的に叩き跡が薄くて不明瞭であるが交差している。横方向に走る線は位置が一定でない。

V類（35～41）

無文と呼んでいるが、叩き後ナデ消された可能性も無視できない。しかし、叩きの跡が観察されないため、叩きがあるものに対して無文の意味である。

VI類（42～48）

叩き、または板状工具によるものか判断が難しい。線の隆起、間隔の状態から板状工具と考える。

VII類（49～53）

格子状にみられるが、縦・横の線はつながらない。T・H状の組み合わせである。

VIII類（54～58）

今までの整理から少量なものを一括した。今後、整理が進めばその量が明確になるため分類が可能である。

以上、I～VII類とVIII類（その他）について分類を試みたが、製塙土器は全て破片であり施されている状態に規則性が認められるものの、一定の間隔で規則正しくみられないため全体の状況については、同一パターンの連続・同一パターンの組合せ・異なったパターンの組合せを考えられるが、原体の解明を含め全体の流れの方向性を一つの指標として理解することを今後の検討材料とする。

G-6区画内とG-18およびH-14の土坑から出土した製塙土器について口縁部から体部に至る彎曲率を求め、叩き目と器形との関係を考えてみた。計測方法は、口縁端部と口縁くびれ部を直線で結びさらにその延長線上2cmから直角に入る距離を計測値とした。くびれ部から2

cmとしたのは口縁部から体部に移る変化部分と考え、そこは器形が最も安定した部分であったからである。測点を求めるにあたっては、内外面の稜線を観察し左右上下に乱れる稜線については対象外とした。そのため土器片数に対して資料操作可能なものは限られてきた。また、同一個体を資料として扱ったことも十分考えられる。

資料数に限界があり不均衡がみられるが、1～3類については、0.8・0.7をピークとして正規分布を示す。V類は、1～3類に比べ資料数が少ないが0.9にピークが求められる。他は資料数が少ないため不明とする。また、口縁長は大半がくびれ部から3cm前後にあるが、土坑の1類は若干、高い傾向を示す。

この結果、大浦浜のG-6と土坑2基の古墳時代後期の製塙土器は、叩き目と器形の関係において、資料操作からは明確な差はなかったと言える。

第112図はD～R-27～40区出土の製塙土器である。口縁の比較的大きい破片を626点出し、そのうち48点の拓影実測図を掲載した。叩き目分類模式図のうち、III、IV、VI類はほとんどなく、I、II、VII類で約80%を占める。具体的な数値を羅列すると、I類41.0%，II類10.4%，V類8.6%，VII類20.1%である。

1～12はI類である。同じI類でも、叩き目の粗密、口縁に対して平行か否かなどで細分可能である。1～6は密で間隔が平均0.5～0.6cm、7～12は粗で1cmである。4、5、8は口縁に対して平行である。6は右下りの叩き直上に右上りの叩きを施している。

13～23はII類である。全般的にII類は破片が大きい。G-6区のものと比較すると、横線は短かくやや細いなど相異点がある。4章で述べたように、I-29区を核として集中箇所独自のものかもしれない。

24～29はV類である。無文のこのタイプはやや器厚の厚いことが特徴である。30～44はVII類である。短かい直線がT・十字に交差しているように見える。横長の格子文に属するかもしれないが格子文としては不規則性が優越している。VII類は大浦浜遺跡のどの地区でも見当らないことなどから、G-34～35区を核とする集中箇所独自のものかもしれない。破片も大きい。

45～48はその他として掲載した。

(真鍋・町川・東原)

#### 注

叩きの効果は、気泡を出し器壁を均一にする。そして、叩きしめ強固にすることから製塙土器にみられる叩きについては、海水を入れた容器が最も火力を受ける口縁部を意識し、そこから崩壊するのを防ぐためであったと考える。そのことから口縁部を作り出す目的か、結果的に口縁部が形成されたものかについては、後者の意味で理解している。

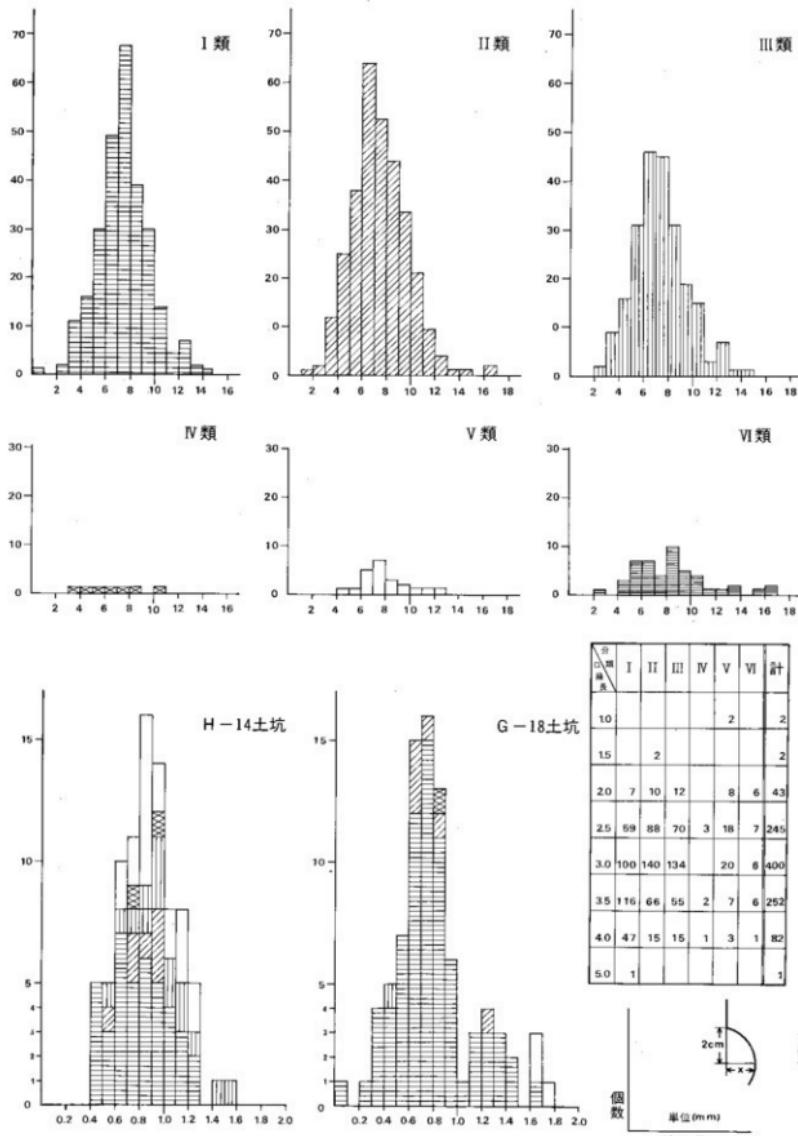
#### 参考文献

「広江、浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号 1979 倉敷考古館

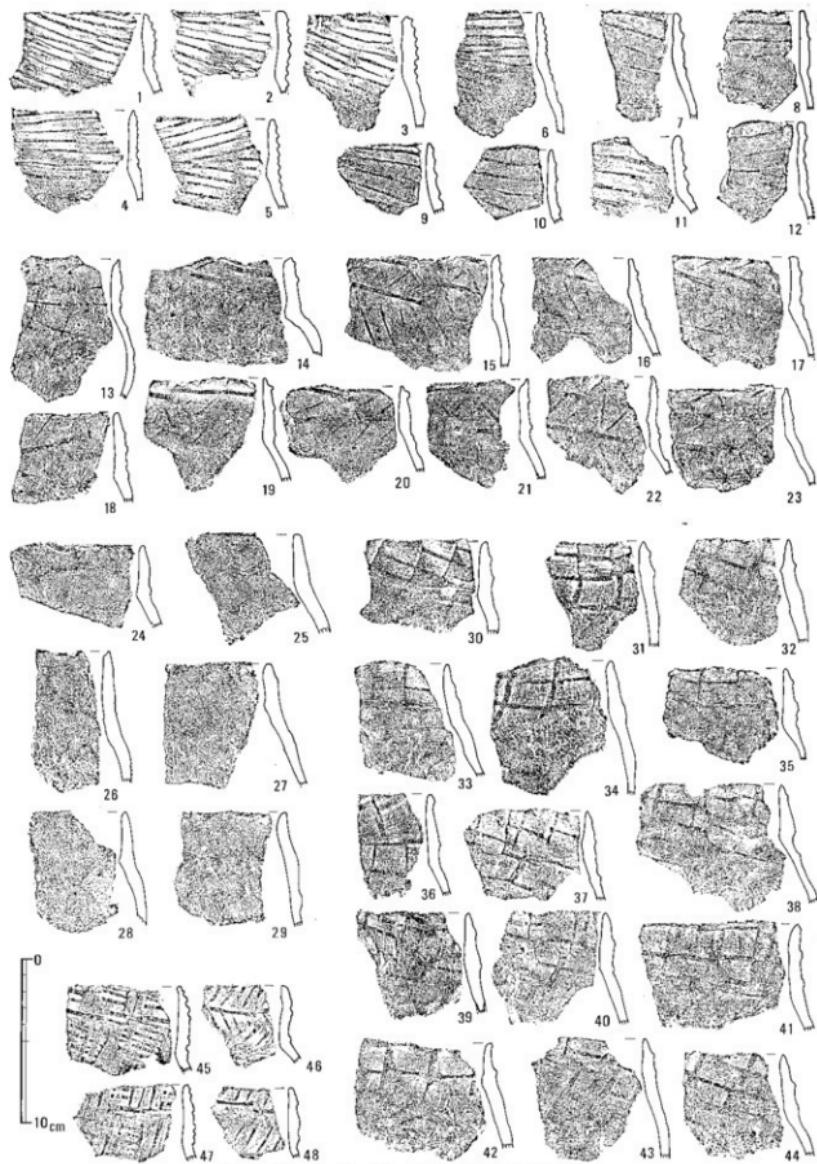
#### b 須恵器

古墳時代の須恵器は、平面的には大浦浜全域の広範囲から出土した。層位的には主に擾乱層から、地域によっては第4層からも出土した。また遺構に伴ったものもある。さて、今回の概報では、D～R-27～40区、A～H-51区出土の須恵器24点を掲載した。器種は蓋杯、高杯、壺で全て、中村編年I、II形式に該当する。

1～9は蓋杯(蓋)である。8、9が形状小形、手法雑という特徴からII形式6段階に属するほかは、統じてII形式4段階であろう。ただ5は口縁端部の特徴、出土層(4層)からやや



第4表 古墳時代後期製塩土器計測表



第 112 図 D ~ R - 27~40 区出土製塙土器実測図

先行するかもしれない。

10~21は蓋杯（身）である。10, 11は形状半球形、口縁部の特徴から、I形式4~5段階、21はたちあがりが形骸化しているからII形式6段階に属するであろう。他はII形式4段階であろう。ただ19はたちあがりの様相からやや古式かもしれない。

20は口径が18.0cmの大型杯身である。

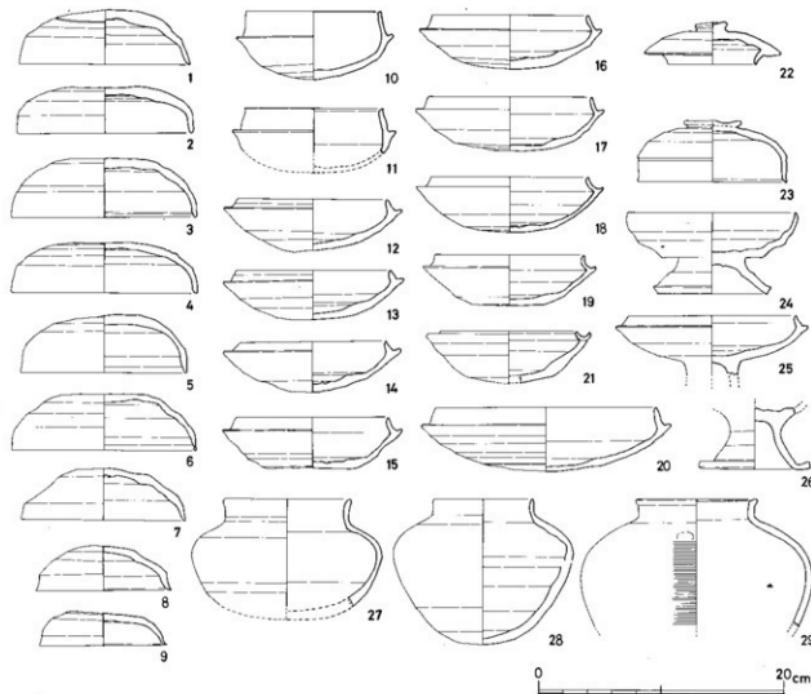
7と15はG-30区第2層においてセットで出土した。

8, 9, 21はA~H-51区の出土である。A~H-51区、特にB~C-51区では6世紀終末期の土器が比較的多い。

22は壺の蓋であろう。

23~26は高杯である。23は小型有蓋高杯の蓋である。扁平なつまみを天井部に貼り付けている。口縁端部、天井端部の沈線などからI形式4~5段階に属するであろう。24, 26は無蓋短脚高杯である。25是有蓋高杯である。杯部は同時期の杯蓋を転用した形である。スカシ窓を有し、基部の細い、外反する脚が付くであろう。

27~29は短頸壺である。29は肩部から胴部にかけて、カキ目が施されている。



第113図 古墳時代包含層出土須恵器実測図

昨年度來の継続調査のため、遺物は山積している。須恵器の出土量も増大しているが、まだその一部しか整理できていない。今後、須恵器個々の分析、検討はもちろんだが、より巨視的な立場から、大浦浜遺跡全体にしめる須恵器出土の意義を究明し、遺跡の性格をも解明しなければならない。

(東原)

#### 参考文献

『陶色III』大阪府文化財調査報告第30輯 1978年 大阪府教育委員会

#### c 古式土師器

大浦浜遺跡での古式土師器の出土状況は、次の二通りがある。一つは、I・J-12~22列で検出した土器群、G-11区土器溜などで構造として取り扱えるもの。二つ目は、F・G-5~8列第4層、A・B-50・51区第3層、ヤケヤマ東麓地区第4層などのように包含層として把握できるものである。ここでは主として包含層出土のものを取り扱った。

第114図1~10は、A・B-50・51区第3層出土の土器である。第3層は1~3に分層して取り上げられた。第3層1はやや新しい様相のものを含むが、第3層2・3はほぼ同時期のものと考えている。

11はヤケヤマ東麓第4層出土のもので、この地区の中では一番古い様相を持つものと考えられる。

12~15は、G列出土のもので、E~Gの第4層出土のものが13、第5層出土のものが14・15、第6層上面のものが12である。15は、脚台であるが、手づくね土器のようであり、製塩土器のつくりに近い。

第115図1はF列第4層出土で、吉備系の高杯である。才ノ町II式~下田所式に比定される。F・G列-第4層の中では最も古く位置付けられる。

2~3は小型丸底壺、4は小形の甕である。4の様相からすれば、大浦浜遺跡の土器群中第5土器群が最も古い様相を持つ土器群で、畿内色が強いと言える。5~9は第4土器群の高杯で、中でも5~8は折り重なって出土しており、同時期の様相を見るうえで重要な遺物である。又、他の高杯に比べてやや大形である。

(この項では、第6章第1節で区分した「弥生後期末」「古式土師器」を、説明の都合で「古式土師器」に統一した。)

(真鍋)

#### d 祭祀関係、その他遺物

祭祀関係、その他遺物を19点掲載した。5・10・15・18を除き今年度出土した遺物である。それぞれの出土地点、層位は一覧表に掲げている。出土地で特徴的な点はF列に点在していることである。F列といえば、古墳時代には砂洲状地形の微高地である。

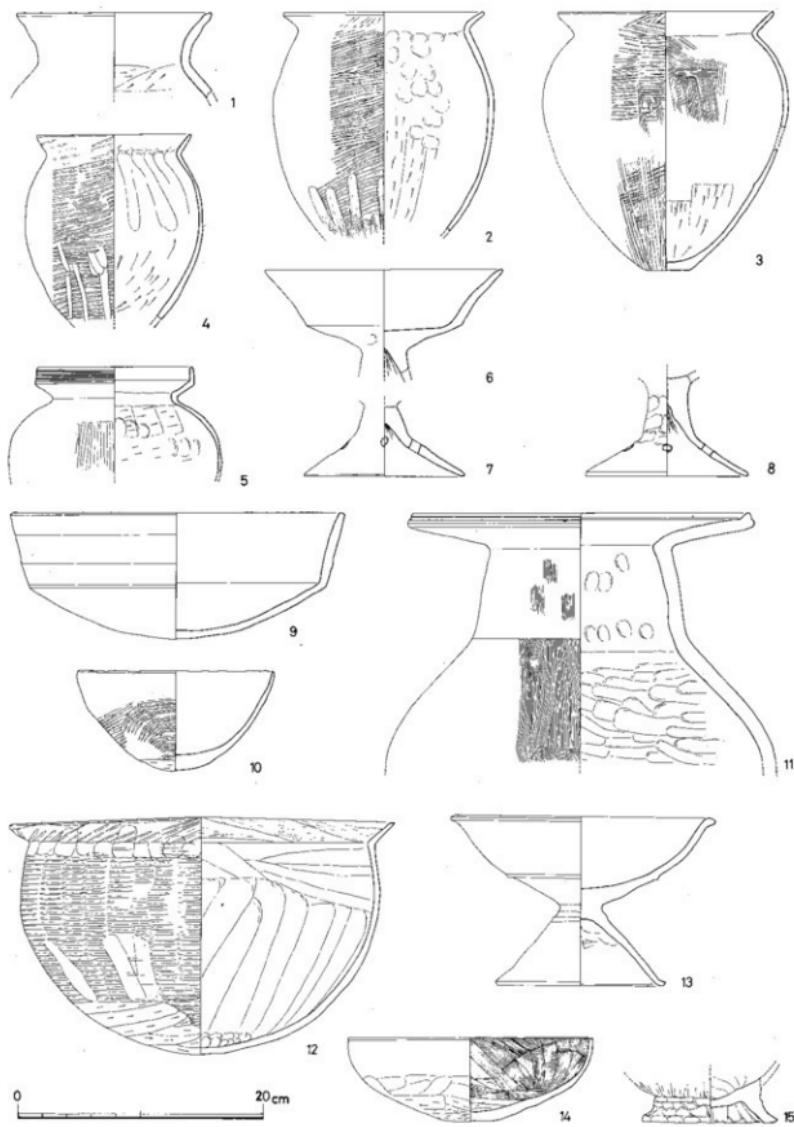
1~9は石製品、10~12は金属製品、13~19は土製品である。

1・9は砾石であろう。1は、にぶい橙色で非常にきめの細かな石材を板状鍵形に整形している。一端に両側から孔を穿ち、携帯用とした提砥であろう。9はやや黒っぽい石材で角状に整形した一端に、斜め方向から穿孔している。

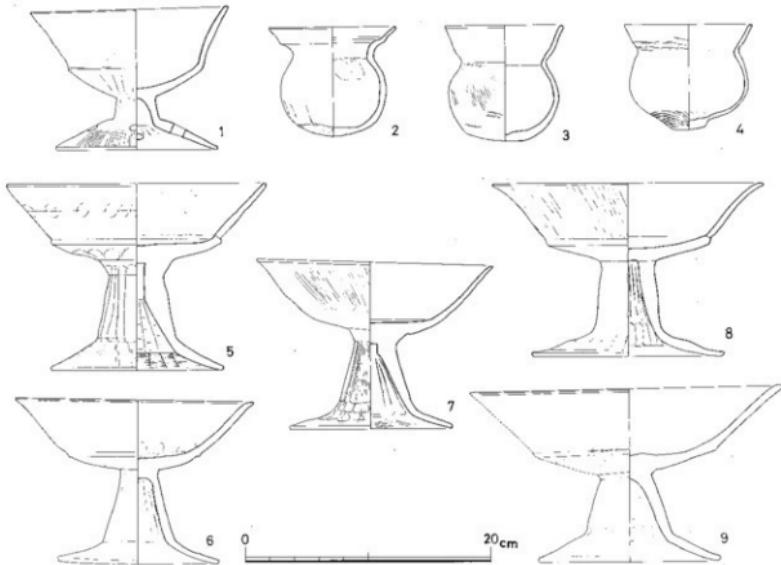
2は滑石製模造品で、2個の小さな孔のうち1個は貫通孔である。用途、性格は不明である。

3は滑石製の有孔円盤で、中央に小さな2つの孔があけられている。

4も滑石製の模造品で、中央に一つ小さな孔があけられている。勾玉を模したものだろうか。



第 114 図 古式土器実測図(1)



第 115 図 古式土器実測図(2)

5・6は截頭円錐形の紡錘車である。5の斜面・底面には鋸歯文の線刻がみられる。6の斜面は削り跡が顕著である。

7は勾玉で、表面の風化が著しいが石材は碧玉と思われる。

8は碧玉製の管玉である。

10は銅製の耳輪で、表面の鏽が著しく、メッキは、剥落している。

11は柳葉式の鉄鎌で鎌ははっきりしない。籠代の部分に根太巻が残る。

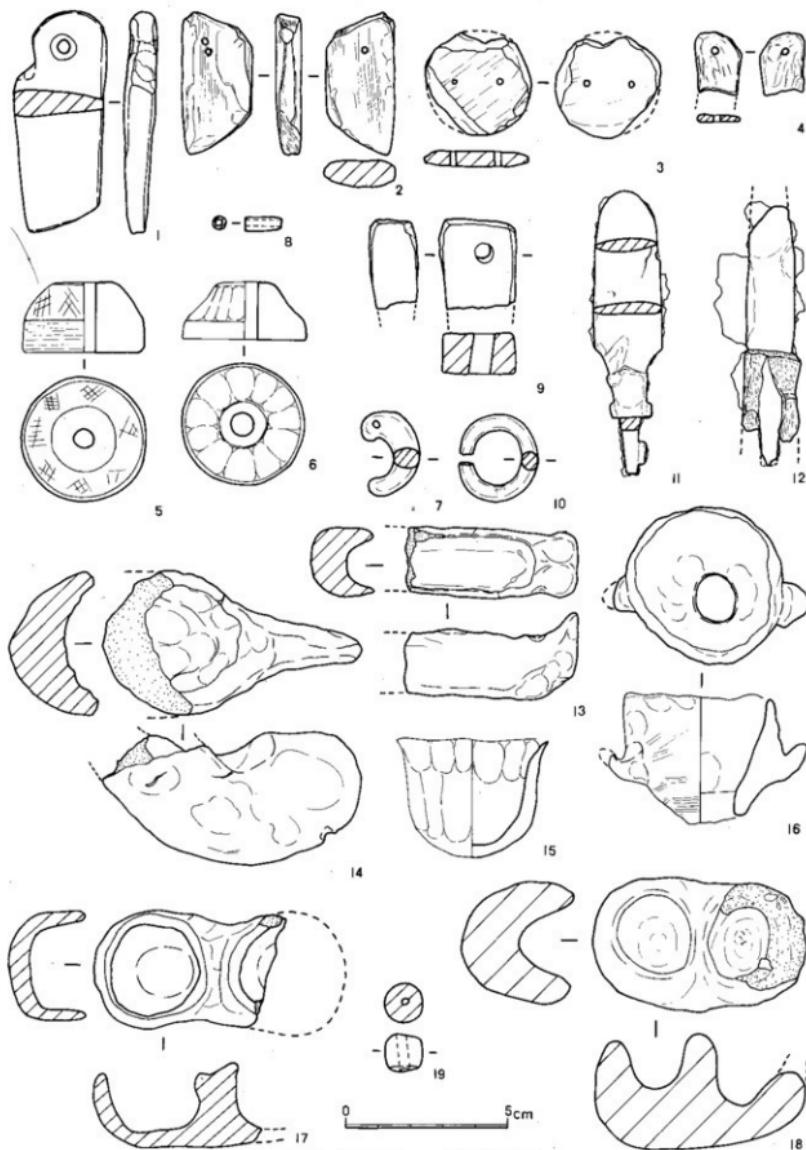
12は鉄製の刀子である。鹿角製の刀子把を有する。

13・14は船形土製品で昨年度の5点と合わせて、大浦浜遺跡では計7点になる。ともに折損していて、その全形は不明である。13の船底は丸味のある平底で、船腹はふくらみがなく、船底に対し垂直である。全体的に角張った感じで、船首を軽くつまみ上げるタイプである。14は赤褐色を呈し、船首を大きく上へ造り出したゴンドラ型で船底は丸底である。大型で重量感がある。

15は、手捏のミニチュア土器である。16は口径4.5cm、器高4.0cmのミニチュア瓢形土器である。外面は指頭圧痕上に刷毛目調整するなど実用品同様の整形手法を採用している。取っ手の一部が折損している以外、ほぼ完形である。県内での出土例はなく初見である。

17・18はあたかもミニチュアの壺が2個くついたよう、円形の凹みを2個有する。器厚の違いはあるが、形状、大きさなどは類似している。用途、性格は不明である。

19は土玉で、上面円形、横面隅丸方形である。中央に小さい穴が通る。



第 116 図 祭祀関係・その他遺物実測図

第5表 祭祀関係・その他遺物一覧表

古物番号	項目	名 称	材質	出 土 位 置
1	提 砥	石	F-29 区 第2層	
2	模 造 品	滑石	H-30 区 第3層	
3	有 孔 円 板	滑石	ヤケヤマ東麓 J-3 区 第4層	
4	模 造 品	滑石	B-51 区 第2層下	
5	紡 錐 車	滑石	J-16 区 第3層下	
6	紡 錐 車	滑石	F-33 区 第2層	
7	勾 玉	碧玉	C-12~13 区 SX 15	
8	管 玉	碧玉	E-11 区 第3層	
9	砥 石	石	F-14 区 SK01	
10	耳 環	銅	J-21 区 第2層	
11	鉄 繖	鉄	F-33 区 第3層	
12	刀 子	鉄	G-31 区 第3層	
13	船形土製品	土	F-31 区 第2層	
14	船形土製品	土	F-30 区 第2層	
15	ミニチュア壺	土	G-9 区 第3層	
16	ミニチュア壺	土	F-28 区 第2層	
17	不 明	土	H-51 区 第2層	
18	不 明	土	H-8 区 第2層	
19	土 玉	土	H-30 区 第3層	

遺構に伴うものは7・9だけで、他は擾乱層出土であるため、ほとんど時期は断言できない。  
しかし、擾乱層の他遺物から判断して古墳時代の遺物であると思われる。 (東原)

## 参考文献

松本敏三「備讃瀬戸で発見の祭祀遺物」『香川の歴史』第1号 1981 香川県



第 117 図 勾玉出土状態

## (4) 古代の遺物

## a 製塙土器

奈良時代を中心とする製塙土器の包含層は浜の南部の海岸線にそって南北に細長く広がっていた。海岸線にそって発掘できたのは26列まであるが、16～26区は大正年ぐの砂取りで破壊されていたため、包含層の北限は確認できていない。広がりを確認できたのはB～D～3～15区の範囲である。

包含層の厚さは40～60cmで、3層（第3・4・5層）に区分できたが、第4層はC・D～4～7区のみに広がる層である。

出土量は第3層が最も多く、次に第5層となる。第4層が最も少なく整理箱15箱である。以下、各層位ごとの製塙土器について述べていく。

## 第5層出土製塙土器（第118～120図）

C・D～9～14区第5層の資料について述べる。この層に含まれる製塙土器は、叩き目の有無で大きく2つに区分できる。

叩き目のある土器は、さらに厚手で大形のものと、薄手で小形のものに分けることができる。大形は復原口径15cm前後、推定器高13cm前後で、小形は復原口径11cm前後、推定器高10cmぐらいのものである。両者とも完形品ではなく、口縁部5～7cmの破片から復原したため不安定な要素は残る。

大形のものの器壁の厚さは平均3.7mmで、小形のものは3.0mm前後のものが多い。厚手で大形を1類、薄手で小形のものを2類と呼ぶことにする。

1類に属するものは、第118図1～29である。1～9は平行の叩き目で、凸面と凹面の幅に違いがみられ、将来細分か可能かもしれない。口縁部はわずかに内外反する程度で直立に近いと思われる。体部はあまり肩が張らず、1のようにくびれているものや、8のようになじみの多いと推定される。

10～20は矢羽状の叩き目をもつものである。口縁部の特徴は平行叩き目のものと大差ない。21～29は平行線の中に縦に短いつなぎの入る叩き目のものである。

上記三種類の叩き目のうち前二者は古墳後期に多いものであるが、後者のものはみられない。次に2類に属するものは第118図30～41、第119図42～92である。30～41は平行もしくはそれに近い叩き目のもので、さらに細分できる可能性がある。I類のものに比べる叩き目の凸凹が少なくなっている。口縁は内彎傾向をもつが、36のように外反するものもある。34～41は古墳後期にはあまりみられない叩き目であろう。

42～53はハケ目状の細い叩き目をもつもので、口縁は内彎するものが多い。

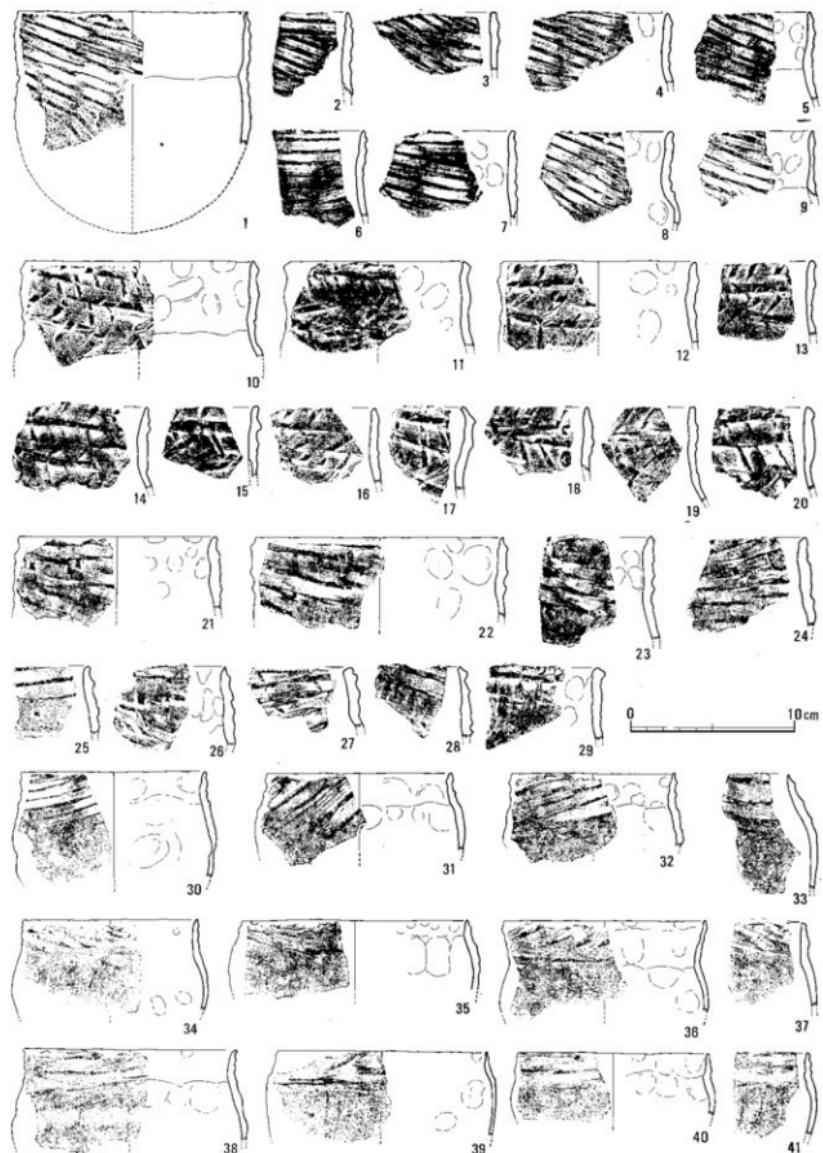
54～63はくの字の叩き目をもつもので、球形に近い体部になると思われる。

64～70は方形格子のものであるが、64、69は十字形を連ねたようで、66、67は縦長で、68は横長格子である。70は平行線に部分的に短い縦つなぎが入っている。

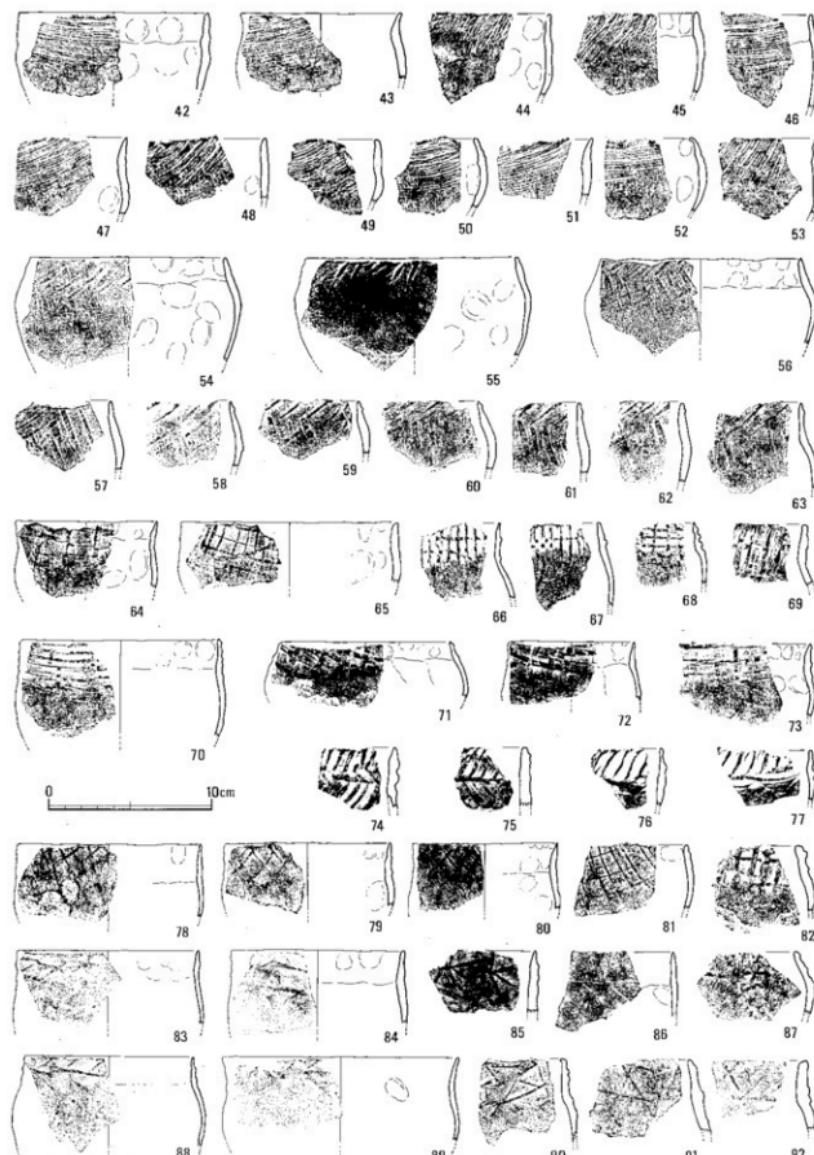
71～73は十字形が連続したような叩き目である。74～77は矢羽状のもので、厚さを重視すると、74、75はI類に属するものだろう。

78～82は、斜め、もしくはそれに近い格子目のものである。

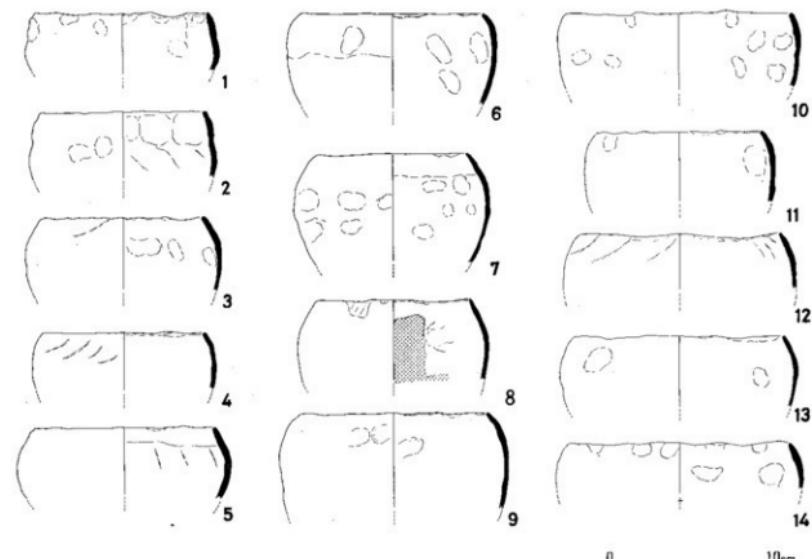
83～92は上記以外のいろいろな叩き目を集めた。86は、いわゆる叩き目ではなく、細く短い



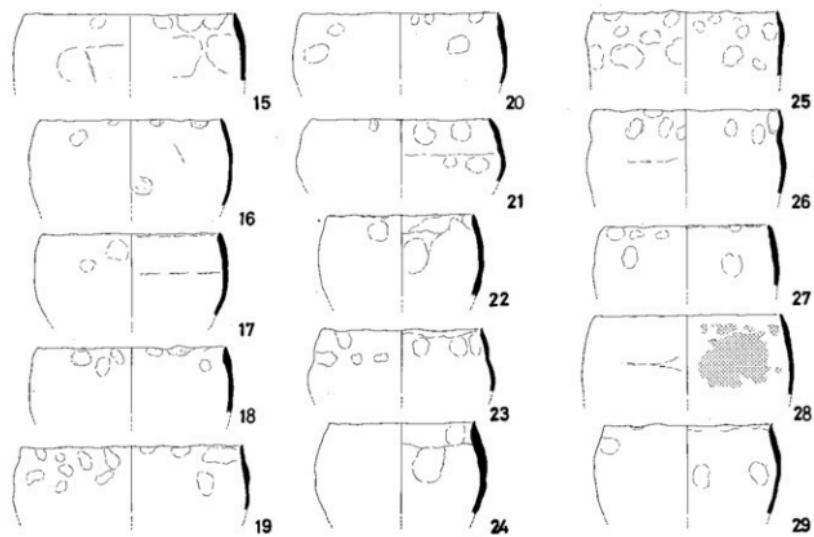
第 118 図 第 5 層出土塙土器実測図(1)



第 119 図 第 5 層出土製塙土器実測図(2)



0 10cm



第 120 図 第 5 層出土製塙土器実測図(3)

沈線か斜め方向に走っている。85, 91, 92は厚みを重視するとI類に属するものであろう。

以上叩き目をもつ製塙土器は、古墳後期のものと比べると、よく焼けているため色調は明るく軽い感じがするのが特徴である。

さて次に叩き目ない無文のものにうつる。第5層出土の製塙土器は、量的には無文のものの方が多い。まず一般的な特徴を述べると、胎土は木目細かく良置されており、砂粒はあまり目立たない。色調はうす黒い赤褐色のものが多い。内外面に指頭痕が多く残るが、内面は指頭で丁寧に調整されており、平滑になっている。器壁の厚土は3mm前後である。復原口径は10~11cmのものが多い。

口縁の内弯度を基準に、3類と4類の2つに区分した。

3類は内弯度の強いもので、内弯度を数値で表現すると次のようになる。

土器内面を利用して、口縁端部から5cm下の点に向けて垂線を降ろす。そして口縁端部から何cm下で最もカーブが強くなるかを計測すると、2, 3cm下で最もカーブが強くなり、カーブの深さは0.6cmのものが最も多い。

第120図1~14は3類に属するものである。口縁端部が内側に曲りこむような形で、体部は丸味をもち、楕円形に近いものになると推定される。6, 7, 9, 11などが典型的な形である。

4類は、内弯度の弱いもので、前述の計測法で表現すると、口縁端部から3.0cm下の点でカーブが最も大きくなり、カーブの深さは0.4cmというものが最も多い。つまり、3類に比べ屈曲点が下にさがり、曲りの度合が少なくなっている。第120図15~29がこの4類に属するものである。16や28がこの類の典型的なものである。

ところで、4類は第5層出土という枠の中で、内弯度の強い3類を除去した残り製塙土器という性格をもっており、これ以外の特徴は見出しえない。そのため、4類の内弯度は後述する第4, 3層の製塙土器の内弯度と差がないため、両者を区分することは難しい。

さて、第5層出土の口縁部についてみてきたが、底部と見分けがつくものは見合たらなかつた。尖底のものは数点出土しているが、口縁部の数と比べると極端に少なく、第3層の混入と考えた方がよからう。恐らく第5層の製塙土器の底部は丸底とみてよからう。

#### 第4層出土製塙土器（口縁）（第121図）

第4層より出土した製塙土器の出土状態は破片ばかりである。口縁部は残りがわかるが、胴部以下については形態がわかるほど残存はよくない。全重量は約110kgである。出土した製塙土器は小破片が多数を占め、口径復元の可能なものは数が限られており、図化できるものは僅かである。出土した口縁は第5層で確認したタタキ目を巡らす2類から、尖底をもち口縁が内弯すると思われる破片までと、特定のグループに入らない幅を持ち、第4層形成の時期を製塙土器の形態から考えると、ある程度の時間的広がりをもっていると思われる。

胎土は1~2mmの微砂粒を含み、色調は外面が茶褐色、内面が赤みがかった茶褐色というのが主流を占め、中には部分的に変色がみられる破片もある。表面は肌荒れしており、壁面が剥離して脆くなっている。また内外面に吹きこぼれの物質がこびり付いており、第5層のCタイプ以外は端部の形態は歪つてあり波打っている。また調整は指によるナデを無雜作に施している。このため確実な分類方法を見つけられなかった。

そこでまず第4層出土製塙土器の口縁のうち、第5層の3・4類を除外した。そして残りの破片について口縁がもっとも彎曲する部分の器厚を分類の指標として3つのタイプを抽出した

。これは絶対のものでないが、この方法により3つの型として設定できたので、今回はとりあえずこの方法で第4層を分類しておく。

1～8は第5層で確認した3類である。復元口径は10～11cmとなる。薄手で彎曲点の器厚は3mm前後である。2のように白い吹きこぼれの付着も目立つ。端部はやや内側にまがっている。調整は口縁端部までナデ上げた後に、端部を指で整形している。6は彎曲点が2つあり、内面には稜線がみられる。4は指頭圧痕がほとんど残っておらず、ナデ消している可能性がある。

9～21は彎曲点3.0～3.4mmの破片である。口径は10～11cmである。15は口径12cmを越える。第4層におけるこのグループの占める割合は3・4類を除けば破片数としては、もっとも多い。形態としては3・4類と同様の丸底を成すと思われるが確定はできない。9は尖底を持つ可能性がある。一方端部の調整は無難作にナデを施しているが、一定方向のものはない。彎曲点から端部にかけてはやや肥厚する器厚が目立つが、一般的の傾向とはならない。

22～28は彎曲点における器厚が4.5～4.9mmである。口径は10～11cm前後である。破片数は前者のグループほど多くなく約半分である。形態を示すものとしては23・24のように丸底と思えるものから、25・27・28の尖底を思わせる破片もある。

29～32は彎曲点の器厚6.0～6.4mmのグループである。破片数としては第4層のうちではもっとも多い。形態は丸底の可能性をもつ31以外は、全て尖底の形態を示す。口縁は32以外は彎曲点から端部に向かって、ほぼ同じ器厚である。調整は他のグループと差異はない。

#### 注

- (1) 今回試みた分類方法として、口縁の彎曲点における折れ曲がりの彎曲の度合い・口縁端部の形態・調整・胎土分析などを挙げたが、いずれも千差万別もしくは差がなかった。
- (2) 今回では口縁の形態分類が発見できなかったこと、破片が小さすぎるなどから、4類が後者の3タイプに混入している度合いが強い。よって本稿では、あえて4類としては特に図化しなかった。今後の課題としては、4類を正確に抽出できる指標づくりが必要となろう。
- (3) 器厚測定にはマイクロキャリバーを使用した。

#### 第3層出土製塙土器口縁（第122図）

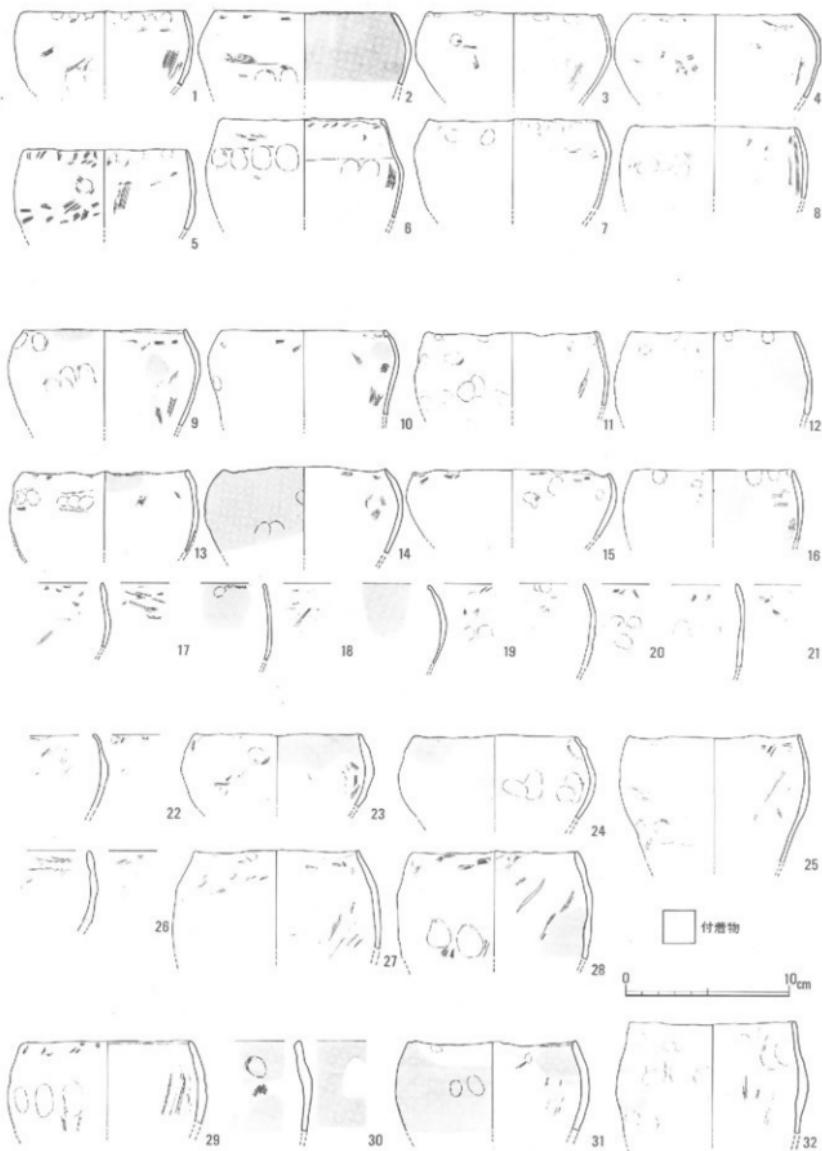
第3層から出土した製塙土器は220kgである。遺構より出土した製塙土器に比べ破片は小さく、磨滅しているのが目立つが、第4層から出土した破片よりは大きい印象を受ける。

出土した破片は、古墳時代後期の口縁にタタキ目を巡らした厚手のものから、奈良、平安時代の尖底を持ち口縁が内彎するタイプのものまでと時代幅として広い。

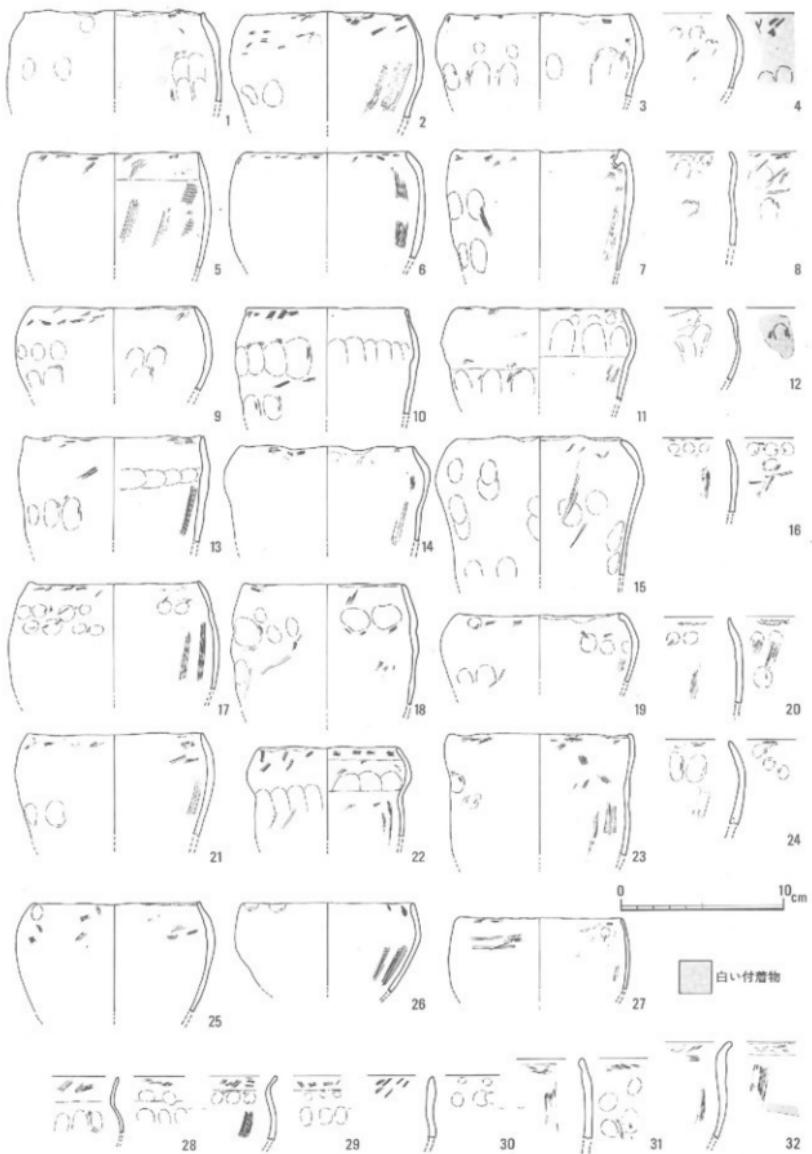
第3層は上・下層に分けられるが、形成期を8～9世紀代と比定しているので、これ以外の時期の製塙土器は混入の可能性が高い。

1～24が奈良・平安時代初めの製塙土器のタイプと思われる口縁である。これを更に彎曲点の器厚よりI・II類と分類したが、便宜上I・II類としただけでタイプとして独立するものはない。

さて、I・II類に共通する一般的特徴を挙げておく。胎土は第4層及び遺構出土破片と変わりがなく1～2mmの砂粒を含んでおり、金雲母の含有も南端の調査区の破片ほど目立たない。色調は外面が茶褐色・内面は赤茶色である。部分的には淡いピンクや橙色に変色している破片



第 121 図 第 4 層出土製塙土器実測図



第 122 図 第 3 層出土製塩土器実測図

もある。表面は肌荒れが目立ち、砂粒が剥落していたり、器壁が剝離している破片が多数を占め、二次焼成を受けたことを示している。灰色の吹きこぼれを付着させた破片もあるが、第4層ほど数は多くなく、露骨な吹きこぼれというのも見られない。口縁端部は無雜作に整形されており、波打っているのが多く、第5層や南端区に比べて手法は荒いと思える。ナデ方向は端部までナデ上げているのが共通であるが、端部を内に折れ曲げた後のナデ方向は任意である。内面のナデが丁寧である。成形は粘土帶の積み上げと思われ、指頭圧痕が表面に目立ち、第4層よりも顕著にわかる。南端調査区に比べ焼きは良好である。尚、復元口径は10~11cm前後である。

1~12の彎曲点における器厚は4.0~4.4mmであり、これをI類とした。I類の破片は数がもっとも多く、II類と合わせると破片数の約50%を占める。口縁端部の整形には規則性が全く見られず、歪な形態を示し、器厚もバラバラである。また1・3のように吹きこぼれの付着しているものがある。器形は尖底と思われるが、9の様に丸底を思わせる折れ曲がりの破片もある。しかし、破片が小さいため断定はできず、尖底が大半を占めるという事実は動かない。調整は内面ではナデ上げられ器壁の平滑化が図られている。折れ曲げの際の指頭圧痕が目立つものもあり、ナデが十分でなかったのだろうか。

5・11のように折れ曲げの稜線が出ているものもある。7の端部は歪つてあり波打っており、任意の整形がもっともよくわかる。

II類は13~24である。彎曲点の器厚は4.5~4.9mmとなる。I類に比べ口縁全体の器厚がやや厚くなっている印象を受けるが、計測上差異はほとんどなかった。器形は尖底とみてよいが、破片が小さいため断定はできない。成形・調整ともI類と変化ないが、指頭圧痕の残りが内外面ともに顕著になっている。22は整形後、さらに内面の彎曲面を横ナデしている。

28・29は第5・4層にも出土しなかった口縁部を外に折り曲げた形態を持つタイプである。破片が小さく、器形復元ができなかったので、尖底・丸底のいずれの形に属するかを判断するのは危険である。破片数が少なく、製塙土器かどうかは疑問であるが、技法上製塙土器と同じ手法を用いており、南端地区出土製塙土器との関連上、製塙土器として今回は考えたい。胎土は1~2mmの砂粒を含み、色調は他の製塙土器と同じである。吹きこぼれの付着する破片もある。器厚は3~4mm前後となる。技法上I・IIなどの内彎と異なる点は、口縁部の外彎のみである。30~32は器厚が7~8mmの厚手の口縁で、しかも内彎しているタイプである。口縁が内彎するタイプでこれほどの厚さを持つグループはなかった。しかも第3層抽出中の1割近くを占めている。そこでこのタイプも厚さ以外は、この第3層中の製塙土器と同じ手法なので、一応製塙土器としておく。器形は小破片のために不明である。32は端部を外に折れ曲げている破片で、抽出した中では唯一のものである。25~27は第5層の3類である。先に述べたように混入の可能性の強いグループである。

#### 注

- (1) 第3層の半分は未整理である。また第3層は出土遺物によると上・下層に分かれるが、製塙土器の手法・形態などに差はないため、本稿では第3層を一括として整理した。
- (2) 長岡京より出土している製塙土器と似ているが、より詳細に比較したい。  
百瀬ちどり「向日市埋蔵文化財調査報告書第4集」向日市教育委員会1978

### 製塩土器尖底部（第123図）

本年度調査区において、第3～5層より出土した尖底部の個数は約1000個を数える。そのうち第3層より大半の約930個が出土し、第4層より約90個、第5層より約40個出土した。まだ3層及び5層については未整理の分が約半数ほど残っているので、この個数は増加すると思われる。

尖底部の形態・技法などは各層ともに差がないので、共通する特徴を述べてみよう。肌荒れが著しく、器壁より砂粒が剥落し、また器壁が剝離している状態のものが多い。胎土は口縁同様に1～2mmの砂粒を含んでいる。外面は黒ずんだ茶褐色が共通の色調であるが、内面は白色・灰色・赤褐色などあり、部分的な変色もある。これにより二次的な焼成の可能性もある。

底部の立ち上りの緩急は40～44°までがもっとも多く、先端の形態は多様である。調整は先端部まで指頭圧痕が残っている。内面はヘラ状工具による圧痕を施しているもの、指による圧痕を残すもの、また両者の調整を合わせているものに分かれるが、層位的に分離できない。ただ確認した調整を破片数で比較すると、指による圧痕が90%を占め、ヘラ圧痕は10%に満たなかった。成形は尖底部を指先で捻り出したグループと、半円状の底部をつくり、それに先端部を貼り付けて接合するグループとがある。この後者の種類は尖底個数のうち約10%前後であるが、断面を半截して詳細に観察すれば数は増加する可能性が高いと思われる。

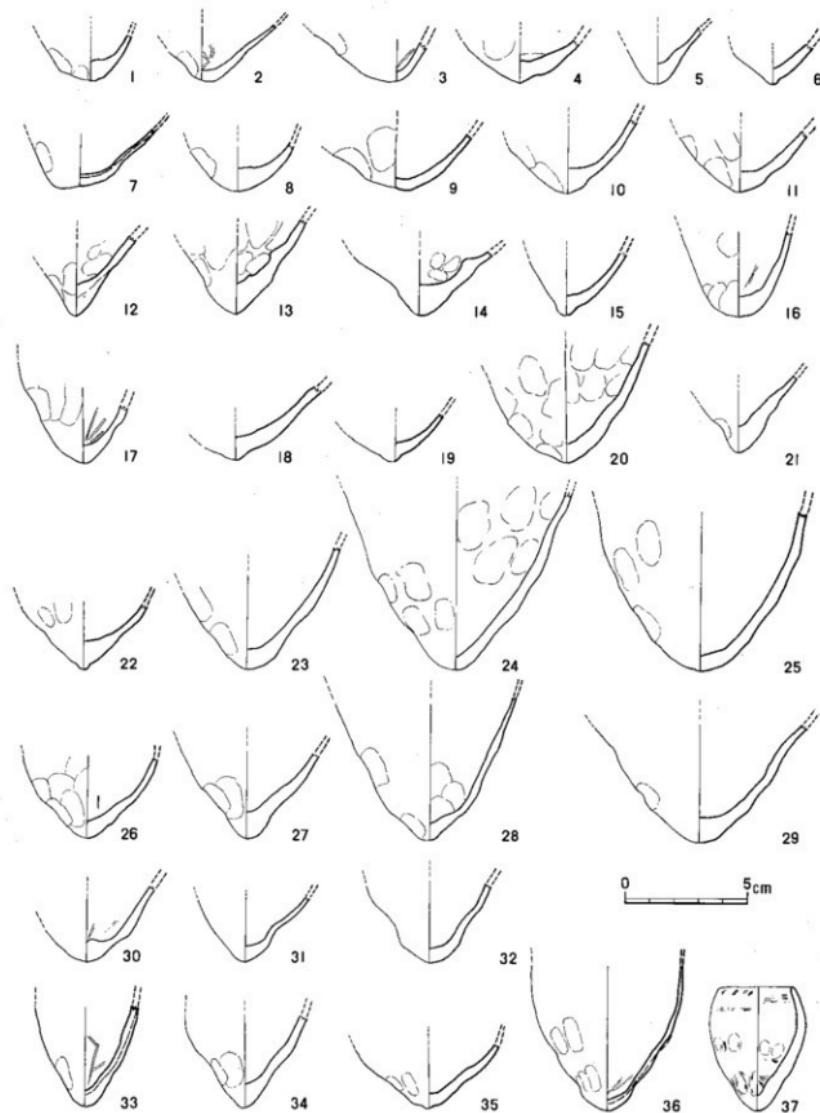
1～29は第3層・30～32は第4層・33～36は第5層よりの出土である。このうち第5層の出土尖底であるが、約40個のうちB-4～8区に99%まで集中して出土していること、その地区の第5層が上層の混入による擾乱の可能性が高いこと、さらには尖底部の形態・手法などが第3・4層の尖底と何の差異もないことなどから、この第5層出土の尖底については上層の混入と見なしている。つまり第5層形成期には尖底をもつ製塩土器は出現していなかったと考えてもよかろう。

さて尖底の出土個数をその層にどう反映させるかということについて考えてみたい。現段階における第3層出土製塩土器（古墳時代後期を除く）の全重量は約220kgとなる。これをC-8区SM01より出土した完形品の尖底土器（第22図9）の法量180gで割り、この層の製塩土器の個体数を概算すると、約1,200個という数値を得た。この数値を現在出土している尖底部の個数を比べると第3層で約77%を占めている。このことは尖底をもつ製塩土器が第3層形成期の主流になっていることを示す一材料となるだろう。同様な作業を第4層よりの約110kgで行なうと、約600個を得た。そしてそのうち15%が尖底土器という結果を得た。この層は3・4類も存在しているが、3・4類の質量も尖底タイプと大差ないと思われる。この数値は第4層においてはほぼ確定していると思われる。この15%という数値は、第4層形成期のある時期において尖底が出現したという一材料になる。これらの層の年代観については、製塩土器の変遷と絡めて、第6章の（2）の項に譲りたい。

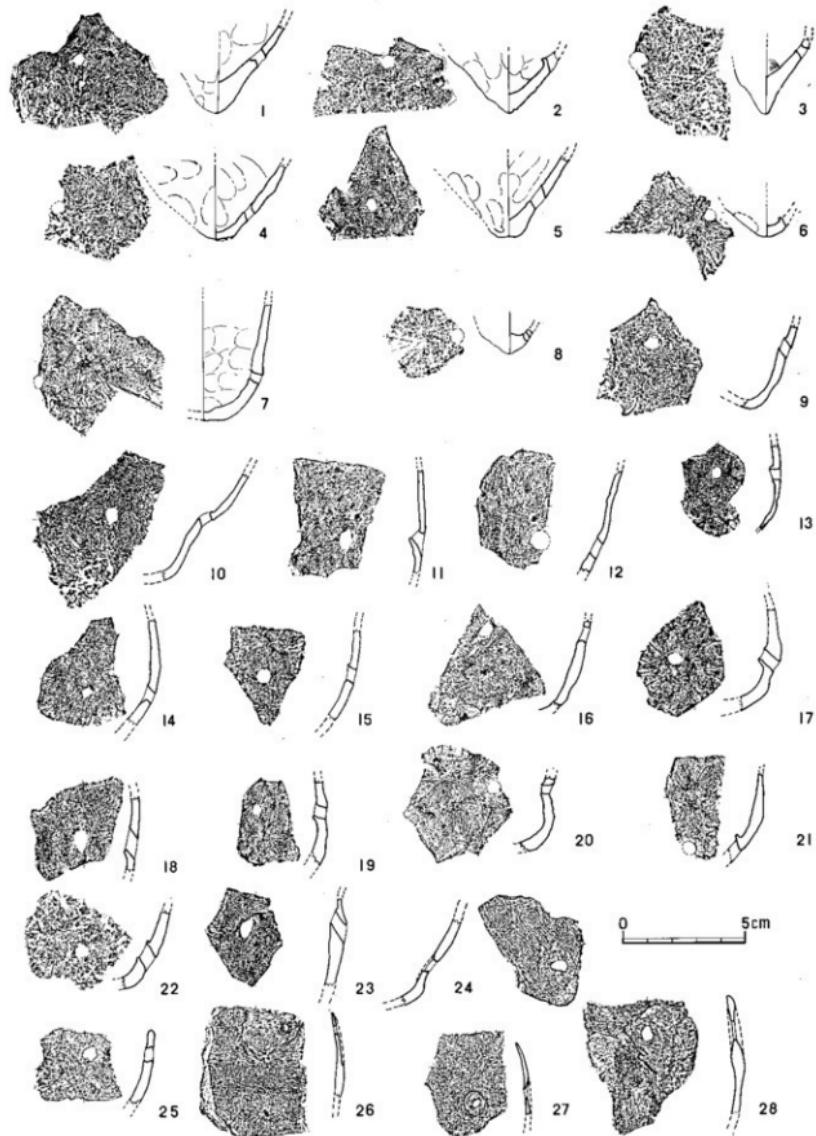
さて37は口縁が内側に尖底を持つミニチュアの製塩土器である。器高5cm、口径3cm、器厚3～4mmとなる。時期は奈良～平安時代と思われ、祭祀関係の土器と思われる。

#### 注

- (1) 立ち上りの緩急は先端部分より水平に2cmを計り、その点からの高さをとり角度化した。しかし手捏ねのために指頭圧痕が残り、破損・磨滅も著しく、確実な測定値とは言い難い。なお底部の立ち上りは40～44°が35%を占めている。



第 123 図 製塩土器尖底部実測図



第 124 図 第 3 層穿孔製塙土器実測図

## 穿孔製塩土器（第124図）

製塩土器のうち孔を底部及び口縁に穿っているものが出土した。1～24は底部に作られた孔である。直径は約4～5mmを計る。穴の径はほぼ変わらず、同じ規格の工具によると思われる。1～8は底部が完全に残っており、一ヶ所のみに穿っているのがわかり、先端部から2～3cmの間の点で孔を作っている。底部の胎土・色調・焼成・調整なども、他の孔のない尖底と何ら変わることはない。9～24は底部に近い部分と思われるが、小破片のため先端部からどの位置に孔を作っているかは判断できない。1～23は外面より内面に向かって下方から上方へ突き上げるように孔を穿っており、いずれも焼成前に作られている。24は焼成後孔を作っている。底部に近いグループのうち異質である。

25～28は口縁部に孔を作っている。焼成後の作とみられ、器壁が剝離している。穴の直径は約4～5mm前後と、底部に近いグループと同じである。いずれも内面から外面に孔を穿っている。

この穿孔製塩土器は第3層より出土している。その為時期としては8世紀代～9世紀代と思われる。第125図の第3層より出土した尖底の個数と穿孔底部のグリッド別関係図によると、出土個数は全体に比べ著しく少なく、またB列の8～10区に集中している。

さて何故孔を作ったかという目的であるが、不明としか言えない。いくつかの推定ができる。

まず出土地点がB列の一部に集中していること、また出土点数も少ないとから祭祀などの特別な目的に用いられた可能性が生まれる。

次に運搬用に繩を通る為の孔と考えることもできる。

さらには漁具として利用されたと考えられる。しかし、これらは全て推測の域を出ず、否定材料を多くもっている。これ以外に、純粹の製塩活動に用いられたと考えることもできるが、少ない個体数では否定的である。

さらに口縁部と底部の穿孔が同じ機能を果たしていたかどうかとも疑問であり、容易に結論は下せない。岡山県広江・浜遺跡でも口縁部に孔を作っている破片が出土しているが、器厚が厚すぎたり、焼成前の穿孔など相違点がある。

今後の課題として、この土器を作った集団が、どのように利用していたかをさらに考察する必要があろう。

(大山・安田)

注

間壁霞子「広江・浜遺跡」倉敷考古学集報第14号(1979)

	F	E	D	C	B
14				$\frac{4}{58}$	×
13				$\frac{0}{7}$	$\frac{0}{30}$
12				$\frac{2}{12}$	×
11				$\frac{4}{33}$	$\frac{3}{15}$
10				$\frac{2}{19}$	$\frac{7}{56}$
9				$\frac{1}{17}$	$\frac{14}{121}$
8				$\frac{0}{43}$	$\frac{10}{273}$
7				$\frac{1}{17}$	$\frac{0}{68}$
6				×	$\frac{0}{34}$
5				$\frac{0}{11}$	×
4				$\frac{0}{28}$	$\frac{0}{4}$
3					

第125図 第3層出土穿孔製塩土器と尖底の出土関係図

### b 須恵器

奈良時代を中心とする時期の須恵器は、B～D-4～15区の第3～5層と南端区から出土した。包含層の厚さの割に出土量は少なく、コンテナ2箱分ぐらいである。完形品はなく小さな破片が多い。図上復原したもののがほとんどである。

第126図1～9はB～D-4～15区第4・5層出土のものである。

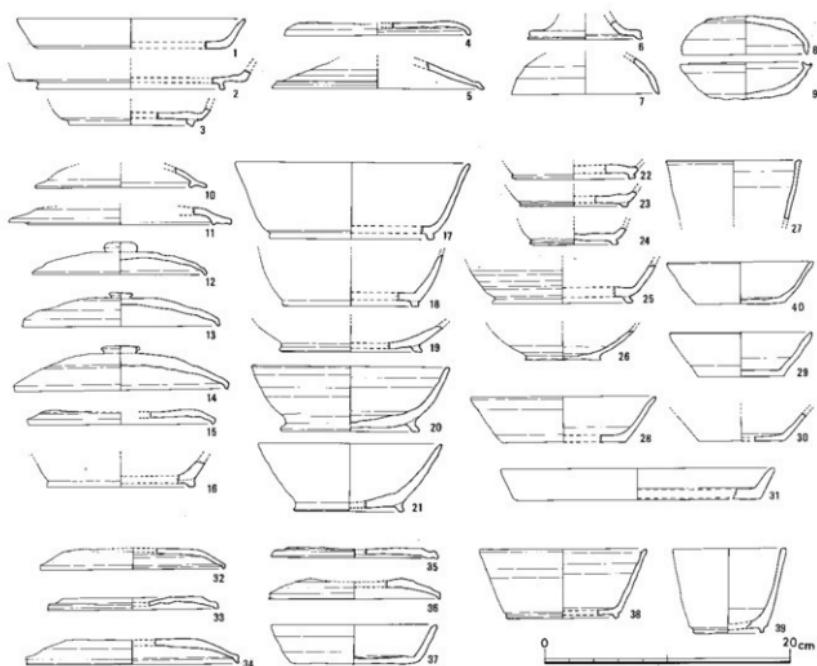
1はC-14区が出土した皿である。復原口径18.4cm、器高2.4cmを計る。汚黄灰色を呈し、焼成は少しあまい。内外面ナデ調整である。

2はC-5区第4層から出土した台付皿か盤である。復原底径15.4cm、灰色を呈し、焼成は良好である。高台は底の内側に少し踏ん張りぎみに貼り付けられている。

3はB-7区第5層上面から出土した壺である。復原底径10cmを計る。青灰色を呈し、焼成は良好である。貼り付け高台で、低い。

4はB-8区から出土した壺蓋で、復原口径15cmを計る。青灰色を呈し、焼成は普通である。縁部は屈曲していない。

5はC-6区第4層から出土した壺蓋で、復原口径16.9cmを計る。白灰色を呈し、焼成は良好である。頂部が山形になり器高の高いものだろう。



第126図 須恵器実測図

6はC—7区第4層から出土した高坏脚部で、復原底径9cmを計る。外面は灰色で、内面は少し白っぽい。坏部の形状は不明である。

7はD—8区第4層から出土した坏蓋で、復原口径12cmを計る。暗青灰色を呈し、焼成は良好である。端部内外面は回転ナデである。

8、9はD—13区第5層最下部からセットで出土した。坏身・蓋である。ともに灰色を呈し、焼成は良好である。身は完形で、蓋は半分の破片である。蓋は口径10cm、器高3.1cmで頂部はヘラ切りのままである。身は口径9.1cm、器高3cmで、底部はヘラ切りのままである。

次に10~31・41はB~D—3~8区の第3層から出土した資料である。

10はC—8区から出土した坏蓋で、復原口径14cmを計る。淡青灰色を呈し、焼成は普通である。内面に丸いかえりをもつ。

11は、B—8区から出土した坏蓋で、復原口径15cmを計る。青灰色を呈し、焼成はやや良好である。内面端部は浅い凹線状の広がりと弱いかえりをもつ。

12はC—10区から出土した坏蓋で、復原口径14cmを計る。灰色を呈し、焼成は良好である。

13はD—5区から出土した坏蓋で、復原口径15.8cmを計る。暗灰色を呈し、焼成は良い。

14はD—10区から出土した坏蓋で、復原口径17.3cmを計る。灰色を呈し、ぜい弱な焼き上りである。内外面回転ナデ調整である。

15はB—8区から出土した坏蓋で、復原口径15cmを計る。青灰色を呈し、焼成は良好である。

16はC—8区から出土した高台付の坏で、復原底径12cmを計る。淡青灰色を呈し、焼成は普通である。高台は体部と底部の境目に貼り付けられている。

17はC—11区から出土した高台付の坏で、復原口径19cm、器高6.2cmを計る。暗灰色を呈し、焼成は良好である。体部はほぼ直線に立ち上り、口縁端部はやや外反する。

18はC—8区から出土した高台付の坏で、復原底径11cmを計る。淡青灰色を呈し、焼成は良好である。体部はやや丸味をもちらながら立ち上っている。高台は体部と底部の境目に貼り付けられている。

19はC—7区から出土した高台付の坏で、復原底径11.6cmを計る。外面は青灰色を呈し、内面は白っぽい青灰色を呈す。焼成はよくない。体部は開きぎみに立ち上り、高台は体部最下部に八の字形に貼り付けられている。

20はB—5区から出土した高台付の坏で、復原口径16cm、底径11.2cm、器高5.3cmを計る。淡青灰色を呈し、焼き上りは良く堅緻である。体部は丸味をおび、底部にヘラ削りの跡が残る。高台は体部下部に付けられ八の字に踏ん張っている。

21はC—14区から出土した高台付の坏で、復原口径14.7cm、底径8.6cm、器高5.5cmを計る。淡灰色を呈し、焼成は良好である。体部は僅かに丸味をもちらながら、ラッパ状に大きく開く。高台は体部最下部に貼り付けられ、八の字状に踏ん張っている。

22、23はB—8区から、24はB—9区から出土した高台付の坏底部で、いずれも小形のものである。

25はD—5区から出土した高台付の坏で、復原底径11.4cmを計る。青灰色を呈し、焼成は良い。丸味をおびた高台が付く。

26はB—9区から出土した無高台の坏で、底径6cmを計る。淡青色を呈し、焼成は良好である。底部は回転糸切りがある。体部は少し丸味をもちら開きぎみに立ち上る。

27はB—9区から出土した坏か、平瓶の口縁部であろう。復原口径10.7cmで、明灰色を呈す。

焼成は良好で、外面に自然釉がかかる。

28はB—7区から出土した須恵器の壺で、復原口径15cm、底径10cm、器高3.7cmを計る。淡黃灰色を呈し、焼成は良好である。体部は直線に開いて立ち上る。

29はB—9区から出土した無高台の壺である。口径11.4cm、底径7cm、器高36cmを計る。淡青灰色を呈し、焼成は良好である。体部は直線で開いて立ち上り、底部はヘラ切りである。

30はB—9区から出土した無高台の壺で、復原底径7cmを計る。暗淡青灰色を呈し、焼成は良い。体部は直線に開く。底部はヘラ切りである。

31はD—8区から出土した皿で、復原口径22cm、底径20cm、器高2.5cmを計る。白青灰色を呈し、焼成は良い。体部は厚く、口縁部は丸く終る。

41はB—6区から出土した壺で、復原口径12cm、底径7.5cm、器高4.5cmを計る。黄味をもつ青灰色で外面に火だしきがみえる。体部は直線に開き、底部はヘラ切りである。

32～39は南端調査区の各層各遺構面から出土したものである。

32は壺蓋で、復原口径15cmを計る。黄灰色を呈し、焼成はあまく風化が著しい。

33は壺蓋で、復原口径13.8cmを計る。青灰色を呈し、焼成は良好である。縁部が屈曲している。

34は壺蓋で、復原口径17.4cmを計る。暗灰色を呈し、焼成は良好である。縁部は僅かに屈曲する。

35は壺蓋で、復原口径13.4cmを計る。灰黄色を呈し、焼成はややあまい。縁部は屈曲している。

36は壺蓋で、復原口径14cmを計る。灰黄色を呈し、焼成はぜい弱である。

37は無高台の壺で、復原口径13.4cm、器高3.2cmを計る。暗青灰色を呈し、焼成は良好である。

38は高台付の壺で復原口径13.6cm器高5.6cmを計る。青灰色を呈し、焼成は良好である。体部は直線で立ち上り、高台は体部と底部の境目に貼り付けられている。

39は高台付の壺で、復原口径9.2cm、器高6.8cmを計る。灰青色を呈し、焼成は良好である。口縁端部は鋭く面取りされている。

さて、第4・5層、第3層、南端地区の年代を求めてみよう。まず第4・5層の資料では6～9が古く、7世紀初めごろに比定でき、これをさかのぼるものは出土していない。下限は、1・3・5が新しい資料で8世紀末～9世紀初め頃となる。

次に第3層では、10・11が古く7世紀後半の年代を与えてよからう。下限については、11～21、26などの資料が新しく9～10世紀の年代と思われる。

第4・5層と第3層とでは8世紀代が重複している。この地区は中世の粘土遺構が多数造られ、部分的に大きな攪乱をうけているため、第4・5層の新しい資料を上層からの混入の可能性も考慮される。今後検討を要するが、ここでは一応新しい資料を除外し、第4・5層を7世紀後半ぐらいで、第3層はそれ以後の8・9世紀代の形成という1つの目安を与えておきたい。

南端地区的資料は9世紀初め前後の時期とみてよからう。

## c 土師器・黒色土器(第127図)

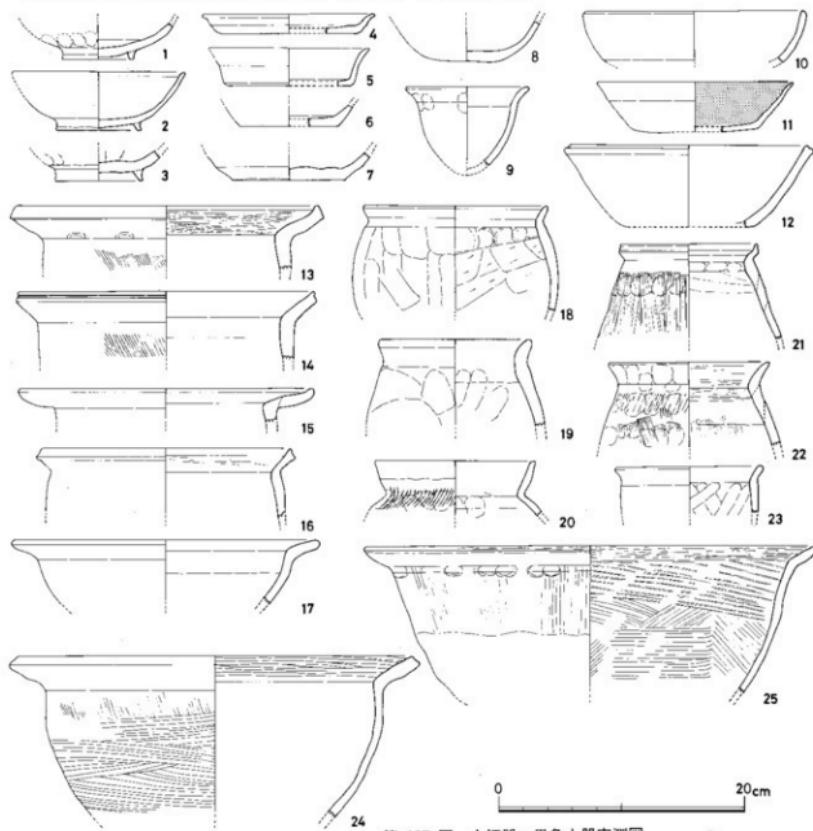
土師器は第5層、第3層ともに出土しているが、第3層の方が多い。椀類は少なく、甕が目立つ。黒色土器は土師器に比べると出土量は少ない。ここでは第3層出土の25点を図化した。

1はB-12区から出土した高台付の椀で、復原底径4.8cmを計る。淡赤乳かっ色を呈す。外面に指頭痕が残り、ナデ調整がある。断面三角形の高台が貼りつけられている。

2はC-3区から出土した高台付の椀で、復原口径13.8cm、器高4.8cmを計る。黄褐色を呈す。内面は丁寧なナデ調整が施されている。

3はB-11区から出土した高台付の土師質椀で、復原底径7cmを計る。黄白色を呈す。外面指ナデで、内面はヘラ削りの後ナデ調整されている。断面三角形の高い高台がつく。

4はB-8区から出土した皿で、復原口径14cm、器高1.6cmを計る。淡赤褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。口縁部は外反し、内外面ナデ調整である。



第127図 土師器・黒色土器実測図

5はB-9区から出土した壺で、復原口径13cm、器高3.1cmを計る。茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。口縁部は多反する。内外面ナデ調整である。

6はB-8区出土した無高台の壺で、復原底径8cmを計る。白黄土色を呈し、内外面でナデ調整され、底部は糸切りである。

7はB-12区から出土した無高台の壺で、復原底径9.2cmを計る。淡黄白色を呈し、胎土、焼成は良好なものである。体部内外面ナデ調整され、底部は雑なヘラ削りである。

8はD-5区出土の椀である。暗褐色を呈し、内外面ナデ調整である。

9はB-7区から出土した土師質の小形椀で、復原口径9.8cmを計る。淡赤褐色を呈し、胎土焼成は良好である。内外面ナデ調整であるが、外面は剥落がひどく、二次焼成をうけているかもしれない。

10はB-10区出土の椀で、復原口径9.6cmを計る。明黄灰色で、内外面ナデ調整である。

11はC-14区から出土した黒色土器壺で、復原口径15.8cm、器高4.2cmを計る。外面は明黄褐色を呈し、内面は丁寧なヘラみがきがなされている。

12はB-12区から出土した瓦質鉢で、復原口径19cm、器高6.7cmを計る。内外面白灰色を呈す。

13はB-7区から出土した甕の口縁部で、復原口径24.4cmを計る。内外面とも茶褐色を呈し、口縁端部は上方につまみ上げられており、体部は下に真すぐおりている。外面は口縁から頭部にかけてヨコナデし、体部は縦方向にハケ目を施す。頭部に指頭痕が残る。内面口縁部は横向方にハケ目が施され、体部はナデ仕上げである。

14はB-8区から出土した甕の口縁部で、復原口径24cmを計る。淡赤褐色を呈し、口縁端部に凹線がめぐる。口縁内外面ナデ調整で、外部外面は荒いハケ目が施されている。

15はD-5区から出土した鍋の口縁部で、復原口径23.6cmを計る。茶褐色を呈し、内外面はナデ調整である。体部は垂直に下っている。

16はC-7区から出土した甕口縁部で、復原口径20cmを計る。口縁部はくの字状に外反し、端部は上下に少し拡張し、中央は浅い凹線状になっている。内・外面ともにナデ調整され、体部外表面は剥落している。内面黒灰色、外面灰褐色を呈す。

17はB-9区から出土した鍋の口縁部で、復原口径24.4cmを計る。口縁部は大きくくの字に外反し、端部は丸い。淡茶灰色を呈す。

18はC-7区から出土した甕の縁部で復原口径15cmを計る。口縁部は短く、外反し、端部は丸い。体部は球形をなす。内外面とも丁寧なナデ調整が施されているが、体部内面下半はヘラ削りの後ナデ調整が施されたと思われる。淡赤褐色を呈す。

19はD-5区から出土した甕で、復原口径11cmを計る。口縁部はゆるく外反し端部は丸い。体部はあまり弯曲しない。口縁内外面ともにナデ調整で、体部内面は指ナデを行う。粘土のつぎ目が残る。外面は磨減のため調整は不明である。

20はB-9区から出土した甕の口縁部で、復原口径13cmを計る。口縁は外反し、端部は内傾する平坦面をもつ。外面は荒いハケ調整で、内面はナデ調整である。

21はB-6区から出土した甕で、復原口径11cmを計る。口縁部はくの字状に外反し、端部は上方につまみ上げられている。体部は直線に下り、下半で丸味をおびるものだろう。体部外表面にはハケ目が明瞭に残り、内面は指ナデ調整である。黄乳白色を呈す。

22はE-13区から出土した甕で、復原口径12.8cmを計る。口縁部はくの字状に外反し端部は丸くおさまる。口縁内外面ナデ調整で、体部外表面は荒いハケ目と細いハケ目で調整されている。

23はC-6区から出土した小形壺の口縁部で、復原口径11.6cmを計る。口縁内外面はナデ調整で体部内面は指ナデ調整の跡が明瞭に残っている。体部外面は二次焼成を受けている。

24はD-10区から出土した鍋で、復原口径32cmを計る。口縁内面は横方向の荒いハケ目調整で、体部外面は縦方向の荒いハケ目によって調整されている。

25はB-8区から出土した鍋で、復原口径36.4cmを計る。口縁端部外面に沈線が部分的に走る。内面はハケ調整で、口縁部はハケ調整の後ナデ調整が施されている。外面は口縁部ナデ調整で、体部上半はハケ調整の後ナデ調整が施されている。  
(大山)

#### d 二彩小壺、銅製品、皇朝銭 (第128図、第6表)

今年度の調査で、新たに二彩小壺、飾金具、皇朝銭が出土したので、ここに紹介する。

1は二彩小壺である。ヤケヤマ東麓地区B-2区画第4層から出土した。蓋の部分で、宝珠形のつまみが付いている。蓋身部は直径5.1cm、高さ0.7cm、つまみは直径1.2cm、高さ0.5cmを計り、表側に浅い沈線がまわっている。身受け部は若干裾が広がり、端部は器壁内面が削られすくなくて終る。釉は白緑色のものが内外面全域に施され、その上に濃緑色のものが、表側の一部にかけられている。

2は金銅製の小札で、表全面に鍍金が施されている。ヤケヤマ東麓地区B-2区画第3層下層に、二分割された状態で出土した。同一個体と考えている。径1mmほどの穿孔が3箇所にあり、本来穿孔は3箇所にあったものか、4箇所にあったものか不明である。今回は4箇所にあったものと考え、図のようにならべておく。復原長としては5cm×3cmとしておこう。

3は刀に装着される銅製責金具で、南端地区B-0区画第4層下層に出土した。高さ3.7cm、幅0.5cmで下げ緒をつけるための円環が取り付けてある。円環は外径0.8cm、内径0.3cmを計る。

4～6は銅製の座金とその止め金である。ヤケヤマ東麓地区A-1区画第3層に一塊になって出土した。座金は表面に菊花状の紋様が施され、中央に径1mmほどの穿孔がある。周辺が欠けており、円形になるのか方形のものか定かでない。現状では、径2cmほどのものとしておく。

6の止め金は、細い銅線をより合わせたものである。尚一塊になって出土したものは、この他に座金と思われる小片3点があり、その内1片には表面に鍍金が残り他の1片には、中央の穴に6と同一の細い銅線が通っていた。そのため6のものを、座金とセットになる止め金としておく。

7～15は皇朝銭で、7～10は今年度出土のもの、11～15は昨年度出土のものである。出土地点及び層位は第9表に示す。

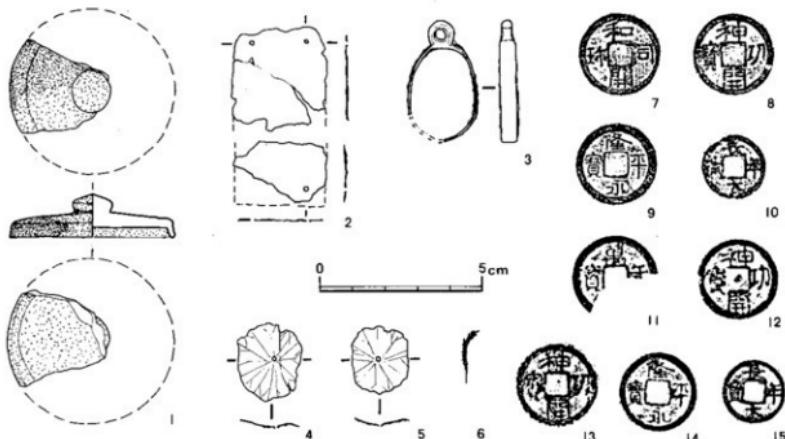
これらの遺物の出土地点は、大浦浜地区的南部と北部にかたまり、共に低丘陵の山裾に近い部分に限られており、今年度も南端地区より皇朝銭と刀装具が出土した。  
<sup>8(1)</sup>  
<sup>8(2)</sup>

(白本)

#### 注

(1) 昨年度出土した帶金具、皇朝銭の出土地点も、南より伸びる低丘陵の山裾に近い部分に限られており、今年度も南端地区より皇朝銭と刀装具が出土した。

(2) ヤケヤマ東麓地区出土のものについては第4章第86図で出土地点を示す。出土状態を若干説明すれば、和同開珎、二彩小壺、神功開宝は出土地点も近く、同一層からの出土でセットとして考えられる。小札、座金、隆平永宝については、これらより上層に出土しており、同一期に用いられたものかどうかは、今後の検討をしたい。



第128図 奈良二彩銅製品皇朝銭実測図

第6表 皇朝銭出土一覧表

	出 土 地 点	層 位	錢 種	初 鑄 年	備 考
7	ヤケヤマ東麓	C-2 第4層上面	和同開赤	和同元年	708年 皇朝銭 56年度出土
8	〃	B-2 第4層上面	神功開宝	天平神護元年	765年 皇朝銭 56年度出土
9	〃	B-2 第3層	應平永宝	延暦15年	796年 皇朝銭 56年度出土
10	大浦浜南端区	B-0 第5層	長年大宝	嘉祥元年	848年 皇朝銭 56年度出土
11	大浦浜	C-4 第3層	万年通宝	天平宝字4年	760年 皇朝銭 55年度出土
12	〃	B-5 第3層	神功開宝	天平神護元年	765年 皇朝銭 55年度出土
13	〃	B-6 S.K.01	神功開宝	天平神護元年	765年 皇朝銭 55年度出土
14	〃	E-5 第3層	應平永宝	延暦15年	796年 皇朝銭 55年度出土
15	〃	B-4 第3層	長年大宝	嘉祥元年	848年 皇朝銭 55年度出土

## e 土錘

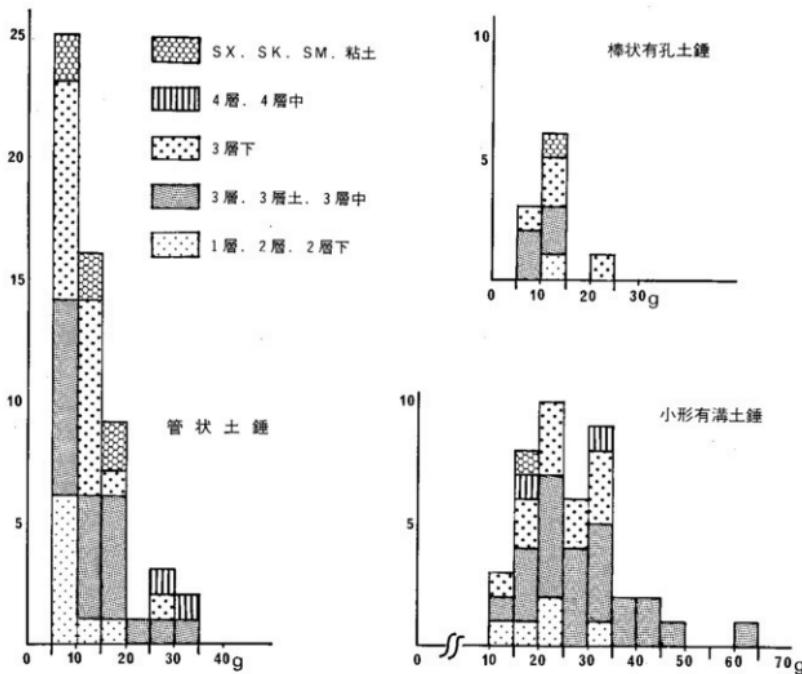
B～F-4～8区出土の土錘について述べる。この地区では、第3層・第4層・遺構内から、土師器・須恵器・製塙土器などと共に多量の土錘が出土している。その中から完形のものだけを選んで図化した。図化するにあたっては、取り上げ層序である第3層上層・第3層下層・第4層に分けてレイアウトした。結果としてB・C列に多く包含されていることがわかる。

第7表は、これらの土錘のタイプ別重量を各取り上げ層ごとに明示したものである。

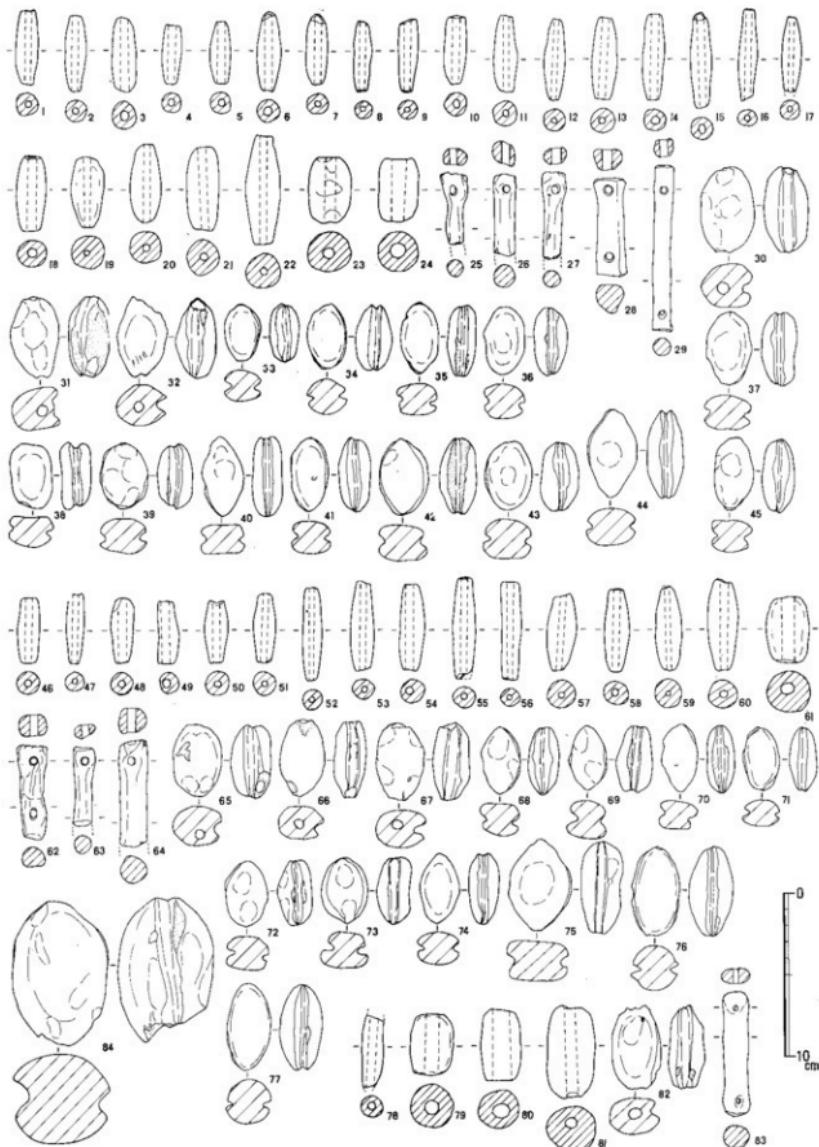
第3層上層・第3層下層・第4層とも、一部混入はあるものの凡そ奈良時代～平安時代前半の中で理解できるものであり、形態的な差はあまり見られない。

重量分布では、管状土錘が5～10gと25～30gにピークが見られる。これは、管状土錘の大形と小形の二つのタイプの存在を示す。又、棒状有孔土錘は10～15gにピークが、小形有溝土錘は15～35gまで広範囲に及ぶ。これらの重量分布から見れば、5gから35gまではほとんどまかなうことができ、これらの組み合せによって網の使い分けが行なわれたことが推定される。

いずれにしても第129図84のような大形有溝土錘が一般的になりえなかった状況を理解することができ、このタイプの一般化が一つの画期になると推定される。  
(真鍋)



第7表 B～F-4～8区出土土錘タイプ別重量表



第 129 図 B～F 区 3～4 層出土土鍾実測図

## (5) 中世の遺物

中世の遺物は、量の多寡はありながらも、各調査区の第1～3層から出土している。

遺構に伴なった形で多量の中世遺物を出土した地区は、ヤケヤマ東麓地区・C～F-9～14区・南端地区である。他の地区では、一部下層に掘り込まれた遺構内に若干の遺物を含む場合もあるが、ほとんど1～2層に近現代の遺物と共に混在した状態で出土している。この項目では、南端地区で層位的に出土した遺物を紹介し、錢貨・輸入磁器に限り他の地区的ものを加え補足する事で、大浦浜遺跡出土の中世遺物を代表させたい。尚、古錢については、拓影図、一覧表を第140図、第9表に紹介するにとどめる。

## a 輸入磁器（第130図）

輸入磁器は、破片として各調査区からまんべんなく出土している。

第130図の1はG-34区第2層から出土した白磁碗口縁部で、復原口径17.4cmを計る。胎土は灰色、釉は薄い青味をもつ汚乳色で、内外面に小孔が目立つ。口縁部は大きな玉縁を呈している。太宰府編年白磁碗IV類に該当する。

2はI-36区耕作土から出土した白磁碗口縁部で、復原口径16cmを計る。胎土は白色に近く、釉は薄い緑色味をおびる乳白色である。施釉は外面上半でとまり、口縁部は小さい玉縁をもっている。太宰府編年白磁碗III類に該当するだろう。

3はB-9区第3層下部から出土した白磁碗口縁部で、復原口径16cmを計る。胎土は灰白色、釉は不透明な乳白色である。太宰府編年白磁碗V類に該当する。

4はB-12区第3層上半から出土した白磁碗高台部で、復原底径7.9cmを計る。胎土は砂粒をほとんど含まず灰白色で、釉は乳白色を呈し、見込み部分にみられる。高台は細く直立している。太宰府編年白磁碗V類に該当するだろう。

5はM-34区から出土した白磁碗高台部で復原底径6cmを計る。胎土は灰色で、木目は細かい。釉は濃灰色を呈し、外部下半にはなく、内面には施釉にむらがある。

6はC-6区第4層から出土した白磁小皿で復原口径9.3cmを計る。胎土は淡白色で、釉は汚れた灰色を呈し、貫入が著しい。太宰府編年VII類に該当する。

7はM-34区から出土した越州窯系青磁碗の底部の破片で、復原口径5.6cmを計る。胎土は淡灰褐色で、釉は黄緑色を呈し、内外面に貫入がある。

8はK-38区第2層から出土した越州窯系青磁碗底部の破片で、復原底径14cmを計る。胎土は灰色緻密で、釉は褐色味をおびる灰色で内外面にかかっている。

9はC-8区SK01から出土した龍泉窯系の青磁碗の破片である。胎土は淡灰色で、釉は濃緑色に近い灰緑色である。外面にはヘラによる幅広い鏽のない蓮弁文と櫛描き文が描かれ、内面はヘラとクシによる花文が描かれている。

10はB-4区第3層下部から出土した龍泉窯系の青磁碗口縁部である。胎土は淡灰色で、釉は半透明の灰緑色を呈す。内面にはヘラ描文がある。

11はB-9区第3層上部から出土した龍泉窯系の青磁碗である。胎土は淡灰色で、釉は灰緑色を呈す。内面にはヘラ描文があり、外面に文様はみえない。

12はC-4区第4層から出土した同安窯系青磁碗の口縁部である。復原口径は14.9cmを計る。胎土は灰白色で、釉は灰緑色を呈す。外面は櫛目文、内面は沈線が走り、櫛目文、ネコ描文がある。太宰府編年I類に該当する。

13はB—9区第3層出土の同安窯系の青磁碗の破片である。胎土は淡灰色で釉は淡灰緑色を呈す。内面には雷電文があり、外面は櫛目文がある。

14はI—36区耕作土から出土した同安窯系の青磁碗口縁部で、復原口径16cmを計る。胎土は木目細かく、灰色を呈し、釉は淡い黄緑色を呈す。外面は櫛目文で、内面は沈線が1本走り、ヘラと櫛状工具で文様が描かれている。太宰府編年I類に該当する。

15はG—32区第3層から出土した同安窯系青磁碗の口縁部で、復原口径16cmを計る。胎土は汚灰色で、釉は薄い青味の灰色で、体部上半どまりである。外面はヘラにより片彫り図の沈線が走り、その下に花文が描かれている。太宰府編年III類に該当する。

16はB—12区第3層SK03出土の白磁碗の破片である。胎土は灰白色で、釉は白濁色を呈している。内面には櫛目文がみえる。

以上は南東部と中央部から出土した青白磁であるが、地区により大きな差はないようである。しかし、越州窯系のものは、現在までの整理では図化した2点のみで、2点は浜の中央部で出土しており、注意を要するかもしれない。

次に南端地区出土のものについて説明を加える。層位、遺構別の出土点数は、第2層に6点、第3層に6点、第4層に1点、第1遺構群に8点、第4層中層に2点、第4層下層に1点である。計24点（青磁12、白磁11、四耳壺1）出土し、5点、図化した。

17はA—04区画第2層に出土した青磁碗底部である。胎土は淡灰色、釉は黄色味をおびた灰緑色で灰色がやや強い。施釉は内面だけに見られ、底部には施されていない。同安窯系のものと考えられる。

18はC—0区画第3層に出土した白磁碗口縁部で、復原口径15cmを計る。胎土は灰白色、釉はわずかに灰緑色がかった乳濁色である。施釉は内面と外面体部上半に見られ、口縁部を大きな玉縁にしている。太宰府編年、白磁碗IV類に該当する。

19はB—0区画第2層下層に出土した白磁碗口縁部で、復原口径17cmを計る。胎土は灰白色、釉は乳濁色である。施釉は内外面に見られ、外面はヘラ削りの上に釉がかけられている。体部は丸みを持ち、口縁部は外反し端部は平らになっている。太宰府編年、白磁碗V類に該当する。

20はC—0区画第3層に出土した白磁碗口縁部で、口径17cmを計る。胎土は灰白色、釉は透明度の低い濁った白色である。施釉は内外面にあり、口縁部は外反し端部が平らになっている。太宰府編年、白磁碗V類 or VII類に該当する。

21は第1遺構群湧水溜遺構内に出土した青磁碗口縁部で、復原口径15.5cmを計る。胎土灰白色で、大きな貫入がわずかに認められる。釉は透明度の高い明淡灰緑色で、内外面にうすくかけられている。内外面に細かい櫛目を有し、体部は丸みを持ちやや内湾する。太宰府編年、同安窯系碗I—1、bに該当する。

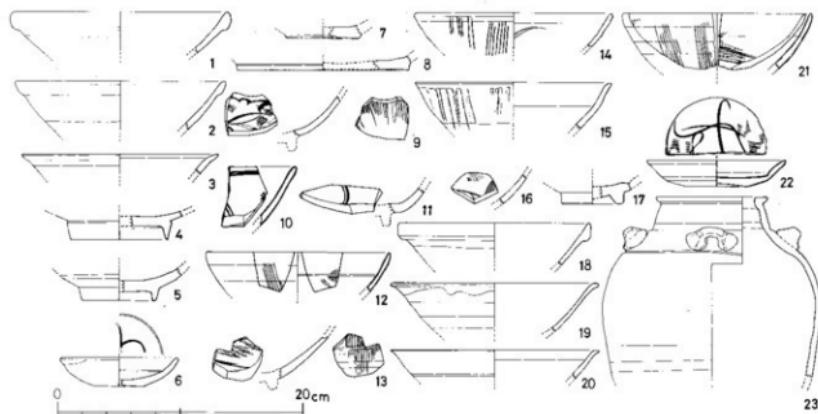
22はC—0区画第3層に出土した青磁皿である。口径11.1cm、底径4.8cm、器高2.2cmを計る。胎土は淡灰色、釉は緑色の強い濃灰緑色である。内底にヘラと櫛による文様があり、体部も見込みの境に段を持つ。釉は全面に施された後、底部のみ削りとられている。太宰府編年、同安窯系皿I—1、bに該当する。

23はB—02区画第4層下層に出土した四耳壺である。口径8.8cm、体部最大径17.8cmを計る。胎土は明灰色で若干の砂粒を含み、灰緑色の釉が外面に施されている。口縁端部は平らで横にはり出しており、肩部にやや波状となる沈線がめぐらされている。

南端地区出土の輸入磁器は、第3層～第1遺構群にかけて出土点数が多く、第2遺構群及び

それ以下の層からは出土しない。この点から、これらの遺物は第1遺構群の時代を決める有力な手がかりと考えられる。そこで、太宰府編年案に従って全てのものを分類した結果、同安窯系青磁椀I-1, bが7点、同皿I-2が3点、龍泉窯系青磁I-2~4が1点、白磁椀、IV類2点、V-5が4点、VIII類1点、不明のもの5点であった。これらの組み合わさる時代はIII期(12世紀から14世紀中葉)であり、その中で、大浦浜全体の磁器を見ても龍泉窯系椀I-5、白磁椀IX類がほとんど出土しない点を考慮すれば、1小期(12世紀中葉~13世紀初頭)に該当する。

第1遺構群を中心として出土の多い瓦器椀についても、13世紀前半に該当するものと考えられ、両方の組み合わさる時代として第1遺構群は13世紀初頭としておく。



第130図 輸入磁器実測図

#### b. 瓦器(第131図)

全て南端地区出土のものである。第4層以下のものについて出土点数を示すと、第4層上層に26点、第1遺構群に19点、第4層中層に8点、第4層下層に1点であり、以下の層には出土しない。第4層上層から第1遺構群にかけて大半のものが出土する傾向である。器種は椀と皿であり、椀の占める割合が80%を越えている。小片あるいは磨滅したものが多く、図化したものは12点である。なお図化した遺物については、観察表を記した。以下取り上げ層ごとに、遺物説明を加える。

1~3は第4層上層に出土した椀である。1は体部が直線的に立ちあがり、外面に指頭痕が残る。内面は磨滅のため調整不明である。2は外面は指頭痕が帯状に残り、口縁部に横ナデが施されている。暗文は、内面だけに見られ、太いものが平行に施されている。3は体部がやや内湾し、外面に指頭痕が残る。暗文は不定方向に細いものが内面だけに施される。

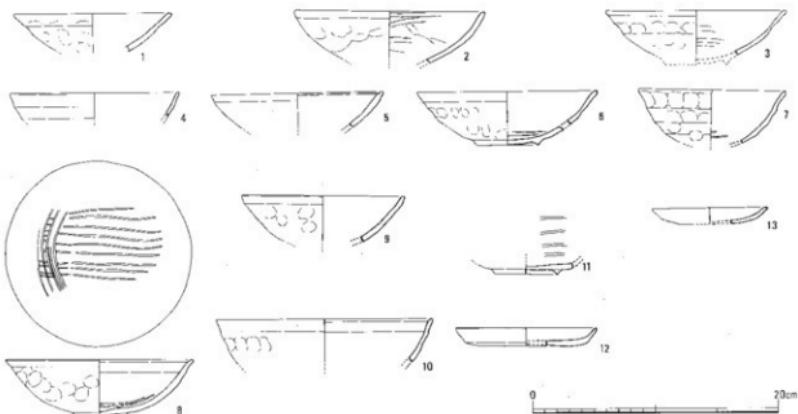
4~5は第1遺構群に出土したものである。4はピット4から出土し、外縁部に横ナデが施されている。残存部分には、暗文は見られない。5は湧水溜遺構から出土したもので、口縁端

内側に沈線が施されている。磨滅が著しく調整は不明である。

6～13は第4層中層より出土したもので、器種には椀（6～11）と皿（12・13）がある。6は体部外面に指頭痕が残り、口縁部に横ナデが施されている。高台は貼り付けで、断面三角形の極めて簡単なものである。7は体部外面に指頭痕による凹面が2段にわたって残り、内面底部には太い暗文が施されている。8はほぼ完形のもので、口縁部は器壁がうすくなり、やや外反する。体部外面に指頭痕が残り、口縁外面の横ナデが強調されている。暗文は内面だけに見られ、底部にかけて太いものが施されている。高台は貼り付けで断面三角形である。9は磨滅のため調整不明で、体部外面にわずかに指頭痕が残る。10は口縁部に横ナデが施され、体部外面に指頭痕による凹面が残る。11は底部内面に太い暗文が施されている。高台は貼り付けで断面三角形の簡単なものである。12は口縁外面に横ナデが施され、体部は底部に比べ器厚が薄い。内面は磨滅のため調整は不明であるが、底部にヘラ痕が放射状に残っている。13は内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。

瓦器椀は、磨滅しているものを除けば、体部外面に指頭痕が残り、暗文は内面にだけ施されている。暗文は、太いものが底部内面にかけて平行に走るもの（2, 6～8, 11）細いものが内面全体に不定方向に走るもの（7）がある。量的には前者が大半を占める。口縁部内側に沈線が施されているもの（5）は1点だけの出土であった。

本地区で、第4層上層～第1遺構群に出土した瓦器は大半が和泉型に類すると考えられ橋本久和氏の編年によれば第III期に属するものであろう。この点から見れば、第1遺構群はほぼ13世紀前半を中心とした時代に想定できる。



第131図 瓦器実測図

### c 土師質土器、黒色土器（第132図）

南端地区では、各層に出土し、出土点数は1,300点を越える。器種としては、椀、皿、杯、甕などが見られ、椀、皿の割合が多い。今回の概報では、第3層～第5層に出土したものについて説明を加える。尚、第132図は、大きく器型の流れを見るため出土層、遺構別に遺物をまとめた

ものであり、また、図化したものについては、観察表を記す。

1~18は第3層出土のものである。椀を6点、小皿を12点図化した。2は内黒の黒色土器で、他は全て土師器である。1~6は椀で貼り付けによる高台を持つ、高台断面は全て三角形で、1、2はやや退化した感をうける。高台の貼り付け部と、1の体部外面に横ナデが残るが、他の調整は磨滅のため見えない。7~18は小皿である。口径8cm前後、底部5cm弱、器高1.5cmほどのものが大半で、ほぼ均一な大きさをしている。底部はヘラ切りで、体部外面に横ナデが施される。底部内面の中央部が盛り上がったものがほとんどで、平坦なものは10だけであった。

19~22は第4層上層に出土したもので、椀を4点図化した。22は内黒の黒色土器で、他は土師器である。高台は貼り付けで、断面三角形である。体部外面は横ナデが残り、22の内面に暗文らしきものがわずかに見える。

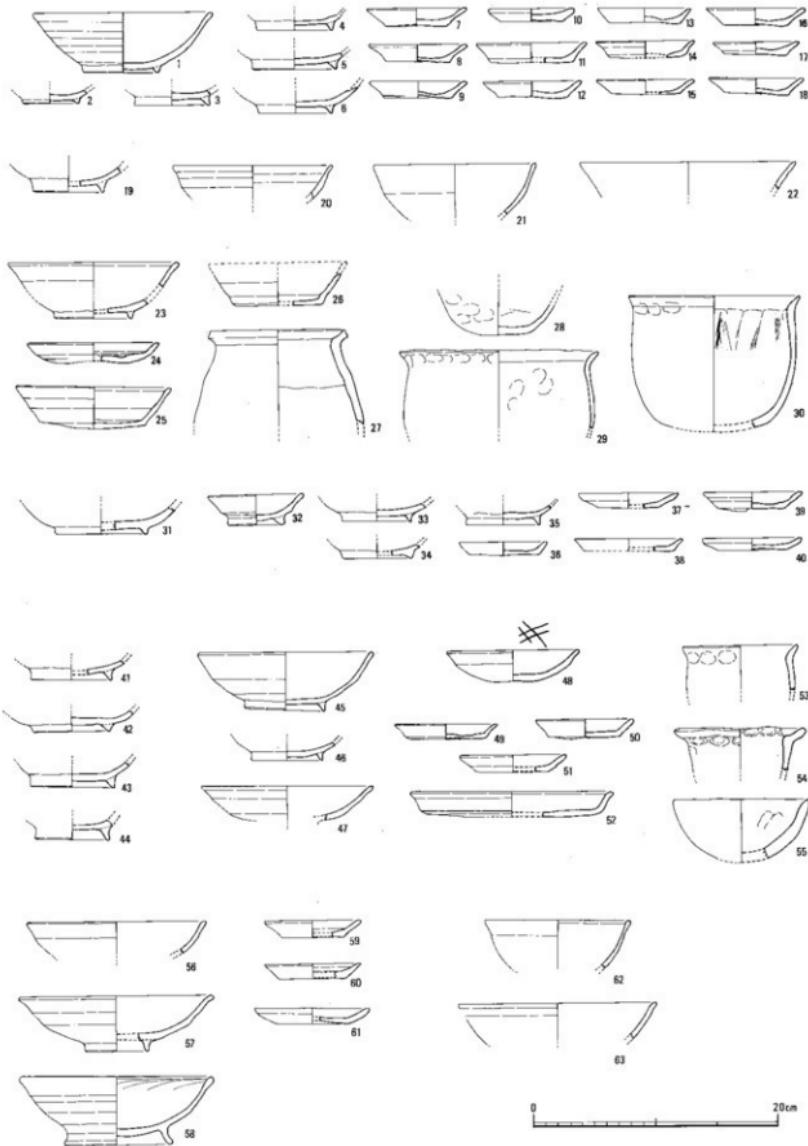
23~40は第1遺構群から出土したもので、全て土師器である。椀6点、皿6点、杯2点、甕4点を図化した。椀は貼り付けによる高台を持ち、高台断面は三角形のものと、台形のものが見られる。32は小型の椀で、高台が大きく、外面下部にユビナデによる凹面があり、内外面には横ナデが施されている。他は磨滅部分が多く、調整は確認しにくい。皿は口径8cm前後、底径5~6cm、器高1cmほどのものが多く、第3層出土のものより器高が低い感をうける。底は全てヘラ切りで、内外面にナデ調整が施されている。39の底部内面には、らせん状の凹線が見られる。25、26は杯で内外面に横ナデが施され、底部はヘラ切りである。焼成は共に良好で、底部がまるみを持つものと、平坦なものがある。27~30は甕で、口縁端部が角ばったものと、まるみを持つものがある。頸部に指頭痕が残り、内面は指または、ハケ状工具を用いてナデ上げられている。焼成、胎土とも悪く、磨滅が著しい。

41~55は第4層中層より出土したもので、椀7点、皿5点、甕2点、小鉢1点を図化した。41は内黒の黒色土器で、他は全て土師器である。41~47は椀で、貼り付けによる高台を持つ。高台は断面三角形のものと、台形のものが見られ、作りはしっかりしたものが多くなっている。いずれも磨滅し、調整の残る部分は少ない。48~52は皿である。底部にまるみを持ったもの、平坦なものがあり、大きさもさまざまである。特徴的なものとして48の底部内面には、ヘラ記号が付く。外面とも横ナデが施され、底はヘラ切りである。53、54は甕で、第1遺構群出土のものに比べ小型であるが、手法、調整はよくにしている。55は小鉢としたが、椀とも考えられる。

56~61は第2遺構群出土のもので、全て土師器である。56~58は椀でいずれも貼り付けによる高台を持つ。高台断面は台形ないし、長方形ぎみのしっかりしたもので、三角形のものは見られない。58は完形品で、外面に丁寧なナデ仕上げが施され、口縁部内面にコテ状の工具によるナデ跡が残る。高台は長方形状で八の字にふんばり、横ナデが見られる。59~61は皿で、口径が9.4cmを計るものと、7.8cmのものがある。全てヘラ切りで、外面に横ナデが施される。

62、63は第5層に出土したもので、土師器の椀である。外面にナデ調整が施される。

このように特徴を見ていくと、大きな流れとして椀は高台が高くなりしっかりした作りに変化していく、皿は大きさにバラエティが生まれてくる。共伴する輸入磁器、瓦器から見れば、第4層上層~第4層中層にかけては、13世紀初頭に位置し、第2遺構群はこれより若干さかのぼった時代として12世紀後半を与えておく。



第 132 図 土師質土器実測図

## d 漁具（第133図）

南端地区で出土した漁具は200点ほどである。大部分は蛸壺と土錘で、釣針が2点含まれる。出土傾向として、古代末～中世の包含層（第4層）に、大半のものが出土する。土錘は有溝、管状、棒状有孔のものあり、蛸壺は土師質で釣鐘状のものである。第8表に土錘の形態・層位別の重量分布図を示す。ただし図中に表わしたもののは、完形重量が復原可能なものに限った。

1～7は棒状有孔土錘である。8～28gの重量幅があり、3層に3点、4層上層に2点、4層中層に5点、5層に1点、計10点出土した。

8～13は小形の管状土錘である。7～24gの重量幅があり、第3層に4点、第4層上層に2点、第1遺構群に4点、第5層に1点、計11点出土した。

14、15は大形の管状土錘である。14は第3層に出土し、復原重量150gを計る。15は第5層に出土し、140gを計る。大形の管状土錘は、この2点だけの出土である。

16～21は有溝土錘で、16以外は大形に属するものである。104～430gの重量幅があり、300g～450gの範囲のものが多い。3層に4点、4層上層に3点、第1遺構群に18点、4層中層に8点、第2遺構群に2点、5層に2点、計37点出土した。

16は小形の有溝土錘である。重量21gを計り、第4層に2点出土した。

22～29は蛸壺である。3層に12点、4層上層に41点、第1遺構群に17点、4層中層に15点、第2遺構群に4点、第5層に40点、計129点出土した。各層ともほぼ同一形態のものである。

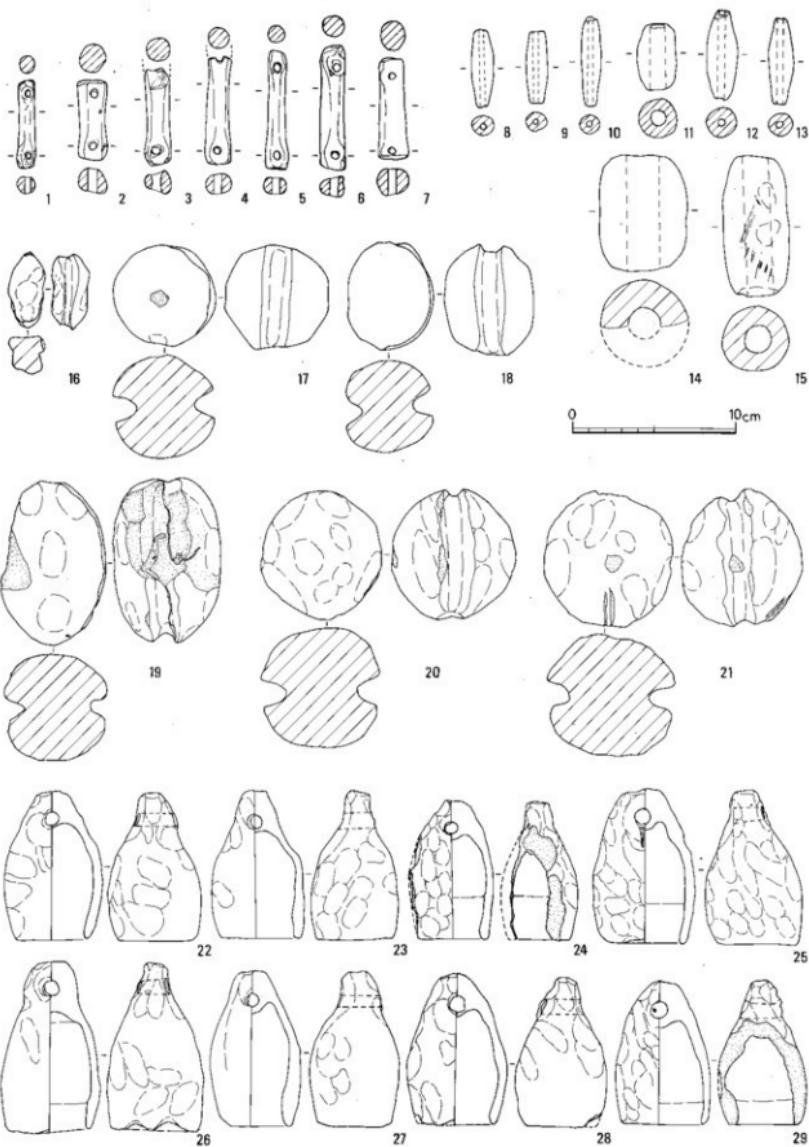
釣針は、4層中層に1点、第5層に1点出土した。第134図22に5層出土のものを示す。

最後に大浦浜遺跡の土錘出土傾向について説明を加え、今後の検討課題を示す。大浦浜遺跡全発掘区で大形有溝土錘を多量に出土する地区は、南端地区、ヤケヤマ東麓地区に限られる。これらの地区には、古代末～中世にかけての包含層、遺構群が存在し、大形有溝土錘の大部分がこの層と遺構内から出土した。この時代を先行する土錘としてB～F～4～8区の3層～4層（奈良朝～平安前期の包含層）出土のものが考えられる（第129図、第7表）。大形有溝土錘は第3層下層に1点出土しただけで、他のものはタイプは異なるが、全て小形に属する土錘である。本遺跡におけるこの相違点は、古代末～中世に大形有溝土錘が出現したことによる差と考えられ、同一傾向の土錘出土状況を示す遺跡として、隣接の与島塩浜A地区がある。

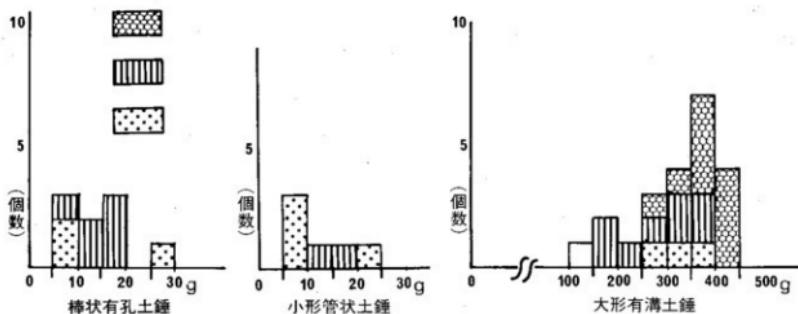
形態は異なれ、近現代の実用例からみても、土錘の重量と網の大きさには比例関係があり、小形のものに比べ、数十倍の重量を持つ大形土錘が利用されるためには、網、漁船の大型化、それに伴う集団が必要であろう。当然、大型の網により多量に得た魚類を島内だけで消費したことは考えられず流通といった経済上の問題にもかかわってくる。またこの時期に大浦浜遺跡で大規模な製塩活動が消滅しており、他方面に生活の糧を求めた集団の移動も考えられ、今後検討を加える問題点は多い。

## e 鉄製品、ふいご口（第134図）

南端地区で出土した鉄製品には、釘、鎌、釣針がある。出土点数は、釘73点、鎌1点、釣針2点であり、層位別には、第3層に釘23点、第4層上層に釘26点、第1遺構群に釘6点、第4層中層に釘3点、鎌1点、第2遺構群に釘6点、第4層下層に釘1点、第5層に釘3点、釣針1点が出土している。なお、この集計には第1～2層出土のものは含めていない。鉄製品はほとんどのものが釘であり、第3層～第4層上層にかけての出土が多い。平面的な分布では、南端地区全域に出土し、一部の区画に集中する傾向は見られなかった。



第 133 図 土鍤・蜻蛉実測図



第8表 土錘重量計測表

鉄釘は全て方形の断面をもつものであり、頭部については、残存するものを見るかぎり折曲式が大半を占める。鉄釘の大きさについても、何らかの統一された規格の存在が見られる可能性もあるが、さびの付着がいちじるしく、ほとんどのものが欠損品であるため傾向を見い出すにはいたらなかった。南端地区の立地環境を考慮すれば、造船用に利用された可能性が高い。

1~20は鉄釘である。8は最も小さいもので、長さ2.7cm、重量1.30gを計る。20は最も大きいもので、残存部分の長さは7.6cmあり、重量15.55gを計る。

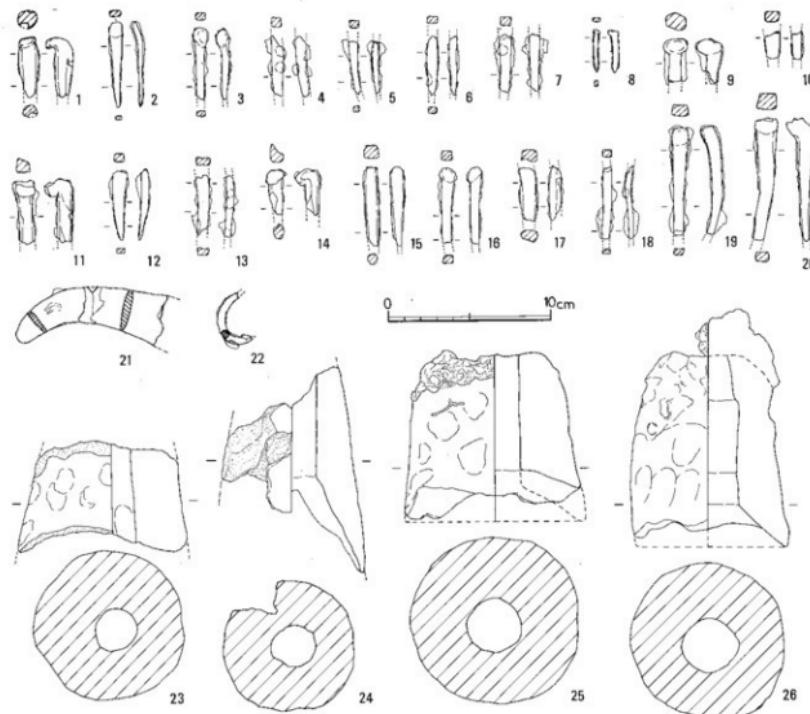
21は鉄鎌である。第4層中層より出土し残存部で長さ9.4cm、最大幅3.1cmを計る。断面は刀部にやや細い長大円形であり、最大厚0.5cmである。先端部は嘴状にまがり、体部中央から基部にかけては欠損している。

22は釣針で第5層より出土した。断面はダ円形で長径0.6cm、短径0.4cm、長さは残存部で3.0cmを計る。両端部が欠損しているが、先端部のかえしが残っている。

ふいご口は現段階で、南端地区だけに出土した遺物である。破片が多く正確な点数はつかみにくいが、8個体の出土は確認している。この8個体についての出土層は、第3層に3点、第4層上層に3点、第1遺構群のピット8に2点である。ふいご口の形態は、据部がやや広がり先端部がまるくなったり円筒状で、末端部内壁を削り据部断面を三角状にしている。通風孔は芯に丸木を使用したものと思われ、円柱状の穴である。

23~26はふいご口で23・24は第4層上層、25・26は第1遺構群ピット8より出土したものである。25は器高が低く両端部に欠損が見られるもので、体部外面に指頭痕が残る。先端部に、熱を受け赤褐色に変色した箇所が残り、据部は半球状にえぐられている。全長7cm前後、先端径8.0~8.5cm、末端径10.0~10.5cm、厚さ3.0~4.0cm、通風孔の径2.5cmを計る。26は欠損が著しいものであるが、器高はほぼ原形長を保っている。全長13cm前後、厚さ2.5~3.0cm、通風孔の径3.0cmを計る。両端の径は測定できないが、中央部径は8.0cmである。25はほぼ完形のもので、体部外面に指頭痕が残り、先端部に鉄滓が付着している。全長10.5cm、先端径7.0~8.0cm、末端径10.5~11.0cm、通風孔の径3.4cmを計る。26は完形のもので、体部外面に指頭痕が残り、先端部と通風孔内部に鉄滓が付着している。全長12.0cm、末端径9.0~10.0cm、通風孔の径3.5cmを計る。先端部はうすくなって終わっており、先端径は測定しなかった。

ふいご口に関連した遺物として、鉄滓が第4層を中心として各層に含まれており、南端地区での小鍛冶が行なわれていたことを示している。この地区で出土した鉄製品の大半は、自給されていたものだろう。小鍛冶が存続した時代については、関連遺物の層位的な出土状況から見て、鎌倉時代初頭から近世にかけての時代幅が与えられる。



第134図 鉄製品・ふいご口実測図

#### f 円板状土・石製品（第135図）

大浦浜発掘区で、1,200～1,400点の出土があると思われ、その内大部分である1,000点前後が、南端地区で出土している。利用されている材質は、製塙土器がほとんどで次いで土師器、須恵器、まれに青磁・瓦器・石・近現代陶磁器利用のものが見られる。第3層以下のものについて層位別に出土点数を見ると、第3層652点、第4層319点、第5層5点の出土であった。出土状態の特徴としては、50個ないし200個の製品が一塊になって出土する箇所が、第3層に3箇所、第4層中層に1箇所あり、他のものは各層に点在する状況である。

この遺物の時代については1～3層に出土したものは、同一土層に近世以後の遺物を多量に含む点、利用された材質に近世ないし近現代の陶磁器を含む点などから、近世から近現代にかけて製作されたものと考えられる。第4～5層に出土したものは、近世以後の遺物は利用されておらず、土層自体古代～中世にかけて良好な包含層である点を考慮すれば、共伴遺物と同時期のものであろう。

1は青磁皿底部を利用したもので、内面からのみ打ち欠いており、最大径5.1cm、最大厚1.2cmを計る。第3層に1点出土した。

2～4は石を利用したもので、8点出土した。内訳は、第3層にサヌカイト利用のもの1点、砂岩のもの1点、花崗岩のもの4点、第4層に花崗岩のもの2点である。2はサヌカイト利用のもので、両面からの剥離が見られる。最大径4.9cm、最大厚1.1cmを計る。3は砂岩を利用したもので、片面に細かい剥離が見られる。側面はなめらかであるが、人為的に磨かれたものか、自然による風化か判断できない。最大径4.7cm、最大厚0.8cmを計る。4は花崗岩利用のもので、両面からの剥離が見られる。最大径4.1cm、最大厚0.8cmを計り、第3層より出土したものである。

5～10は、須恵器利用のもので、第3層に23点、第4層に7点出土した。直径2.5～4.6cm、厚さ0.6～1.0cmを計る。側面は荒く打ち欠かれ、磨かれた跡はない。

11～29は製塙土器利用のもので、第3層に524点、第4層に263点、第5層に5点出土した。ほとんどのものが、古墳時代後期のものの口縁部から肩部にかけてタタキ目の残る部分を利用している。直径2.3～5.4cm、厚さ0.4～0.9cmを計る。側面は、磨かれたものか、自然の風化か判断できない。

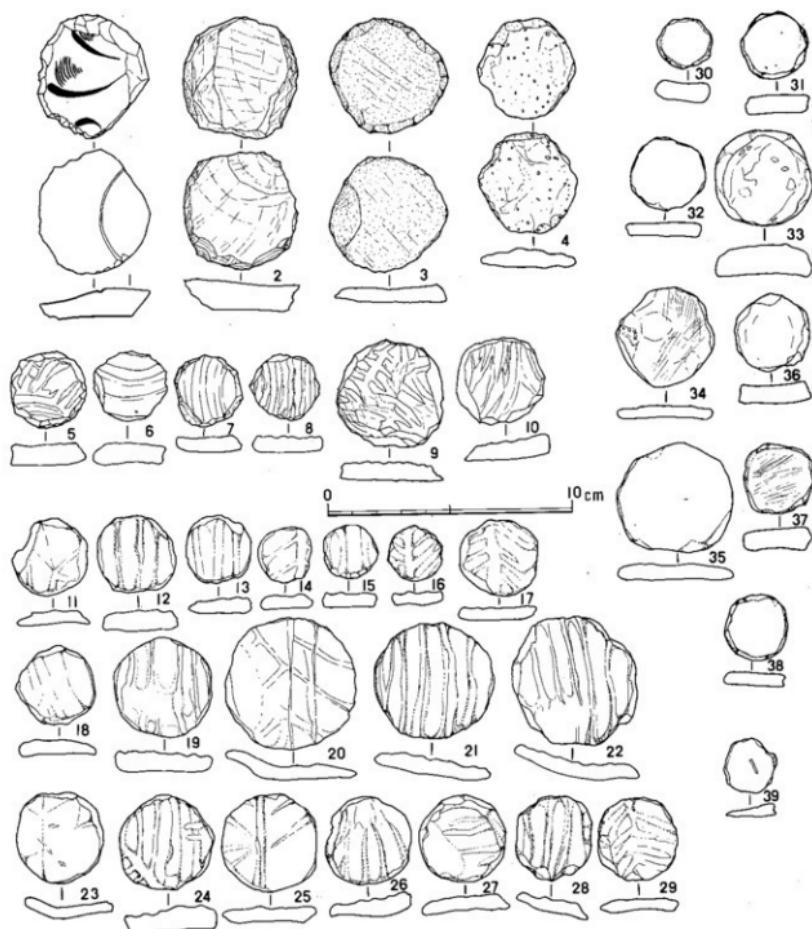
30～38は土師器利用のものである。第3層に97点、第4層に47点出土し、直径1.9～4.7cm、厚さ0.5～1.3cmを計る。側面は、磨かれたものか、自然風化か判断できない。

第136図①②に第3層以下に出土したものについて、層位別に厚さと直径の度数分布図を示す。(厚さ、直径については、最大値と最小値の平均を用いた)。厚さは0.4～0.8cmに直径は2.0～3.0cmに中心を持つ集団であり、各層とも同一傾向を示す。次に第136図③④に量的出土があった、製塙土器、土師器、須恵器の種類別の分布を示す。この場合も層位別に見たものとほぼ同一傾向となっている。

これらの結果からすれば、利用される土器片は、層位・種類を問わず、0.4～0.8cmほどの厚みをもったものが選択されており、直径についても2.0～3.0cmという限られた範囲に集中する。<sup>(1)</sup>これらの点は、使用される目的に起因する規格性なのであろうが、あるいは使用する際にはこのような規格性は必要ではなく、作製段階での加工が容易な点から必然的に決まったものだろうか。現時点では、これらは全て推定であり、今後の資料の増加を待って、検討していきたい。

#### 注

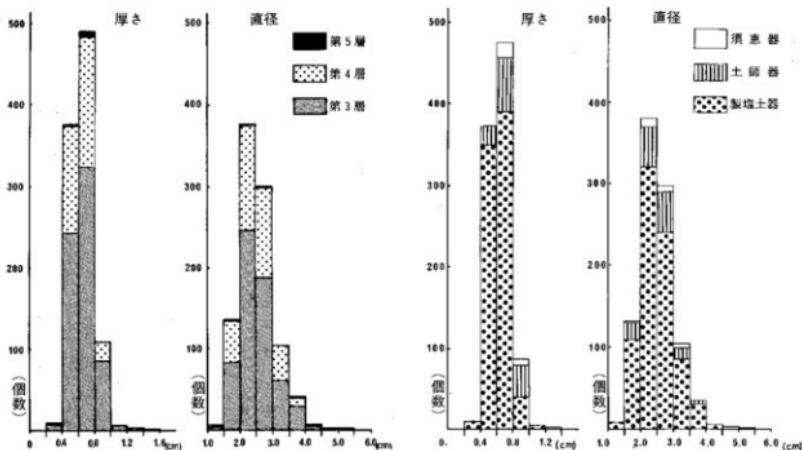
- (1) 現在、円板状土・石製品の使用目的として、冥錢、賽銭説、めんこ説、土鍤、紡錘車説、玩具・遊戯具説などが上げられている。これらは使用目的別に大きさの変化が見られるのだろうか。



第 135 図 円板状土・石製品実測図

### 8 製塩土器

南端地区第4層～第5層にかけて出土したものである。採集したものの重量は48kgを計り、未採集の小片を含めれば、200kgほどになると考えられる。出土量を層位、遺構別にしてみると、第4層上層に4.3kg、第1遺構群に24.4kg、第4層中層に3.7kg、第2遺構群に4.4kg、第4層下層に1.4kg、第5層に10.2kgとなる。出土状態の特徴として、層に包含されたものより、遺構群



第136図 円板状土・石製品厚さ・直径分布図

の土坑・ピット内に廃棄された状態で出土するものが量的に多い。廃棄場所として利用された遺構には、第1遺構群土坑1(4.6kg)、土坑4(16.8kg)、ピット7(2.8kg)、第2遺構群土坑5(1.2kg)、土坑6(1.7kg)がある。本地区出土の製塙土器は、胎土に金雲母を多量に含むもの(以下胎土A)が多く、現在までの整理結果では他の地区に見られない特徴である。そこで今回の報告では胎土A以外のものを胎土Bとして区別しておく。以下、遺物について説明を加えていく。

#### 口縁部(第137図)

口縁部の形態は、内反するもの(以下I類とする)、直立ぎみのもの(II類)、外反するもの(III類)に分けられる。

1~6はI類のもので全て胎土Bである。復原口径8~12cm、器壁2~6mmを計る。内外面に指頭痕が露骨に残るものが多い。

7~15はII類で、胎土Aのもの(7, 8, 10~15)と胎土Bのもの(9)がある。復原口径8~12cm、器壁2~6mmを計る。外面には指頭痕が残り、口縁部を直立させるためであろうか、内面の横ナデが強調されているものが多い。

16~27はIII類で、全て胎土Aである。復原口径7~13cm、器壁2~4mmを計る。外面に指頭痕が残り、内面には横ナデが強調されている。端部の内側は、横ナデにより器壁が削られ、端部は錐状になって終わるものが多い。

#### 底部(第138図1~30)

148点出土し全て尖底である。層位、遺構別には、第4層上層に1点、第1遺構群に94点、第4層中層に19点、第2遺構群に13点、第5層に21点出土し、土器片の出土量が多い層、遺構に

は底部の出土も多い。比較的残りの良いものを30点図化した。

Iは第4層上層、2~17は第1遺構群、18~22は第2遺構群、23~30は第5層より出土したものである。層位、遺構別に見ても、それぞれ器壁の厚さ尖底の形に、バラエティがあり、大きな形態変化の流れは見られない。尚、胎土Aに該当するものは7~9、11~17である。

31は第5層より出土したミニチュアの製塙土器で、口径3.2cm、器高4.4cmを計る。内外面とも指ナデによりなめらかに仕上げられており、焼成も良好である。本地區では1点だけの出土であった。II類の胎土Bに該当する。

#### 穿孔のある破片（第139図）

穴があいている破片は34点出土した。層位、遺構別の出土点数は、第1遺構群に13点、第4層中層に4点、第2遺構群に4点、第5層に13点であり、土器片を多く出土する層、遺構に穿孔の破片が多く含まれている。

1~19は体部の粘土が乾かないうちに外側から穿けられた穴で、内側には押出された粘土が付着している。穴は全て円形に近く、径2~6mmで4~5mmのものが多い。7、10~13は底に近い部分の破片で、19は尖底部が残っている。これらの例では、穿孔は底に近い部分に行うという規則性が見られる。

20は口縁端より2.5cmほど下がった位置に穿けられた穴で、焼成後のものである。自然の割れによる可能性もあるが、一応紹介しておく。

21は口縁端に半円状に切られたもので、切り口は指でなでられている。焼成前の穴である。尚、胎土Aに概当するものは1、2、6~8である。

また、20、21のような穿孔を持つ破片はそれぞれ1点しか出土せず特異な例であろう。一般的な穿孔は、1~19に見られるものである。

穿孔がある破片については、粘土が乾かないうちに穴をあけている事、外面から穿けている事、底に近い部分に穿けている事、以上3つの共通点が見られる。破片の形態、胎土、手法などから見ても、一般の製塙土器片とまったく区別がつかず、出土状態も一般の製塙土器片の出土量の多い層、遺構には穿孔ある破片の出土量も多い。この傾向から見れば、製塙土器を作る段階で、何%かのものに穿孔を用ける必要性があったようと思われる。

#### 小結

本地區出土の製塙土器は、共伴する遺物からすれば、古代末~中世にかけてのものである。しかし、現在の通説ではこの時代まで土器製塙が残るといった類例は見られない。この点については、第6章にて検討を加える事とする。

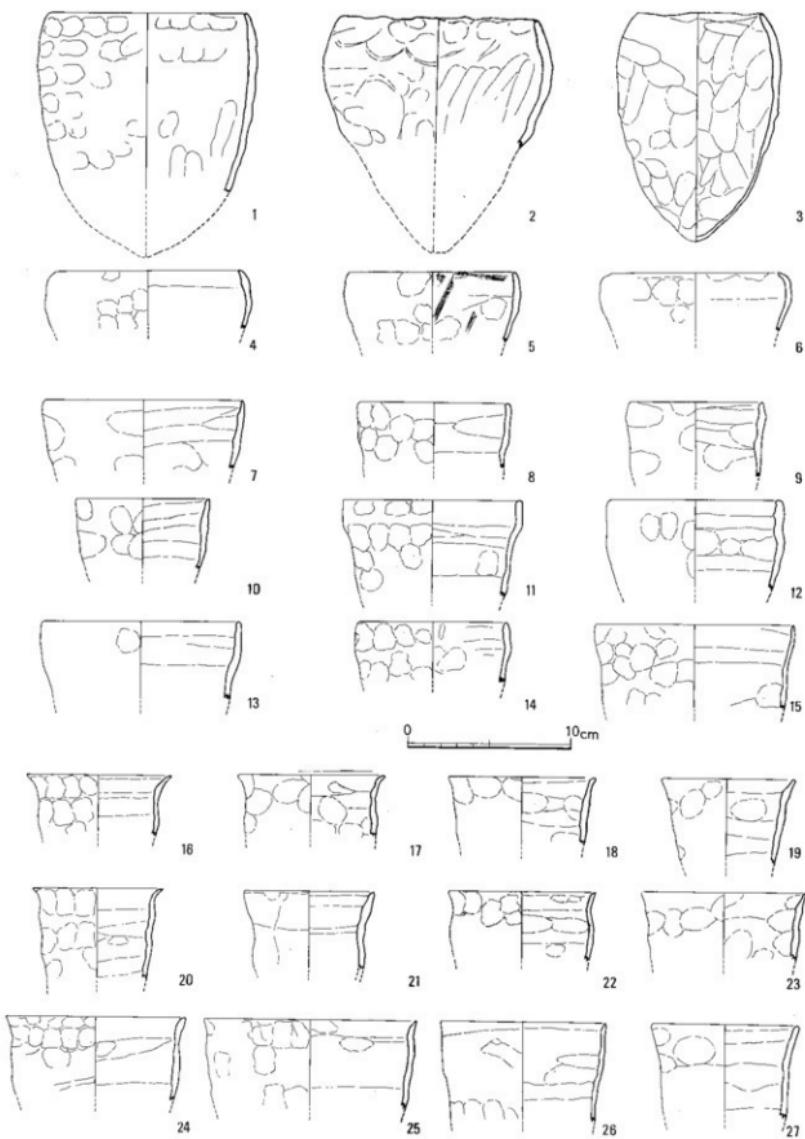
(白本)

#### 注

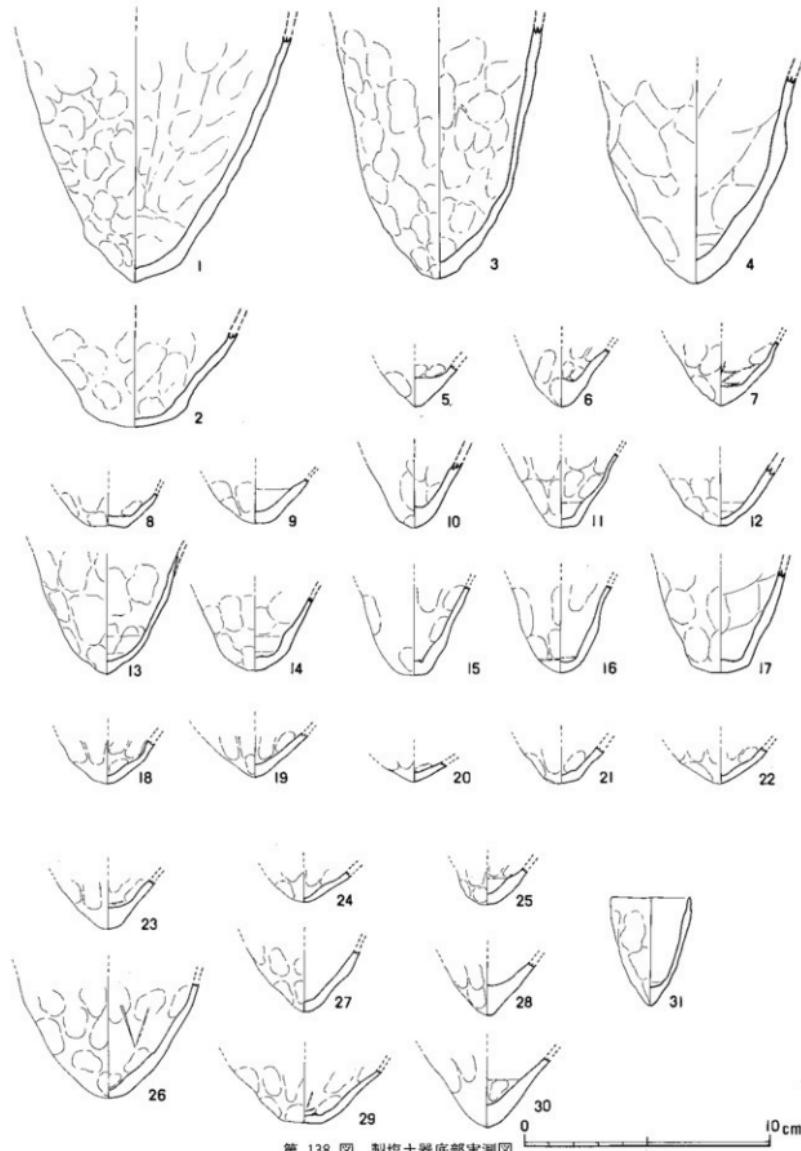
(1) 大浦浜遺跡の1区画(25m<sup>2</sup>)で、細かい破片を全て採集した結果、通常の発掘による採集量の4~5倍の値を示した。

(2) 大浦浜全体では、今までに3点の出土が確認されている。

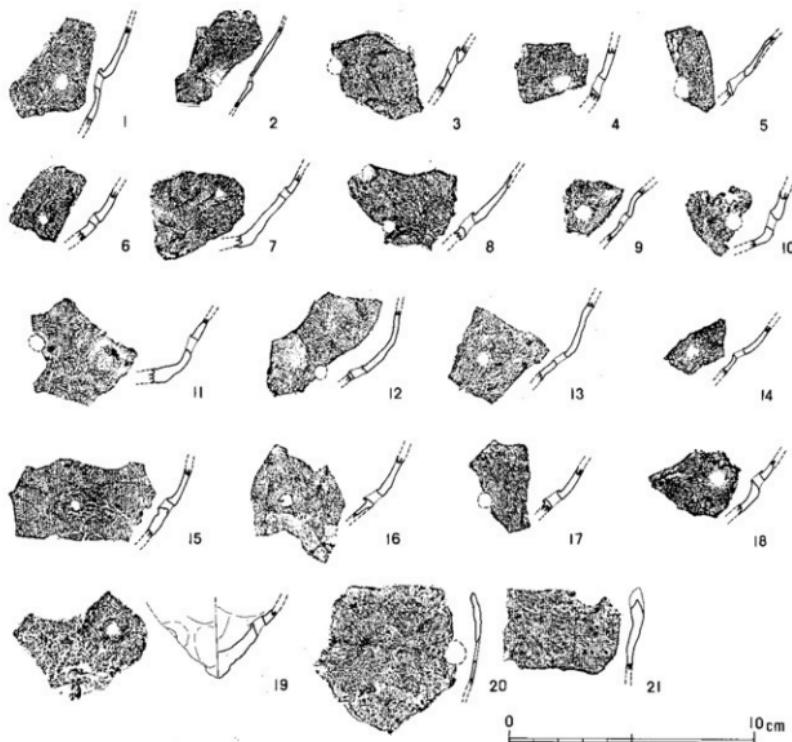
(3) 第139図に紹介されたものを含めて、考察した結果である。



第 137 図 製塙土器口縁部実測図

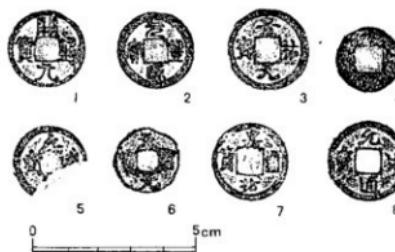


第 138 図 製塩土器底部実測図



第139図 穿孔製埴土器実測図

## 第9表 錢貨一覧表

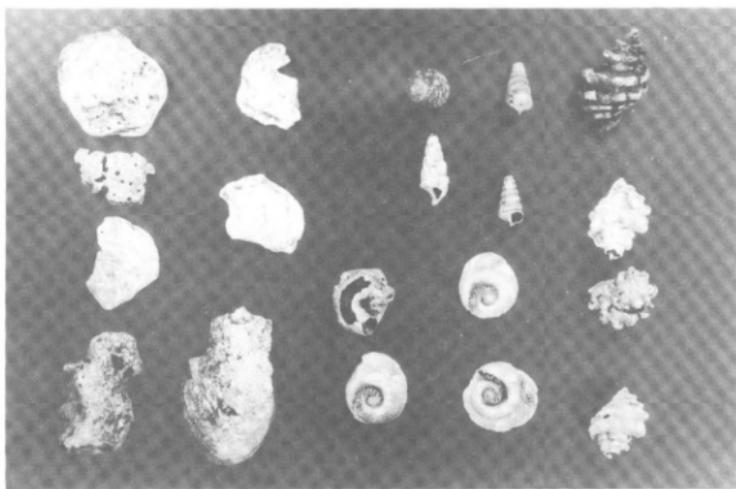


第140図 錢貨拓影図

	出土地点	層位	錢種	初鑄年	備考
1	ヤケヤマ車蓋 J-3	第3層	開元通寶	武應4年 621年	唐錢
2	A-1	" 第3層	元豐通寶	元豐元年 1078年	北宋錢
3	H-3	" 第3層	景祐元宝	景祐元年 1034年	北宋錢
4	E-1	" 第3層	不 明		
5	F-3	" 第3層	元 宝		
6	J-2	第3層	天聖元宝	天聖元年 1023年	北宋錢
7	大浦浜南端区 B-02	第4層	嘉祐通寶	嘉祐元年 1056年	北宋錢
8	B-02	" 第4層	元祐通寶	元祐元年 1086年	北宋錢



第 141 図 大浦浜遺跡出土獸骨



第 142 図 大浦浜遺跡出土貝類

## 6 土器編年

### (1) 弥生後期末～古墳前期土器編年について

備讃瀬戸地域における弥生時代後期末～古式土師器の編年作業は、現在まで良好な資料に恵まれなかつたことに起因し、他地域に比べて遅れているのが現状である。

少ない資料を用いたこの地域の編年観としては、岡山県高島王泊遺跡の層別資料<sup>B(1)</sup>・倉敷考古館の調査による山田・原遺跡<sup>B(2)</sup>・走出遺跡<sup>B(3)</sup>の資料を用いた、酒津式一王泊第6層一（山田原）一王泊5層一走出の序列が考えられている。しかし、各々の資料の不足及び形態変遷の不十分さに加えて地域色が顕著であることから、必ずしも備讃瀬戸地域内に適応しうる編年観ではないと考える。

備讃瀬戸地域内に適応しうる明瞭な編年観を作成することを目的に、今回は大浦浜遺跡出土土器を概観することでその踏石としたい。

大浦浜遺跡出土の弥生時代後期末～古式土師器の段階に属する土器は、大きく「土器群」と「包含層」の資料に分けることができる。「土器群」の土器については、昨年度概報と本書において述べているように、単なる土器の集合にすぎず、一括資料としての取り扱いはしていない。又、「包含層」出土の土器は、資料が多いことと時間的な制約で十分な検討を加えることができなかつた。

以上のような、不十分な資料の集積ではあるが、若干形式的な資料操作を加えて單一「型式」を設定することは可能であろう。

前述したように、今回の編年案の作成は、将来のより確実な編年案作成作業の糧とすることに加えて、大浦浜遺跡全体の評価をより客観的に示す一プロセスであると考える。

以上のように、整理作業途中での案であること、一括資料に立脚していないこと、一部型式学的に前後関係を推定していることから、今回の編年案にはあえて「式」をつけず、単に「大浦浜I」のように呼称する。今後の整理作業の進展と地域内での良好な資料の検出と検討によって、この編年案自体がより良く改正されることが望まれる。

弥生土器・古式土師器の名称については、都出比呂志氏の意見<sup>B(6)</sup>に従い、布留式土器を古式土師器とし、それ以前を弥生時代後期末（畿内縄向I式～III式を指す）と一応しておく。

大浦浜遺跡出土の土器については、後述する大浦浜Iに属する土器の、前段階の器種構成・形態を重視する意味で、坂出市高屋遺跡A:Sトレンチ出土遺物中から、任意に抽出した一群を設定した。

又、布留式土器の齊一性を根拠として、やや地域の異なる普通寺市善通寺西遺跡DII区溝Iの資料と、寒川町布勢遺跡第IV区S P01一括資料を補強資料として組み込んだ。

#### 高屋（期）（第143図）

①はやや古い様相を持っているが、一応同一時期とした。壺A①は二重口縁壺である。壺B②は口縁部がほぼ直立しながら外反する。胴部は肩部に最大径があり、やや丸くなる平底を持つ。壺Cは、吉備に通有の形態で、長い頸部と水平に近く開く口縁部を持つ。

壺A④は「く」の字に開く口縁、肩の張り、平底を有し、外面は叩キのち刷毛目、内面は

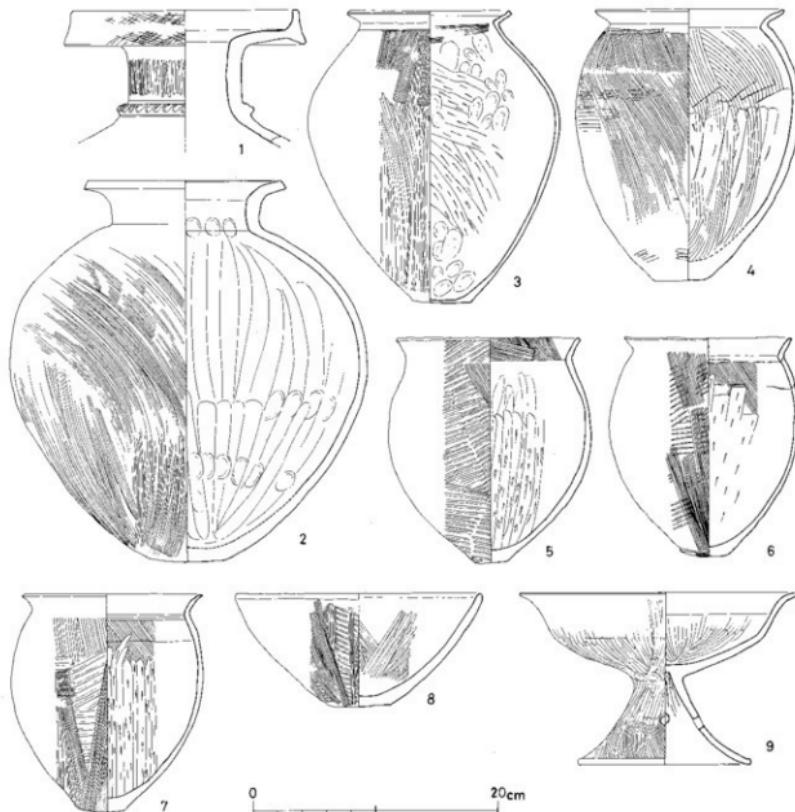
ヘラ削りが見られる。

甕B⑥～⑦は、甕Aに比べてやや小形で作りが荒い。調整は甕Aと同様である。甕A・Bの中には、底部に叩き目を残すものも多い。

甕C③は、肩の張りが顕著で口縁部の外反も鋭い。口縁端部は、つまみ上げが見られる。この甕Cは、播磨・長越遺跡の「甕D」<sup>(11)</sup>と同タイプのもので、讃岐系としておられるが、少なくとも高屋遺跡においてはこの1点しか出土しておらず、他の土器と胎土も異なることから、やはり搬入を考えている。

高杯A⑨は、杯部の1/3程が外反し、脚もゆるやかにカーブして脚端に至る。

鉢A⑧は、平底を有し、調整は甕A・Bと同様である。



第143図 高屋遺跡遺物実測図

## 大浦浜 I

A・B-50・51区出土資料（第114図①～⑩）で設定した。予備調査III-9-A（土器館）の資料もこの時期と考えられる。

壺の資料は少ない。壺Cは体部の形態は高屋（期）と同様と考えられるが、頸部が短くなり全体的に球形に近く見える。

壺D①は、口縁部が直線的に外反するもので、内面はヘラ削りをしている。

壺A③は、前段階からより発達し、肩部が張り、底部は小さくなるが、まだ平底を残す。

壺B②④は、前段階とほとんど差がみられない。壺A・Bとも、高屋（期）のものと調整は同様であるが、外面の叩き目が細くなるのが特徴である。

壺E⑤は、吉備系の壺で、才ノ元式<sup>12)</sup>に比定できるものである。

高杯A⑥⑦は、杯部の屈曲部に稜ができ、やや直線的に外反するようになる。脚部は、やや屈曲する傾向が見られる。高屋（期）のものと比べると、この間に一タイプが考えられる。

鉢A⑩は、やや小形化するが、技法面での差はあまりない。ただ底部付近にヘラ削りが見られ、丸底化に伴うものと考えられる。

鉢Bが出現する。鉢Bは、外面に叩き目が顕著に見られ、折り曲げの口縁を有する。

大浦浜Iの壺には、高屋（期）の壺には見られなかった細筋の叩き目が採用され、やや丸底化の傾向が見られる。又、壺Aのプロポーションは、畿内の庄内壺に近くなる。

## 大浦浜II

この時期に属する資料は、現時点ではほとんど抽出することができなかった。ただ壺Eは、亀川上層式のものが数点見られた。

鉢A（第114図14）は、外面の叩き目が消滅し、浅く、口径も広くなる。底部付近にはヘラ削りが顕著である。

## 大浦浜III

この段階の資料には、第12土器群の資料（第149図⑦～⑨）が該当すると思われるが、ほとんどの器種が欠落している。

この段階に、小型丸底壺B⑧⑨が出現する。

壺A⑦は、口縁部が二段に屈曲し、屈曲部に水平な突帯が見られる。体部は球形化し、内面にはヘラ削りが見られる。

## 大浦浜IV

壺Aは出土していない。

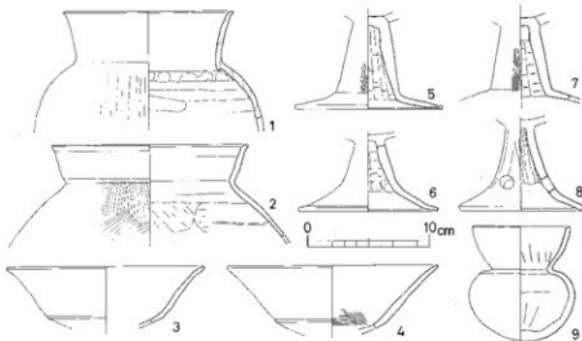
壺B<sub>1</sub>は球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部に変わり、口縁端部は平坦である。外面は刷毛目、内面はヘラ削りする。

壺B<sub>2</sub>は、B<sub>1</sub>と形態的な差は、あまり認められない。口縁部の立ち上がりがB<sub>1</sub>よりも急で、端部は平坦である。

壺B<sub>3</sub>はB<sub>2</sub>よりも急な立ち上がりであるが、やや外反傾向が見られる。

壺DはB<sub>3</sub>のような口縁部を持つが端部は丸く終わり、やや長胴化している。

壺Aは、口縁部が内湾し端部は内面が傾斜した平坦面を有する。外面は刷毛目、内面はヘラ



第 144 図 布勢遺跡 (IV A 区 S P 7401) 遺物実測図

削りを有する。

壺Cはやや長胴化し丸底となるが、まだ肩部の張りが残り、「く」の字に外反した口縁端部はつまみ上げている。外面は刷毛目、内面はヘラ削りで指頭痕が顯著である。

高杯Aは、杯部の屈曲部の稜は明確となり外湾する。脚部は接合部からなだらかに口縁端部にいくもの（a）と、直線的に下ったのち、明瞭に屈曲して脚端に至るもの（b）の二者がある。高杯Cは、ややふくらんだ脚柱部から（a）のような形態の脚部をもつ。

小型丸底壺は、B形態の名残りのもの他に新たにCタイプのものが出現する。

#### 大浦浜V

壺B<sub>1</sub>は前段階とさして違いはないが、最大径を胴中位に置く。

壺B<sub>2</sub>も明確な差は認められないが口縁端部が丸く終わる。なお叩き目が観察される。

壺Eは小型壺で、やや偏平面胴に直線的な口縁部を持ち、端部は丸い。

壺Aは球形の体部に内湾する口縁部を持つが、端部は丸く終わる。

壺Dは、球形の胸部に外反する口縁部を持ち、外面には叩き目を残す。

高杯Aは杯部の外湾部が高くなり、脚部は明確な屈曲部を持つ。

高杯Bが出現する。高杯Bは、杯部の屈曲部に段及び突帯がつくもので、脚部は高杯Aと同じである。

高杯Cは脚柱部のふくらみが増し、屈曲部が明瞭となる。

小型丸底壺は、Cタイプの傾向を持つものに、新たにDタイプが出現する。

#### 大浦浜VI

壺・壺の資料が欠落している。

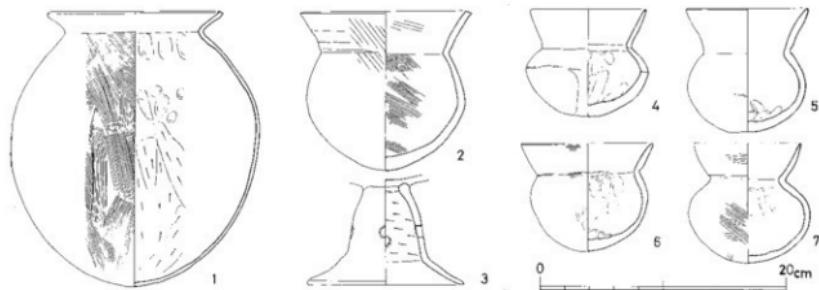
高杯Aは、杯部の屈曲部に段を持つ。又、杯部屈曲部からの外反は、一端内湾したのちに端部で外反する傾向にかわる。

高杯Bは前段階と大差はない。なお、脚部は（a）に限られ、内面のヘラ削りは見られない。

高杯Dは、高杯Aの杯部に接合部から直線的に「ハ」の字形に開く脚を持つ。

第10表 弥生後期末～古墳前期土器編年表

器種 年 代 式 別		壺					甌		高杯		鉢		小型丸底壺	
高 屋	坂出市 高屋遺跡 (あやとねいせき)	A	B <sub>1</sub>	C	D	E	A	B	C	A	B	A	B	
大浦浜 I	B — 50 第 3 層													
大浦浜 II														
大浦浜 III	第 12 群			B <sub>2</sub>										
大浦浜 IV	第 11 群 D 布勢遺跡 (WES-P01) 香西寺西遺跡 (DII区溝1)		B <sub>1</sub>							C				
大浦浜 V	G-11区 土器層			E		D				B				
大浦浜 VI	第 11 群 ②									D				



第145図 善通寺西遺跡遺物実測図

小型丸底壺は、Dタイプのものに限られる。

高屋（期）から、大浦浜VIまでの器種変遷を概観した。

高屋（期）の前段階には、香川県牟礼町原遺跡出土の土器が相当する。原遺跡では、壺Cと壺A・B・Cが見られる。

次に他地域との併行関係であるが、この時期の編年が進んでいる畿内との関係を考えてみたい。

高屋（期）には、壺の底部に叩キ目を残すものが見られ、完全な平底を残す。これは、都出比呂志氏の「タタキ平底手法」に近く、上田町1式（纏向I式）<sup>④(14)</sup>と共有時間を持つものと考えている。この点は、高杯の形態からしても矛盾はない。

大浦浜Iの段階では、やや平底が小さくなること、細筋の叩キ目が採用されていること、高杯の杯部が直線的に伸びる形態からして、庄内式（纏向II～III式）<sup>④(15)</sup><sup>④(16)</sup>に相当するものと考えたい。これは、壺Eの編年観からしても問題はあるまい。

大浦浜II以降を布留式土器と考えるが、在地系の土器が主たる要素をしめる為、主として高杯と小型丸底壺の変遷から見てみたい。

大浦浜IIは鉢A以外には図示していないが、前段階の壺Eからすれば、吉備の龜川上層式<sup>④(17)</sup>と坂田寺跡下層に比定して大過あるまい。

大浦浜IIIは、小型丸底壺がBタイプで、Aタイプに近い様相を残すので、上ノ井手S D031を考えている。

大浦浜IVは、小型丸底壺B'・C'が見られること、高杯の杯部がまだ深く屈曲部に稜が見られること、壺Aの内面が傾斜する平坦面を持つことで、藤原宮内裏東外郭S D912・914に共通する部分がある。

大浦浜Vは、小型丸底壺C・Dタイプが見られるので、上ノ井手・井戸下層に、大浦浜VIは小型丸底壺がDタイプに限られるので、上ノ井手・井戸上層以降にそれぞれ考えている。

大浦浜遺跡では、大浦浜VIには陶邑1期の須恵器が共存しない。器種構成が弱く、在地系の土器が多いが、長胴化した体部を持つものが出現していないので、時間的な併行関係については大過ないものと考える。しかし、上ノ井手遺跡井戸上層に続くと考えられている船橋0-I<sup>④(18)</sup>の段階については、大浦浜IVの壺Aが形態的な類似点を持つことから、併行関係の見直しが必要

であるかもしれない。

(真鍋)

#### 注

- (1) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』1956 岡山県高島遺跡調査委員会
- (2) 間壁忠彦『岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡』『倉敷考古館研究集報』第2号 1966 倉敷考古館
- (3) 注(2)書
- (4) 出宮徳尚・根本修『播磨庵寺発掘調査報告』1975 岡山市教育委員会
- (5) 本来、文末で行う操作であるが、各遺跡出土資料を、大浦浜遺跡出土土器の編年案で再検討する。挿図・土器番号は各引用文献の通りである。

#### 山田・原遺跡

1・2は、「く」の字に外反する口縁部と、球形の体部を持ち、「壺B」の系列で考えられる。3～5は、小型丸底壺Bに類似する。16～18は、やや内湾する口縁部を持ち、外面には叩き目が顯著である。25～29の鉢は、底部が丸底である。33～37の高杯は、杯部屈曲部に稜を持ち、脚部にも屈曲が見られる。

園化されている内、1～5・25～29・33～37の特徴から、大浦浜IIIに相当すると考えられる。しかし、9～12の特徴を考えると、大浦浜IIにも一部併行する可能性がある。

#### 王泊遺跡第5層

8・9は壺Aである。甕は、12～13・15が球形の体部に内面端部が肥厚する口縁部を持つ。14は尖底甕である。19は小型丸底壺Aに、20・21はBにそれぞれ類似する。24～28の高杯は、杯部屈曲部・脚屈曲部にそれぞれ稜を持つ。33～34の鉢は、それぞれ小さな平底を持つ。

以上の特徴から、14～33～34は大浦浜Iに、19～21・24～28は大浦浜II～IIIに相当しよう。(なお、大浦浜II・IIIは資料不足から、明確な判断はできない)このことから、一部混入があると考えられる。

#### 王泊遺跡第4層

59の高杯は、杯部屈曲部に三角形の凸帯を持つ。60・61も同様のタイプと見てよい。この高杯の特徴は、大浦浜V・VIに相当する。

52は小型丸底壺B'タイプに類似し、大浦浜IVに相当する。

#### 王泊遺跡第3層

84～88の高杯は、杯部屈曲部からの立ちあがりがやや内湾する傾向が見られ、大浦浜VI以降に位置付けられる。

#### 走出遺跡

高杯に、王泊3層に共通する部分が多く、これも大浦浜VII以降と考えられる。

#### 玉野市田井深山遺跡

各資料ごとの説明は省略するが、高屋(期)と大浦浜Iの両方に類似すると考える。各資料の比較検討をすれば、大浦浜Iを細分し、その(古)の段階を考えられる資料かもしれない。

各資料の位置付けは、大浦浜自体の制約もあり、所属期の不明な資料の方が多く、今後引き続き検討を加えたい。

- (6) 都出比呂志「古墳出現前後の集団関係」『考古学研究』80号 1974 考古学研究会
- (7) 石野博信・閔川尚功ほか『纏向』1976 横原考古学研究所編
- (8) 斎藤賢一「高屋遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和54年度 1980 香川県教育委員会  
斎藤賢一氏の御好意により、未発表資料を使用させていただいた。なお、実測は池内万知子氏の協

- 力を得た。
- (9) 「古代の溝と土器—善通寺遺跡の発掘調査から—」『埋蔵文化財資料展』パンフレット 1978 香川県教育委員会  
調査担当者松本敏三・藤好史郎氏の御好意により、未発表資料を使用させていただいた。  
なお第145図は、溝Ⅰ上層の出土資料の中から、真鍋が任意に抽出したものである。
- (10) 昭和52年度 香川県教育委員会調査  
調査担当者渡部明夫氏の御好意により、未発表資料を使用させていただいた。
- (11) 松下 謙ほか『播磨・長越遺跡』1978 兵庫県教育委員会
- (12) 藤田憲司「山陰『健尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号 1979 日本考古学会
- (13) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土器」『考古学雑誌』第60巻第2号 1974 日本考古学会
- (14) 六車恵一「香川県木田郡牟礼村原遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編』1961 日本考古学協会
- (15) 注(6)書
- (16) 注(7)書 土器の併行関係については、本書の記載を適用している。
- (17) 注(8)書
- (18) 原口正三・田中 琢・田辺昭三・佐原 真『船橋遺跡の遺物の研究（II）』1962初版・1975三版 平安学園考古学クラブ

## (2) 製塩土器編年試案について

備讃瀬戸地域における製塩土器編年は、岩本正二氏、近藤義郎氏、間壁貢子氏らの業績によって体系化されてきた。しかしながら倒壊形の脚台を持ち、外面に叩き目を施すタイプについては、山田原遺跡 王泊遺跡第3層出土の資料が断片的に知られているのみであった。また、薄手で尖底タイプのものは漠然と奈良時代という年代が与えられているだけで細かな検討はなされていなかった。

大浦浜遺跡出土の製塩土器は、倒壊形脚台をもち、外面叩き目のものが多く得られ、古墳後期～奈良平安時代のものも大量に出土した。さらに鎌倉時代のものと推定される製塩土器も出土した。そのため、従来の編年をふまえつつ、再度変化をたどり、大浦浜での製塩活動の変遷を明らかにすることを目的に、編年を試みた。

土器量は多く、短期間の整理作業の結果であるため、今後検討を進めて行くべき箇所はたくさんある。その意味では今回のものは第1次案にすぎない。

さて、今回は弥生中期から鎌倉時代までを6期に大区分した。脚台を持つ段階をI期、薄手コップ状の段階をII期、古墳後期に通有の厚手で叩き目が施される段階をIII期、薄手で叩き目が消え、尖底になるまでの段階をIV期、薄手無文で口縁が内湾し尖底の段階をV期、鎌倉時代と推定される一群をVI類とし、さらに細分を試みた段階もある。

以下各類について説明を加える。

### I—1類

城遺跡出土の資料で代表させた。城遺跡では、前山II式・仁伍式土器が混在した中で、U<sub>L</sub>・U・V<sub>L</sub>・Vの4つのタイプを抽出している。このU・Vタイプの検出は、製塩土器の分類・系譜上重要と認められる。

さて、仁伍遺跡では典型的なU<sub>L</sub>・V<sub>L</sub>タイプが出土していないことからすれば、U<sub>L</sub>・V<sub>L</sub>とU・Vを分離できる可能性が考えられる。又、器形の小形化をも考慮してU<sub>L</sub>・V<sub>L</sub>のみの段階を想定した。時間的には、前山II式の段階を考えている。

形態は、所謂「台付鉢」で、鉢部の形状がゆるやかに内湾しながら上方に伸びるもの(U)と、やや直線的に内湾するもの(V)がある。外面は、脚台までヘラ削りを施す。口径は、36cm前後の資料が多い。

### I—2類

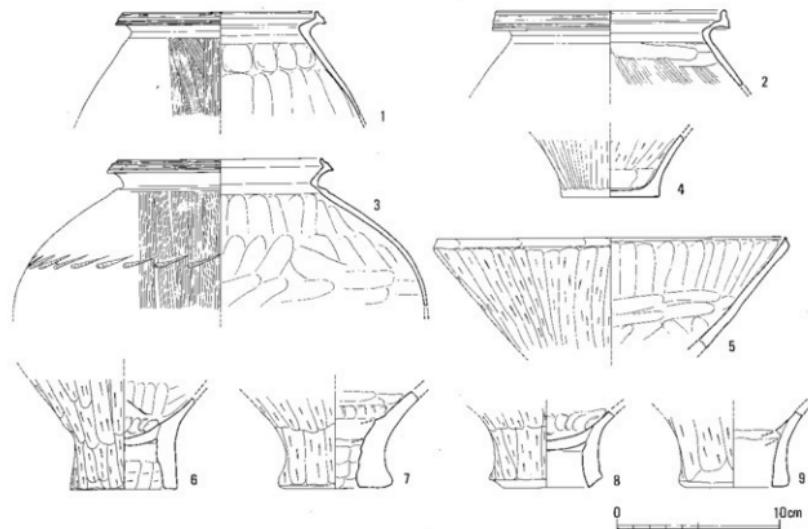
仁伍遺跡出土資料を標式とする。形態・調整ともにI—1類と同様である。先にも述べたように口径・器高で分離しており、口径は20cm前後と小さくなる。UタイプとVタイプは継続する。

最近、香川県大川郡志度町天野遺跡でも同類が検出された。(第146図)天野遺跡では、口縁部破片で形態のわかる資料はすべてVタイプである。

又、大浦浜遺跡でも脚部のみ3点(第108図①)出土しており、この時期の散発的な活動を思わせる。

### I—3類

香川県大空遺跡出土資料を標式とする。計6点出土している。Uタイプの資料は、口縁部が内湾する。口径はU・VタイプとともにI—II類に比べて小さくなり、ややスマートになる。外面の調整はI—2類と同様であるが、内面には刷毛目が顕著に見られる。



第 146 図 大川郡志度町天野遺跡出土遺物

## I—4類

上東遺跡出土資料を標式とした。従来上東遺跡出土資料はVタイプのみであったが、1977年の報告時に、新たにUタイプと中間的なタイプが明らかにされた。

Uタイプは、口縁の内湾傾向がより進み、外面には刷毛目の使用が認められる。

Vタイプは、より口縁が小さくなりスマートになる。

中間タイプは、やや内湾しながら口縁端部に至るもので、まさにUタイプとVタイプの中間的な器形と見ることができる。

脚部は、Vタイプの資料が台状であるのに、Uタイプ・中間タイプの脚部には後出の倒壊形に近い要素が認められる。

この段階でも、外面調整は体部・脚部とともにヘラ削り手法を用いている。

## I—5類

I—5類に属する良好な資料は不足しているが、大浦浜遺跡A・B—50・51区第3層出土（第108図2～8）の資料をこの段階に考えている。

体部は、I—4類中間タイプの資料よりもやや直線的であるが、口縁端部の形態が不明である。

脚部は3タイプあり、AタイプがI—4類中間タイプに、CタイプがVタイプに近い。Bタイプは、後出する倒壊形脚部に最も近いと考えられる。

なお、I—4類までは、体・脚部共にヘラ削り手法が見られたのに、この段階では、体部がヘラ削り、脚部は指頭圧痕・指ナデ調整にかわる。

### I-6類

岩本氏編年C類の百田遺跡出土資料がこの段階である。

器形は中間タイプの資料から導き出され、口縁部の頗著な内湾は見られない。脚部は倒壊形になり、外面はヘラ削り手法にかわって、全面ナデ調整が施される。

同類に位置付けられる資料として、坂出市高屋遺跡出土のものがある。高屋例は、体部の開きが百田例よりも直線的でスマートであり、脚部は小さな倒壊形となる。Vタイプの系譜で考えられる。

### I-7類

単独出土の資料で、大浦浜遺跡出土の資料の中では、外面に叩き目が導入される最初の形態である。

器形は、口径が前段階よりも大きくなり、ややふっくらとした体部に倒壊形の脚部を持つ。

### I-8類

大浦浜遺跡E-14区SK1出土資料（第147図3）を標式とした。

脚部は倒壊形で、I-7類のものよりやや大きくなる。

体部は、丸みをもって内湾し、端部は内傾する平坦面を持つ。I-7類に比べて、飛躍的に容量を増す。

昨年度報告したG-15区SK1出土資料（本書第147図5～12）も同類に属する。

### I-9類

王治遺跡第3層出土資料を標式とした。

I-8類よりも、体部と脚部の接合点からの立ち上がりが低く砲弾形を呈すること、脚部の径が大きくなり、やや扁平になることで分離できる。

### I-10類

山田原遺跡出土資料を標式とした。

I-9類に比べて体部の立ち上がりがより低くなり、器壁も薄くなる傾向にある。脚部は扁平で、より径を増す。大浦浜遺跡出土資料では、第108図15～20がこの類に相当する。

### I-11類

この段階に属する資料は非常に少ない。I-10類に類似するが、接合部の厚みが器壁同様に薄くなること、体部がやや小形化することに伴う脚部の縮少傾向を示すことからI-10類とは分離した。

同類内でのバラエティーとして理解できるかもしれない。

### I-12類

大浦浜遺跡では、I-10類と同一層中から多数出土している。

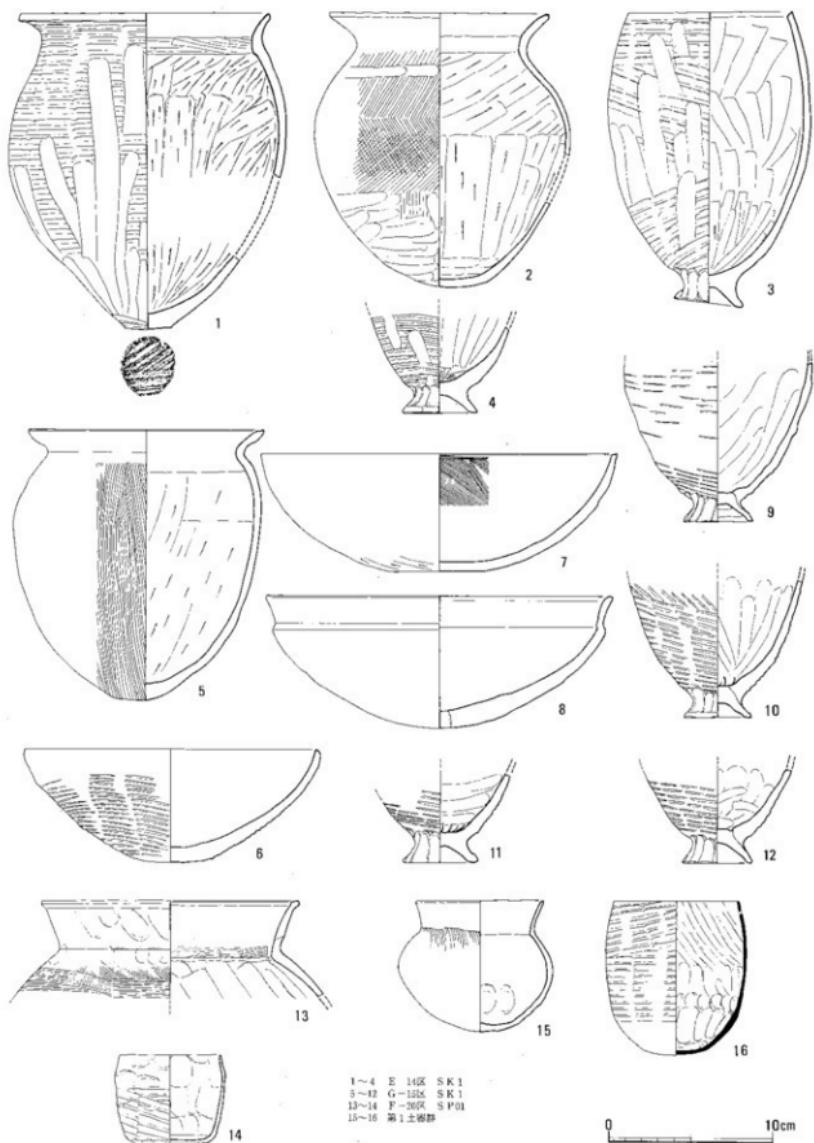
脚部の形態に大きな変化がおこり、体部の容積もI-11類より減少する。体部には、次のII-I類と同形態のものが考えられる。

又、この類に属する資料には、より小形の円柱状を呈する脚部もある。

### II-1類

予備調査III-10-X・Y区出土の資料を標式にした。

底部はやや平底風で、口縁部は内傾するものも多い。器壁は1～3mmの薄手で、外面には叩き目が見られる。



第 147 図 古式土器と共伴する製塩土器実測図(1)

## II-2類

II-1類とほぼ同形態・同調整であるが、器高が低くなり、やや丸味を持つ。底部は丸底・尖底風になる。大浦浜遺跡では、第1・11土器群に伴出したものが、この類に属する。喜兵衛島南東浜I<sup>(16)</sup>に類例がある。

## II-3類

第11土器群で、II-2類と共に伴して出土している。

口縁部は直立し、体部はやや扁平な球状を呈する。底部は平底で安定感がある。器壁の厚さは、底部を除けばII-1・II-2類と同様である。

一点しか出土していないが、次のIII-1類に先行する資料として設定した。

## III-1類

喜兵衛島第13号墳出土<sup>(17)</sup>の資料を標式とした。

II-3類を全体的に安定化すると同時に、器壁は厚くなる。口縁部・体部の区分が明瞭になり、肩部より上には平行叩き目が見られる。

## 年代観

以上、考えられている製塩土器について、初源形態からIII-1類まで概観したが、次にその帰属する年代について若干考えて見たい。

I-1類は、一応前山II式（弥生時代中期後半）の段階としておく。

I-2類は、仁伍式（中期末）の段階である。I-3類は、大空式（後期初頭）の段階である。

I-4類は、上東遺跡の調査結果から鬼川市II式の段階である。

次にI-8類は、第147図①・②の甕と共伴している。①は叩き平底を有し、②は丸底化しつつある平底を有しているので、一応大浦浜Iの段階を考えている。同類のG-15区SK1の資料では、第147図⑤は同一段階でよいが、鉢A⑥はやや古い様相を持ち、⑦・⑧は新しい様相を持つ。大浦浜Iの範囲内で考えるべきであろう。

のことから、I-5・6・7類は、鬼川市III式～才ノ町I式の段階に比定してよからう。なお、高屋例は土器との共伴関係はないが、高屋（期）を大きく前後することはないと考えている。

次にI-11類は、大浦浜IIIの段階を考えているので、I-9・10類は大浦浜II前後と考えられる。

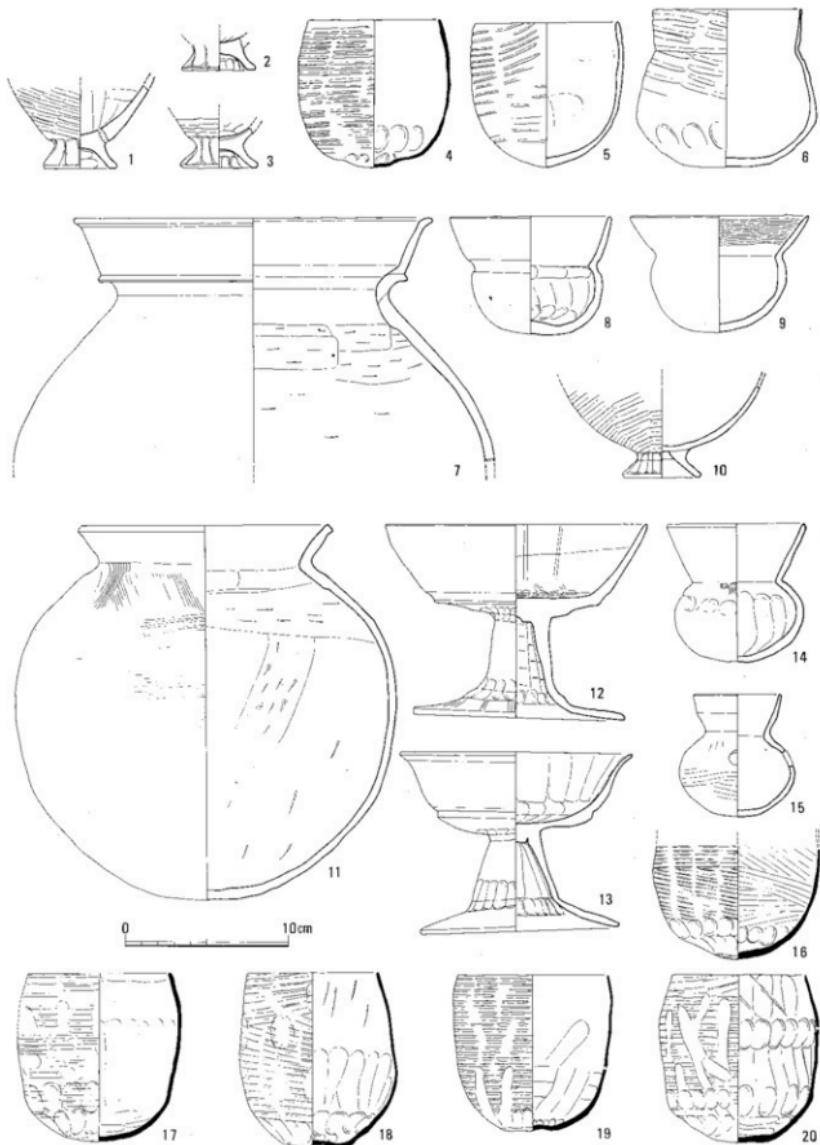
II-1類は、第148図11～15の古式土器からすれば、11は甕Dに、12・13は杯屈曲部に明瞭な稜線・段を持ち、脚部はb)に限られ、小型丸底壺⑭はCタイプに近いものが伴出しているので、大浦浜IV段階に位置付けたい。

II-2・3類は、第1・11土器群に見られるタイプで、小型丸底壺はDタイプに限られるので、大浦浜VI以降を考えている。

III-1類は、第13号墳で陶邑II-1段階(?)の須恵器が共伴しているので、6世紀初頭と考えられる。

II-3類とIII-1類との間には、現時点では年代差があり、今後のより良好な資料有待ところが多い。

又、船橋0-III式に見られる製塩土器は、形態的にはII-2類に位置付けられ、陶邑I-4段階の須恵器が共伴する。この資料の解釈については、土器と須恵器の編年についてころが多い。



第148図 古式土師器と共に伴する製塩土器実測図(2)  
1~6 第11土器群  
7~10 第12土器群  
11~20 予備調査団-10-X・Y区

く、推論は差しひかえたい。

製塙土器の年代観は、わずかな発掘資料と共に事例に負うところが多く、今後の問題となろう。大浦浜遺跡で、古式土師器と土坑内で共伴出土した資料については、客観的に見てまだ問題が多い。例えば、古式土師器の形態が一般的でない点があげられる。こうした土器は、やはり特殊な用途として作られたものと理解できるかもしれない。

### III 類

大浦浜遺跡でのこの段階の資料の出土状況については、第5章で述べたように、H-14区SK1・G-18区SK1・H-18区SK1の3つの土坑資料、G・H-34区土器集中箇所と包含層の資料がある。これらの資料操作についても第5章で述べたごとく、明確な差を指摘することができなかった。これについては、資料操作そのものの方法に欠点があると考えるか、明確な差があると考えることに問題があるのか、今回の整理では結論を導き出すことはできなかつた。

そのため、ここでは、大浦浜遺跡出土資料と先学の指摘とを考え合せ、今後の課題と展望について簡単にまとめておきたい。

まず、喜兵衛島南東浜遺跡<sup>(2)</sup>についてであるが、南東浜II～IVが層別の資料であり、年代差を持つことを前提すると、口縁部と体部が明確に区分されるもの（A）は、頸部が徐々に不明確となり球形化する方向が指摘できる。又、もともと球形で頸部を持たないもの（B）は、どの層からも出土しておりAとBの共存関係が指摘できる。

次に、叩き目であるが、南東浜IIが平行タタキが主流であるのに、南東浜IIIでは他のタタキの割合が増える。

前項で見たように、形式的な流れからすれば、平行タタキだけのものが古く、次第に他のタタキの割合が増えてくることは当然と考える。又、肩の張ったAが、球形化することも自然と見なければならない。

こうした見方からすれば、広江・浜遺跡での指摘は十分に妥当性があると考える。

次にBタイプの流れであるが、大浦浜遺跡では、G・H-34区土器集中箇所で、陶邑II-2～4段階の須恵器と伴出して出土しており、この内での共存関係は指摘できよう。又、昨年度に報告したG-18SK1資料中にも約1割のBタイプが確認されており、伴出須恵器から陶邑II-4段階を考えている。大浦浜では陶邑II-4段階に間違いないBタイプの存在は立証しうる。

広江・浜で、Bタイプを陶邑II-1・2段階から考えておられるが、大浦浜では追証しえない。

厚手無文のBタイプについては、次のように考えている。

①G-18SK1・H-14SK1では約1割の出土率である。

②H-18SK1は、Bタイプばかりの土坑であった。

③G・H-34区土器集中箇所には、Bタイプのみ伴出している。

のことから、Bタイプは土器製塙作業にしめる割合は①からすれば低いことが考えられる。

②・③の出土状況、特に③は祭祀的要素を強く持っていることから、単なる日常土器とは考え難く、製塙土器の一種と考えられる。

又、南東浜での伴出率は①同様と推定できることから、少くとも陶邑II-4段階以降では従的役割を強調しうる。

陶邑II-1～3段階では、Bタイプの存在は予想しうるが、土器製塩に対するかかわりは不明とせざるをえない。

Bタイプの出現については、あえて陶邑編年II-1段階から存在するであろうことを前提とすれば、大浦浜第11土器群でのII-2類・3類の共存からして、II-2類がBタイプに、II-3類がIII-I類(A)タイプに続くとする見方もできるが、これは仮定の域をでない。

現状では以上の点までしか指摘しえず、以上の観点からすれば、G-18SK1-H-14SK1下層の流れとなり、包含層資料については、この両者を含みうると考えている。

最後に今後の資料操作の方向性として次のように考えている。

広江・浜では叩き目による分類を主として、形態を従としている。今回の報告でもタタキを主眼として分類した。この結果は、全体の流れを指摘したにすぎず、十分な編年観とはなりえている。やはり、両者が互いに補いあう形での操作が必要であろう。このため、今後次のような操作を行なう予定である。

- ① 形態による分類 (A・B・C……)
- ② タタキ目による分類 (1・2・3……)
- ③ ①・②の相関表 (A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>……)
- ④ ③で抽出したタイプ別の割合
- ⑤ 各タイプの消長と割合の推移

以上の操作によってより具体化された編年観が示ししうると考えられるが、これは本報告への課題としておく。

又、以上の操作は、土坑一括もしくは包含層全体量に対して行うべきもので、その一部に対して行うことは危険である。なぜならば、同一タタキ目が一ヶ所に集中する可能性が高いことは、G・H-34区でVII類叩き目の分布状況から推定できるからである。

以上のように、大浦浜では6世紀段階の製塩土器を分類・編年することはできなかった。

今後の方向性としては、各土坑の資料検討、特にG-18SK1は須恵器の共伴が見られるところから、これを軸とした包含層の分類・整理が行なわれることとなろう。

ただ、G・H-34区土器集中箇所を除いては、陶邑II-1～3段階に属する須恵器は、大浦浜で極端に少ないため、この段階の資料は非常に少ないと考えている。

形式変遷としての編年観は、大きくは広江・浜の結果でその概要が把握されたと考えており、今後の作業は、より厳密な資料操作と良好な資料の出土を期することである。

#### IV 類

IV類と区分した製塩土器は、B～D-3～15区第5層出土のものである。第5章で説明したように、叩き目の有無、器形、厚さから1～4類に細分した。

各類の特徴を列記すると次のようになる。

##### IV-1類

口径15cm、器高13cm前後と推定復原され、厚み2.7mm平均で、叩き目は平行、矢羽根、平行つなぎなどがみられる。丸底であろう。

##### IV-2類

口径11cm、器高10cm前後と推定復原され、厚みは3mm平均である。1類に比べ薄手小形になっている。叩き目は平行のものが多いが、細い叩き目やくの字形など、III類やIV-1類にみられないものが含まれる。底部は丸底だろう。

#### IV-3類

口径10cm、器高10cmと推定復原され、厚みは3mm平均である。叩き目はなく無文である。口縁外面を指頭により丁寧にナデ仕上げを行ったため、口縁端部が内側に曲りこみ、球状の体部をもつものが特徴である。丸底であろう。

#### IV-4類

3類と器形は類似しているが、口縁部の内彎度が3類に比べ弱い。口縁周はきれいな円周を描かず波打つものが多い。丸底と思われるが、第5層出土の尖底資料が生きているならこのタイプのものだろう。

各類の特徴は以上のとおりであるが、第5層の年代幅は「須恵器」の項で述べたとおり、上限は7世紀初め頃で、下限は限定できないが、一つの目安として7世紀後半頃が求められた。そこでこの実年代の幅の中で1～4類の前後関係を検討しよう。

まず、IV類の前後にくるIII類とV類の特徴を再確認しておくと、III類は厚手で叩き目をもっている。無文のものは量は少ないが存在する。丸底である。V類は薄手で無文でやや雑なつくりとなり、尖底である。このことから、厚手から薄手へ、叩き目がなくなり、丸底から尖底になっていくという傾向が読みとれる。IV類はこの傾向の流れの中にあると考えられるため、1→2→3→4類の順序を想定するのが最も妥当であろう。

しかし問題点がいくつか残る。まず第1は、4類はそれ自身では明瞭な特徴をもたず、特に次のV類との識別が難しい点である。第5層中の無文資料から3類を除去した残りで、尖底の出土率から丸底の可能性が高いという性格をもつたため、今後口縁部の特徴を再検討する作業が課題として残る。

次に第2点は、2類から3類への器形変化が著しい点である。2類は口縁部が直立するものや内彎するものもあり、叩きを施さないため、内彎度が強くなったとも考えられる。また一方、III類からの系譜で叩き目を有するタイプが1・2類につながり、無文タイプが3・4類へ連続すると考えることも可能であり、今後検討を要する点である。

第3点目は、1類がIII類の段階に入るのではないかという点であるが、次のような理由から否定される。まず土器の廐棄場所がIII類は浜の西側であるがIV-1類は東側で場所が明白に分離しており、口縁部の厚みがIII類は5mm平均であるが、IV-1類は3.7mm平均と薄くなっている。IV-1類はIII類に比べよく焼けている。このような点からIV-1類はIII類と同一と考えることはできなく、それ以上に大きな意味をもっていると推測できる。

それは、土器がよく焼けていることは熱効率がよくなり、器壁が薄く、小形化する2類を生む要因になったのだろう。熱効率がよくなったことは炉の構造変化を示唆している。尖底化への動きはこの変化に対応したものとさらに推測できる。

叩き目の消失も、叩き目がまったくの機能上のものであれ、何らかの標示であれ、製塩法や、それをとりまく社会環境の変化を暗示している。

以上のようにIV類の段階は、長い土器製塩の歴史の中で1つの画期であったと評価しておきたい。

#### V類

この段階の資料はB～D-3～15区の第3層やC-8区SM01、C-4区SK11などの土坑から大量に出土したものである。土器の特徴については「製塩土器」の項で述べておいたが、復原口径はいずれも10～11cmが主流を占め、口縁部は無雜作につくられ内湾し、叩き目はなく

無文である。底部は尖底である。IV—4類と比較すると、口縁部の器壁がやや肥厚している印象を受けるのみである。

細分を試みたが、口縁部の内湾の度合い、口縁端部の形態、器厚、尖底部の形態など差異は見つけられず、現段階では顕著な変化がなかったと推定しておく。

ところで細分は破片を資料として操作を行ったが、本遺跡においては完形品もしくは全体器形復元可能な土器が3点出土している。それゆえ形態の変遷をこの3点から再度考えてみたい。

まずC—8区SM01より須恵器杯身を共伴する製塙土器について先に述べているので法量は省略するが、この製塙土器の時期は杯身より約800年前後と推定できる。まず1点の時期を押さえることが出来た訳である。次にC—3区第5層上面より出土した製塙土器を考えてみた。ほぼ完形に復原でき、口径は約12cm、器高は約15cmを計る。ややSM01よりも口径が広く、立ち上がりが緩やかという特徴をもつ。この土器を検出した面は第3層下層を取りはずした時であるから、層位的には第3層を切り込んでいるSM01よりは時期が遡る可能性は高い。またIV類の丸底のタイプと口縁部の立ち上がりが似かよっており、さらに口径も大差ないので、この系譜を引く尖底のタイプと思われる。

次にSM01と第5層上面で出土した2つの土器を比較してみた。口縁端部の形態・胎土・底部の状況に差はなかった。ただ立ち上りの緩急が違うと思われたので、その比較の指標として器高で口径を割り、さらにその数値を100倍して、出てきた数値(以下、この数値を径高指数と呼ぶ)を比較した。これによると第5層上面出土製塙土器の径高指数は79.7となる。つまり、径高指数が大きいほど古いという予測が成り立つ。次にC—4区SK11で出土し図上復元した製塙土器<sup>■(23)</sup>の径高指数を算出すると74.2となり、この数字は前二者の中間に位置する。SK11は第4層を掘り込んでおり、第5層出土の製塙土器より後出なのは層位的にみて明らかである。以上のことによりSK11より検出した土器は前に述べた2つのタイプの中間タイプとして考えてよかろう。

この3つのタイプを比較すれば、時期が下るほど細長化していくという傾向が本遺跡の製塙土器では指摘できる。全国的にこの時期は胴が長くなったり、支脚が伸びる傾向にあるため、本遺跡でもその現象と軸を一にした変化と考えられる。

しかしながら長胴化現象を年代の物差しにするには、破片という形で出土することが多いこの種の土器では尺度としての普遍性に欠けるため、今後さらに検討を進めて行きたい。

さて次にこの段階の特徴である尖底の出現と、土器製塙の終えんの問題について考えてみることにする。

尖底の資料として本遺跡においては第5層より約40個の底部が出土している。しかし全出土尖底個数の4%しか占めておらず、しかもB列の7~9区の5層上面からの出土がほとんどである。このB列の第5層は土層の頂でも述べたようにC・D列の第3・4層の流れ込みによる層位攪乱の可能性が高い。以上のことにより第5層形成期には尖底が出現していないことになる。次に第4層の出土尖底を数えると約90個となり、全体の10%を占める。割合は少ないが、第4層自体の総重量が少ないと考え合わせると、量としては評価できる。先に述べたように第4層は時間幅をもって形成していると考えられ、さらに第4層中の製塙土器全出土重量を個体数に換算して尖底土器の占める割合を算出すると15%を占めている。だから第4層を形成している層のある時期において尖底が出現している可能性が高い。第5層は7世紀初めから後半ごろまでと推定され、第3層はそれ以降なので尖底の出現期は奈良時代の全時期に可能性は広がる訳

である。本遺跡においてはこれが限界であり、他の隣接する地域のより詳細な研究を待ちたい。

さて次に、土器製塩の終焉について考えてみたい。ここで言う土器製塩の終焉とは、一度に多量の土器を使って塩をつくる方法が終るという意味で、製塩土器自身は後の時代まで存続すると考えている。

大浦浜における土器製塩はC—8区SM01が第3層を切っていることから少なくとも800年前後にはまだ行なわれていると思われる。第3層に包含されていた製塩土器は、このSM01のものと大きな器形変化は認められず、この時期に近い時間内のものと推定される。第3層中の製塩土器以外の土器は8～9世紀のものと、中世のものであるが、後者は粘土遺構群に伴うもので、前者では9世紀初めごろのものが多い。さらに後述のIV類は個数が少なく、しかも胎土が違っており、V類のものとは性格が違っていると思われる。

以上のことにより本遺跡における土器製塩は9世紀代で盛期に終わりを告げ10世紀には衰退しているだろうと思われる。

## VI 類

VI類とした製塩土器は、南端地区から出土し、共伴遺物から古代末～中世にかけての時代が与えられる。しかし、現在の説では、土器を用いた製塩がこの時代まで続くとは考えられていない。そこでまずこの時代に先行したV類の製塩土器（尖底タイプ）と、形態胎土の相異点について検討する。比較する資料は、南端地区第1遺構群（共伴遺物から13世紀初頭ごろ）、第2遺構群（12世紀後半）、B～D—4～7区第3層下層（奈良末～平安初頭）から出土したものを利用した。

### 口縁部の形態変化、胎土変化（第10表）

口縁部は先の分類に従って1類（内反するもの）、2類（直立ぎみなもの）、3類（外反するもの）の3タイプに分け、その出土割合について見てみる。（第10表1）尚、分類するにあたっては、口縁部の残りが良いものだけを用いたため、資料数は第1遺構群482点、第2遺構群69点、第3層下層7,602点、となり、南端地区のものが少ない点を記しておく。

1類は第1遺構群に25%、第2遺構群に61%、第3層下層に73%の割合で含まれている。時代がさかのぼるにつれ出土割合は増加する傾向である。2類は、第1遺構群に32%、第2遺構群、第3層下層にそれぞれ26%の割合で含まれ、各時代に3割程度の出土である。3類は第1遺構群に43%、第2遺構群に13%、第3層下層に1%の割合で出土し、1類とはまったく逆の傾向で、時代がさかのぼるにつれ減少する。

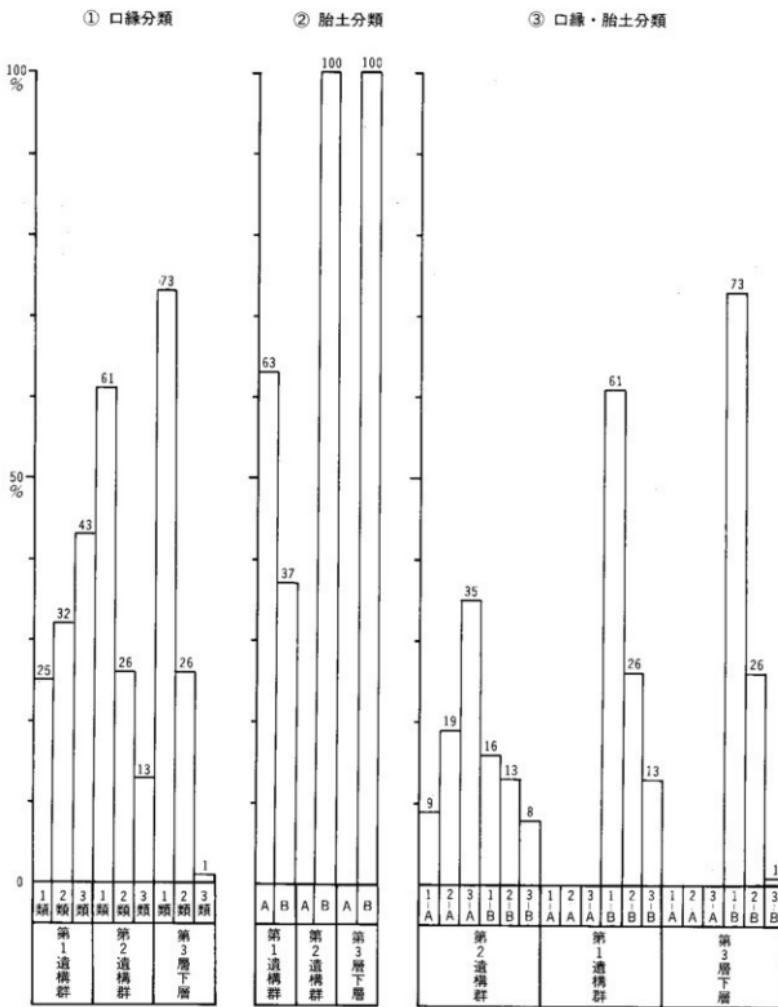
### 次に胎土の違いを見てみよう（第10表2）

資料は口縁部の分類に使用したものを用い、分類基準は先の胎土A（金雲母を多量に含むもの）胎土B（含まないもの）である。

第1遺構群には胎土Aのものが63%の割合で出土するのに較べ、第2遺構群、第3層下層は、全て胎土Bのものである。

次に口縁分類と胎土分類のものを組み合わせてみる。（第10表）例えば、口縁部が1類で胎土Aに概当するものは1-Aと表記している。

この図から、胎土Aのものは1類、2類、3類の順で出土割合が増加し、胎土Bのものは、逆に減少する傾向がある。特に第3層下層においてこの傾向が顕著に見られ、3-Bは1%の出土割合を示すにすぎない。



第 11 表 製塩土器タイプ別グラフ

これらの結果を総合すれば、第3層下層の時代に製塙土器は、1-Bタイプが主流を占め、第2遺構群の時代には3-Bタイプが出現し、第1遺構群の時代に3-Aタイプに主流がうつる傾向がある。そこで今回の概報では、製塙土器の編年案に3及び2タイプのものが続くものとして入れておく。しかし今後の問題点として、南端地区出土の製塙土器出土量が他の地区のものに比べ少ない点、本地区に祭祀関係遺物（皇朝錢、銅製資金具、四耳壺、ミニチュア製塙土器）が出土している点があり、これらの製塙土器がどのような目的に用いられたものか判断しにくい。ただ南端地区的遺物出土状態から見れば、祭祀関係遺物の出土は第4層下層以下の層に限られ3-Aというタイプが大きな割合で出土してくる第1遺構群には日常生活品の出土が多く、小集団の自給用として土器製塙が残った感が強い。

本遺跡出土の製塙土器を6類に区分し、それぞれの特徴を述べてきたが、最後に各類の出土状況と数量を記しておく。以下の数字は今後整理が進むと変動してくるが、各類間の比率は大きくは変化しないだろう。

I-2類は単独出土で3点、I-5類は土師器との混合層から30~40点、I-7類は単独出土で1点、I-8類は土坑2ヶ所から約10点、I-9類は土師器との混合層や擾乱土から量がまとまって出土。実数は確認していないが、12類は100点を越えるだろう。

II-1~2類は土師器と共に伴し、集中ブロックが散存する状況で10~20点。I-3類は単独出土で1点。

III類は厚い層をなし大量出土、土坑も數ヶ所ある。

VI類は層をなしているが、III類・V類に比べると量は少し減る。

V類は層をなし大量出土だが、III類と比較すると量は減る。

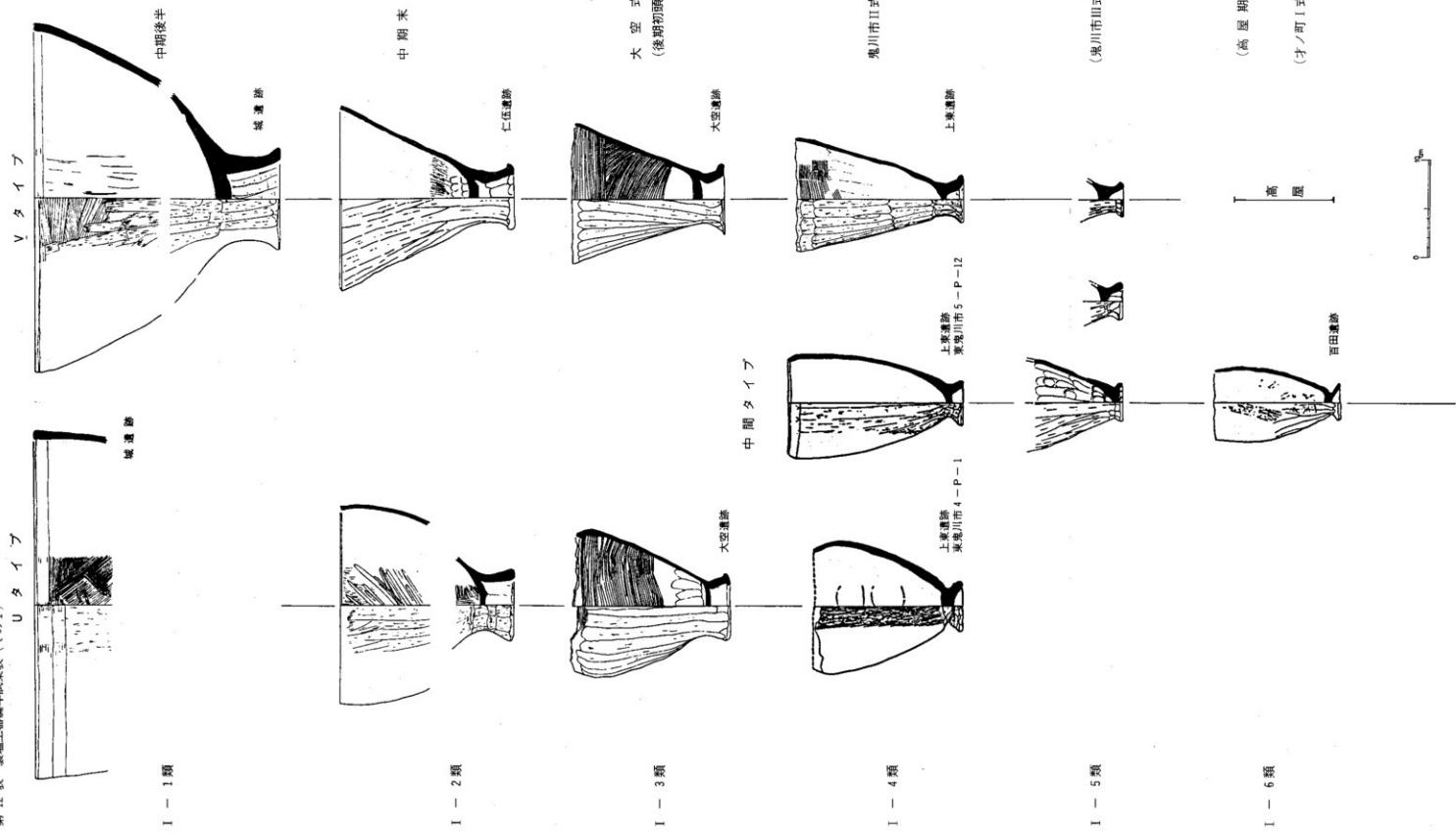
VI類はブロック単位で出土、個体数は300~400点。

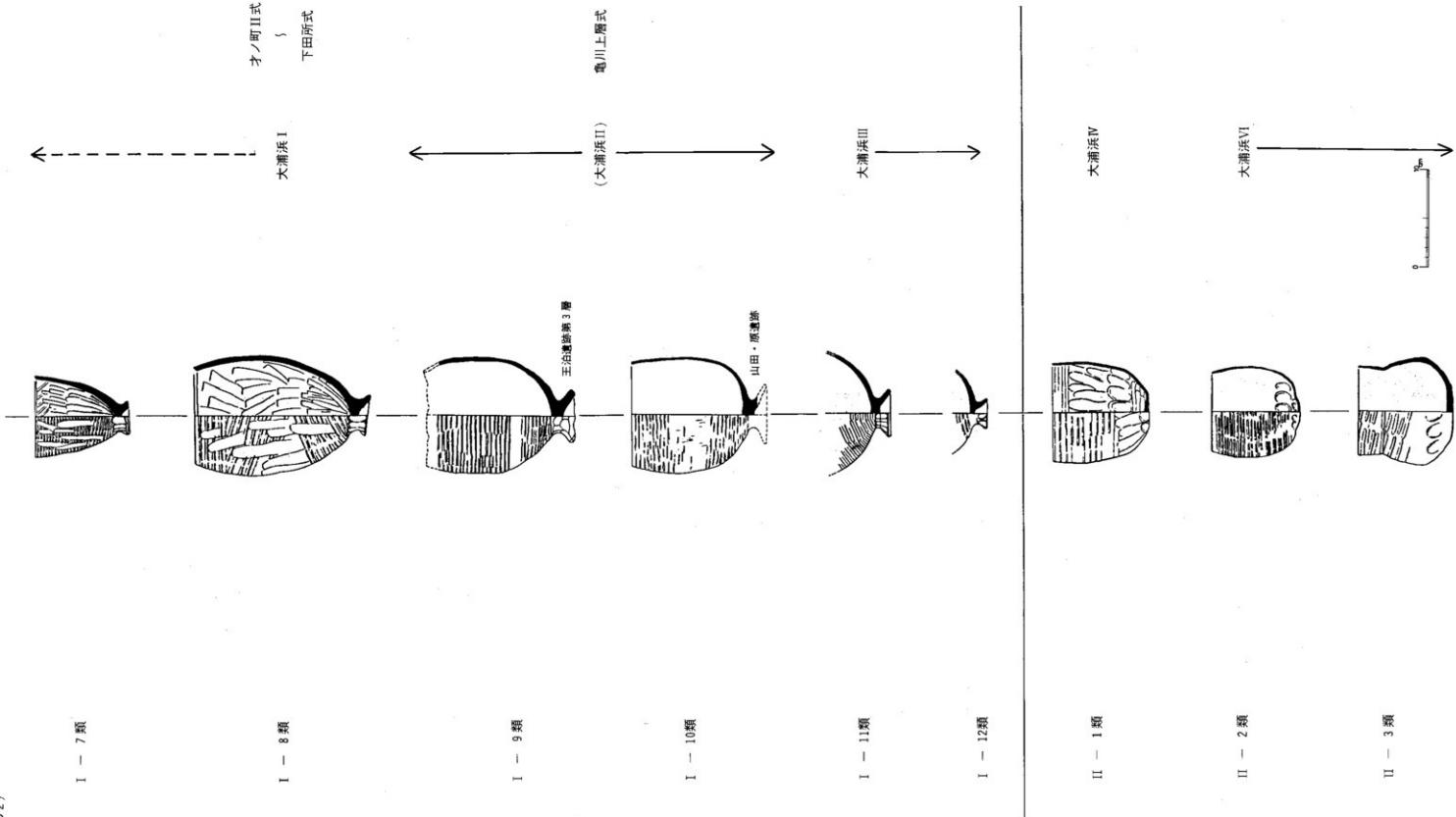
以上の製塙土器の出土状況と数量から大浦浜での製塙活動の大まかな変遷があとづけられるだろうが、加味しなければならない問題が多いため、詳論は本報告にゆることにする。

## 注

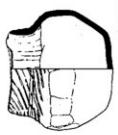
- (1) 若本正二「弥生時代の土器製塙」『考古学研究』89 1976 考古学研究会
- (2) 近藤義郎編『日本塙業大系 史料編考古』1978 日本専売公社
- (3) 間壁霞子「広江・浜遺跡」「倉敷考古館研究集報」第14号 1979 倉敷考古館
- (4) 間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」「倉敷考古館研究集報」第2号 1966 倉敷考古館
- (5) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』1956 岡山県高島遺跡調査委員会
- (6) 伊藤 晃・山磨康平ほか「倉敷市(児島)城遺跡発掘調査報告」1977 岡山県教育委員会
- (7) 山本慶一「倉敷市児島仁伍遺跡」「倉敷考古館研究集報」第8号 1973 倉敷考古館
- (8) 伊沢肇一「志度町天野出土の弥生式土器について」「文化財協会報」昭和56年度特別号 1982 香川県文化財保護協会
- (9) 錦木義昌・六車恵一「香川県高松市高松町大空遺跡の土器」「弥生式土器集成 資料編」1961 日本考古学協会
- (10) 伊藤 晃ほか「上東遺跡の調査」「山陽新幹線建設に伴う調査II」1974 岡山県文化財保護協会  
柳瀬昭彦ほか「川入・上東」1977 岡山県教育委員会
- (11) 注(1)書
- (12) 斎藤賢一「高屋遺跡」「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和54年度 1980 香川県教育委員会
- (13) 注(5)書
- (14) 注(4)書

第12表 製塙土器縦年試索表(その1)

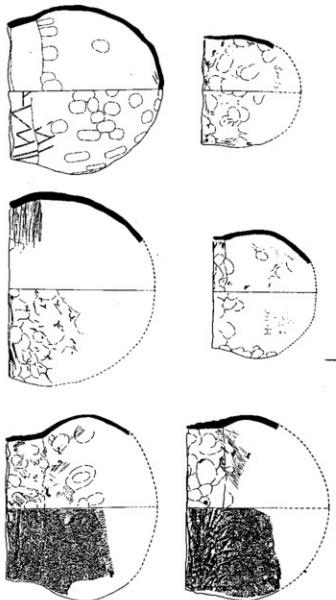




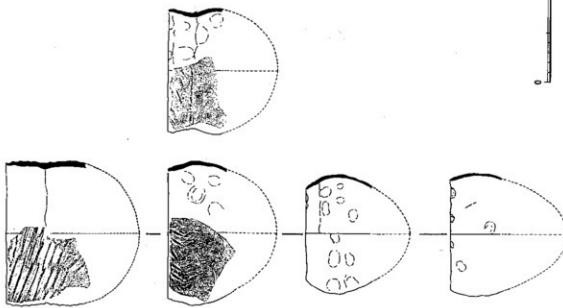
(III - 1類)



牛へ工鳥第13号標

III  
類

IV - 1類

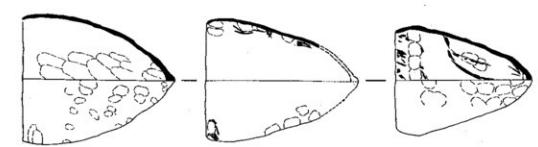


IV - 2類

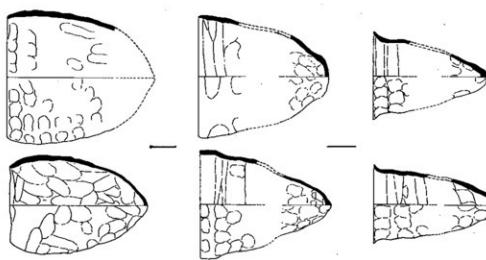
IV - 3類

IV - 4類

0 10mm



V



VI-1類

VI-2類

VI-3類

10mm

- (15) 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』(I) 1977 香川県教育委員会  
本調査区では、F・G-19区にあたる。
- (16) 注(2)書
- (17) 喜兵衛島調査団「謎の師楽式」『歴史評論』1956. 1月号
- (18) 注(19)書掲載図からの判断である。
- (19) 原口正三ほか『船橋遺跡の遺物の研究(II)』1962初版1975三版 平安学園考古学クラブ
- (20) 注(19)書掲載図からの判断である。
- (21) 第4章(2)C-8区SM01区出土製塙土器の頃参照
- (22) SM01の尖底を持つと思われる土器の口縁は9.6cmが平均値となり、SM01の(9)の土器と1~2mmの誤差を持つ。
- (23) 第4章(2)C-4区SK11出土製塙土器実測図中(10)の土器を参照。
- (24) C-4 SK11(10)は推定器高なので不安がある。そこでSK11より出土した尖底部を(10)の実線部分で合わせてみた。すると実線部と合う尖底部の残高平均値4.2cmを得た。それに(10)の残高値11.3cmを加えると、実測図通り15.5cmという計算値を得た。
- (25) 約40個のうち2個以外はこの地区的出土である。
- (26) 第4章(2)参照
- (27) 第5章(4)の第4層出土製塙土器の頃参照。
- (28) 今回の概報では、2類と3類の前後関係は分類図には明確に表わされていない。そのうえ破片による分類である為、手づくね土器の特徴を考えれば、同一個体の口縁部でも1類・2類が共存する場合も、2類・3類が共存する場合も十分ありうる。しかし大きな流れから見れば、1類から3類への変化が見られるため、その中間段階として編年表では1類から2類そして3類へとしておく。

## 7 おわりに

昭和55・56年度の2ヶ年にわたって進められてきた櫃石島の大浦浜遺跡の発掘調査はほぼ終了し、明年度に2,400m<sup>2</sup>を残すのみとなった。遺跡は30,000m<sup>2</sup>の広がりをもつと推定されるが、架橋工事で破壊されるため調査を実施したのは、このうちの20,000m<sup>2</sup>である。

備讃瀬戸にはたくさんの島が浮んでいるが、そのうち行政区画上、香川県に属する島は106を数える。過去いくつかの島で遺跡の発掘調査が行われてきたが、いずれも小規模なもので、全面発掘に近い規模のものはこの大浦浜遺跡が初めてであり、将来もそう多くはなかろう。また、製塩の遺跡が今回のように大規模に発掘調査されたことも全国的にみて初めてのことと思われる。

このように考えると、島という地理的条件の中にある遺跡をどのように評価するか、そして広範囲の発掘ならではの成果は何であり、それを今後の遺跡の調査・研究・保護にどのように生かしていくかが、まず問われる点であろう。この間に答えるためには、その基礎となる事実関係をじゅうぶんに検討することから始めねばならないだろう。

出土した遺物は整理箱にして1,500箱を越えている。7名の調査員が整理期間3ヶ月の間に目を通すことのできた量はほんの一部であり、それをまとめたものが本概報である。整理期間中、多くの問題が提起されたが、多岐にわたり、ふれえなかかった部分が多い。今後数年間に予定されている本格的な整理期間中に検討を加え、本報告にまとめるつもりである。そのためここでは、前章までの個別報告で扱っていない、2・3の点について述べることにする。

まず地形変化と各時代の遺跡の広がりについてみてみよう。昨年度の調査結果によると、縄文晩期には現在のような海岸線と地形が形成されていたと推定されたが、本年度調査の30~34区の調査結果をみると、縄文後期の包含層の厚い砂層の堆積がみられ、特にE~G区が顕著である。遺物の出土範囲をみると標高1.9~2.3mの間で、この範囲は標高2mの等高線が描くラインとほぼ一致している。そのため、2mコンタが描くラインが縄文晩期以降の旧地形を伝えているものと推定された。現地表をみると、22列以北にわずかな高まりがJ~E区にかけてみられ、土層観察の結果とも一致し、北に向って舌状の砂州がのびていたことが判明した。

旧地形の範囲内で各時期の遺物出土状況をみていくと、各時代ごとに変化がみられる。縄文晩期~弥生前期の遺物は第104図に示した範囲から出土している。地形はゆるやかな山形を呈しており、砂州頂部(調査区画F列)から東斜面にかけて包含層が形成されており、当時の汀線は、現在よりも20mぐらい後退していたものと推測される。

弥生中・後期は砂州頂部付近と51列付近で出土し、前期に比べ汀線は少し前進したのだろう。古墳前期は砂州頂部から西斜面にかけて遺物が出土し、後期にもF~J-4~39区に製塩土器を主体にする厚い包含層が形成されており、このことから古墳時代には砂州の頂部近くまで汀線が前進してきたものと推測される。

奈良時代の包含層は前代とはまるで逆に砂州東側に厚く形成されており、再び汀線は後退したと思われる。

この間に現代の水路周辺の入江状になっていた部分は徐々に埋没し、中世頃には現在の地形に近いものになっていたようで、量は少ないが、中世遺物が水路付近からも出土している。

つぎに製塩についてであるが、今回土器編年を試みた。型式を優先させたところや、層位を優先させたところなどまちまちであるため、今後、順次補足・訂正していく予定である。今回の試案には、3つの特徴がある。

まず第1点は、古墳前期を細かく分類したことである。脚台の退化と体部立ち上り角度を基準に型式的に並べているため、今後層位的な裏付けや一括遺物による検証が必要である。5世紀末には内陸部から多くの製塩土器が出土しており、当時の生産・流通・消費活動を追究する上で好材料になるため、さらに研究を進めてゆきたい。

第2点は、尖底の製塩土器の時期を明らかにしたことである。従来このタイプは漠然と奈良時代と位置づけられており、またこの頃に土器製塩が終り、鉄釜・石釜に移行したと考えられていたが、大浦浜からこのタイプが多く出土し、9世紀代まで土器製塩が続いていることが明らかになった。今回層位から2時期に区分したにどまり、将来遺構単位の類例を待ちたい。また最近発掘例が増した中央官衙出土の資料との対比も必要だろう。

第3点は、鎌倉時代と思われる一群を抽出できることである。備讃瀬戸では類例がなく、別の角度からの再検討が残されている。製塩土器ならば、どのような用途に使用されたのか、また、製塩遺構と解釈した粘土土坑との関連は何なのかなど、派生する問題は多く、考古学的に中世製塩法の研究を本格的に進めなければならない。

最後に祭祀について少しふれておきたい。昨年度にひきつづき祭祀関係の遺物が出土した。古墳時代のものは、手捏土器、船形土製品、鉄・石製品などで、砂州の頂部から出土したものが多く、製塩土器の廃棄場所とは少しずれている。奈良二彩、皇朝十二錢がヤケヤマ東麓地区から再び出土した。奈良時代の祭祀遺物は南・北両端に分離しており、北の方が皇朝錢からみると古いようである。北の出土地点は同時代の遺物はないが、南は包含層の中から出土している。これらのものには国家的背景を想定すべきだが、海に近いという理由から航海安全祈願と解釈されがちであるが、製塩・漁撈活動も行なわれているため、これとの関連をまず追究すべきだろう。

以上、課題の提示に終始してしまったが、発掘・整理作業が進むたびに、予想以上に豊富な内容をもち貴重な遺跡であることが再確認される。本格的な整理作業を始め、本報告刊行にこぎつけたい。

(大山)

第13表 弥生前期土器觀察表(1)

図版番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形の特徴	出土地区	備考
第16図-1	亞	14.0 2.6 — —	○段をもち。低く外反して端部に至る。端部は丸く終わる。 ○外下方になめらかに広がる。		D-11 黄褐色砂層	茶色っぽい灰白色
-2	甕	28.0 1.7 26.6 —	○短く外反する。 口唇部に刻目。 ○内下方にやや膨らみながら伸びる。		D-11 黄褐色砂層	
-3	甕	17.6 — — —	○短く外反する如意状口線。 口唇部下方に刻目。段を持つ。 ○内脇しながら内下方に伸びる。		D-10 黄褐色砂層	茶色っぽい灰白色
-4	(底部)	7.6 —	○平底で外上方とやや内脇しながら伸びる。		C-12 黄褐色砂層	
-5	甕	28.0 1.9 — —	○短く外反し、端部は外傾する平坦面を持つ。	○内面はヘラミガキ、外面はナデ。	D-11 黄褐色砂層	茶色っぽい灰白色
-6	甕	24.0 1.3 24.0 —	○短く外反し、口唇部下半に刻目。 ○やや膨んだ体部を持ち、頸部下に2本のヘラ書き沈線。	○内・外面ともナデ。 ○内・外面とも指ナデ。	C-12 黄褐色砂層	淡焦茶色
-7	甕		○短く外反する如意状口線。 口唇部に刻目、頸部には3本のヘラ書き沈線、体部上位にヘラ書き沈線1本。	○外面はナデ。	D-10 黄褐色砂層	淡焦茶色
-8	壺		○段を持ち、上方に伸びたのち外反し、端部は外傾する平坦面を持つ。		E-11 弥生下層	茶色っぽい灰白色
-9	亞	18.0 —	○頸部に三角形の削り出し突帯を持ち、外反する。 端部は丸く終わる。	○内面はナデ。 ○内面は指頭圧痕が顯著で指ナデ。	D-12 (弥生下層)	淡茶褐色
-10	亞	16.0 —	○頸部に台形の削り出し突帯を持つ。突帯上にヘラ書き沈線を持つ。 口縁部は上方に伸びたのち外反し、外傾する平坦な面を持つ。	○内・外面ともヘラミガキ。	E-13 弥生下層	茶褐色
-11	甕		○段の上にヘラ書き沈線を持ち、一見突帯文に見せ、口唇部F半と共に刻目を施す。		E-11 弥生下層	淡焦茶色
-12	甕	20.0 1.5 17.6 —	○短く外反し、口唇部に刻目を持つ。 ○体部は鉢状を呈す。	○頸部内・外面に指頭圧痕が顯著である。	D-11 弥生下層	淡茶褐色
-13	甕	20.0 1.6 18.8 —	○短く外反し、口唇部に刻目を持つ。 ○2本のヘラ書き沈線を持ち、一本は途中で崩れる。	○内・外面とも、指頭圧痕が顯著である。	E-13 弥生下層	淡焦茶色

-14	漆用蓋	6.4 —	○天井部に凹面があり、「ハ」の字形に開く。	○内面はヘラミガキ。	E-11 弥生下層	淡焦茶色
-15	蓋	22.8 3.0 —	○短く外反する口縁部と、「ハ」の字形に広く体部を持つ。口唇部には、やや軽い凹面が見られる。	○内面は、口縁部がヘラミガキ。体部は指ナゲ。 外表面はヘラミガキ。	D-15 弥生上層 (第4層)	淡系褐色
-16	蓋	14.0 2.3 —	○外縁する口縁部を持つ。	○内・外面ともヘラミガキ。	E-14 弥生上層 (第3層)	淡赤褐色
-17	蓋	11.8 2.8 —	○外反する口縁部に、やや細長い頸部を持つ。 段は蛇骨の追加によって形成されている。	○頸部内面に指頭圧痕。	D-10 弥生上層	茶色っぽい灰白色
-18	蓋	17.3 3.5 —	○外反する口縁部に、やや長く直立がみの頸部を持つ。段が見られる。	○口縁部外面に指頭圧痕。	D-13 弥生上層	茶色っぽい灰白色
-19	蓋	16.0 2.6 —	○外縁する口縁部を持つ。段が見られる。	○内面はヘラミガキ。外表面は指頭圧痕。	D-13 弥生上層	淡系褐色
-20	蓋	18.0 3.8 —	○外反する口縁部を持つ。段が見られる。	内面はヘラミガキ。外表面は指頭圧痕。	D-13 弥生上層	茶色っぽい灰白色
-21	蓋	27.4 —	○外反する口縁部を持つ。段が見られ、段の上に部分的に沈線が、段の下には二本の比縫が施されている。沈線は細く浅い。	○内面はヘラミガキ。	D-15 (第4層) 弥生上層	淡赤褐色
-22	蓋	17.0 2.8 —	○外反する口縁部を持つ。口縁部と頸部の境から少し下ったところに2本のヘラ描き比縫が見られる。	○内面は指頭圧痕。	D-12 弥生上層	茶褐色
-23	蓋	14.0 3.0 —	○外反する口縁部を持つ。口縁部と頸部の境から少し下ったところに2本のヘラ描き比縫が見られる。	○外表面は、指頭圧痕及指ナゲ。	D-14 弥生上層	茶色っぽい灰白色
-24	蓋	15.6 2.0 —	○短く外反する口縁部を持つ。口縁部と頸部の境には、2本のヘラ描き比縫が加えられており、全体を8等分する形で3本ヘラ描き比縫が縦に施工されている。	○内面口縁部はヘラミガキ。頸部は指ナゲ。指頭圧痕。	D-9 弥生上層	黄色っぽい灰白色
-25	蓋	14.0 —	○外反する口縁部を持つ。削り出し凸帯が見られる。	○外表面はヘラミガキ。	D-11 弥生上層	茶色っぽい灰白色。
-26	蓋	—	○外反する口縁部を持つ。削り出し凸帯上にヘラ描き比縫が1本見られる。	○内・外面ともヘラミガキ。	D-13 弥生上層	茶褐色

第13表 弥生前期遺物観察表(2)

図版番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形の特徴	出土地区	備考
第10図-1	壺		○やや長く外反する口縁部に、直立のみの体部を持つ。 口唇部と頸部にヘラ描キ沈線を持つ。 口縁部内面に2本ずつの沈線に区画され、高いあつた連弧文が見られる。	○内・外面ともヘラミガキ。	E-10 弥生上層	淡焦茶色
-2	壺	22.0 1.8 21.2 —	○短く外反する口縁部とやや球形の体部を持つ。口唇部下半に刻目が見られる。	○内面は指頭圧痕。 ○外面は指ナデ。	D-12 弥生上層	茶色っぽい灰白色
-3	壺	16.0 1.9 14.6 —	○やや小形の壺である。口唇部に刻目が見られる。	○内面は指ナデ。	E-13 弥生上層	赤褐色
-4	壺	22.0 2.2 22.2 —	○短く外反する口縁部に、やや膨らむ体部を持つ。 口唇部に刻目、頸部に段を持つ。	○内・外面とも指ナデ。	E-12 弥生上層	淡赤褐色
-5	甕	28.0 — — —	○外反する口縁部に、ほぼ直立ぎみの体部を持つ。 口唇部に刻目、頸部よりやや下に段が見られる。	○内面は指ナデ。外面は、段より下に条様の刷毛目が見られる。	D-12 弥生上層	淡茶褐色
-6	甕?	22.0 1.8 — —	○短く外反する口縁部を持つ。 頸部よりやや下に段を持ち、段より上にヘラ描キ沈線を施し、凸帯風にしている。 口唇部下半と凸帯風の上に刻目を持つ。		D-10 弥生上層	茶色っぽい灰白色
-7	甕	22.0 2.3 — —	○外反する口縁部に、鉢状の体部を持つ。 頸部にヘラ描キ沈線を持ち、口唇部に刻目が見られる。	○内面は指ナデ。	D-11 弥生上層	淡焦茶色
-8	甕		○外反する口縁部を持つ。 頸部から下に、4本のヘラ描キ沈線を持ち、沈線間に米粒状の押型が見られる。	○内・外面とも指頭圧痕。	D-12 弥生上層	茶褐色
-9	深鉢	27.8 2.0 29.0 —	○逆「く」の字に内反する口縁部と、直線的に内傾する体部を持つ。口縁部には3本の凹線様文様を持つ。		D-14 弥生上層	繩文晚期? 茶褐色
-10	深鉢	22.0 — 23.2 —	○ほぼ直立ぎみの口縁部を持つ。 口唇部直下に貼り付け凸帯を持ち、凸帯上に刻目が見られる。	○内・外面とも指ナデ。	E-13 弥生上層	繩文晚期 焦茶色
-11	深鉢	23.0 —	○口唇部に貼り付け凸帯を持ち、凸帯上に刻目が見られる。	○内・外面とも貝殻茶痕風の刷毛目を有す。	D-11 弥生上層	繩文晚期 淡茶褐色
-12	深鉢	32.0 —	同 上	同 上	E-11 弥生上層	繩文晚期 黒灰色

第13表 弥生前期遺物観察表(3)

図版番号	器種	法長(cm)	形態の特徴	蓋形の特徴	出土地区	備考
第307図-1	蓋	18.0 2.1 — —	○外反する口縁部に段を持つ。	○内面はヘラミガキ。	G-13 第2層下層	茶色っぽい灰白色
-2	蓋	14.0 2.8 — —	○外反する口縁部に、頸部との境に窪みに近似し、体部との境に段が見られ。それぞれ段の下に1~2本のヘラ描き沈線を施す。頸部には、4等分になる3本の沈線を縦に加えている。	○内・外面ともヘラミガキ。	G-15 第2層	茶色っぽい灰白色
-3	蓋	— — 14.0 —	○口縁部と頸部の境にヘラ描き沈線を2本。頸部と体部の境に段、段より下に2本のヘラ描き沈線を施す。	○内面は指ナデ、外面はヘラミガキ。	H-17 2層	焦茶色
-4	蓋	7.0 1.7 10.6 9.5 (4.6)	○小形の壺形土器である。口唇部に凹凸様文様が見られる。	○内・外面ともヘラミガキ。	F-9 第3層	淡茶褐色
-5	無頸蓋	10.2 — 20.4 —	○球形の体部に、口縁部は内傾する半坦面を持つ。底部はほぼ垂直に伸びる様相が見られる。	○内・外面ともヘラミガキ。	D-26 第4層	淡黃灰色
-6	蓋	33.8 1.5 33.6 35.5 (8.0)	○短く外反する口縁部を持つ。体部は旋渦形を呈し、やや上へいく底面の底部を持つ。頸部より下に段を持つ。	○不明	H-14 第11土器群中	淡赤乳白色
-7	蓋	22.0 —	○外反する口縁部に、直腹ざみに内傾する体部を持つ。頸部より下に、細く浅い2本の沈線が見られる。口唇部下半には刻目。	○内面に指彫痕。	G-15 第2層	淡茶褐色
-8	蓋	14.0 —	○小形の蓋である。頸部に2本のヘラ描き沈線が見られる。	○内面指ナデ。	F-16 第2層	淡赤褐色
-9	蓋	20.0 —	○外反する口縁部を持ち、口唇部に刻目が見られる。頸部下に2本のヘラ描き沈線を持ち、区画内に米粒状の押突が見られる。	○内・外面とも指ナデ。	H-16 第2層	淡焦茶色
-10	蓋	24.0 —	○外反する口縁部を持つ。頸部下に3本のヘラ描き沈線を持ち、上方の区画用に、ヘラ描きの斜線を加えている。		H-11 第2層下層	茶褐色
-11	蓋	18.0 —	○短く外反する口縁部を持ち、口唇部中央は凹んでいる。下半に刻目が見られる。	○内面は指彫痕、外面はヘラミガキ。	F-4 第5層上面	淡焦茶色 前期ではない可能性もある。
-12	鉢	16.9 10.5 底(4.8)	○やや突出した平底からほぼ直線的に外反する体部を持つ。口縁部は丸く終わる。	○外面にはヘラミガキが見られる。	F-15 第3層	淡茶褐色

-13	鉢	14.8 15.4 (4.9)	○やや突出した平底から、上外方に伸びる体部を持つ。粘土紐の縫ぎが明瞭で部分的に段をなす。	○内面は接合時に指頭圧痕が顯著である。 外面はヘラミガキ	F-15 地山直上	茶色っぽい灰白色
-14	型用皿	7.5 14.7 (27.1)	○やや団んだ天井部から「ハ」の字形に広く体部を持つ。	○不明。	I-5 地山直上	暗黄土色
-15	笠底部	(8.4)	○やや突出した平底から外上方に内溝しながら伸びる体部を持つ。	○内面は指頭圧痕。外面はヘラミガキ。底部付近のごく一部にヘラ削り。	F-19 2層	淡灰褐色
-16	蓋底部	(8.6)	○焼成後穿孔の底部である。	○外面はヘラミガキ。	F-13 3層上層	茶色っぽい灰白色

第14表 H-14区 第11土器群出土土器観察表

排図番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形の特徴	出土地点	備考
第45図-1	壺(Ba)	口径 14.2 口縁部器高 6.4 調査 射部器高	○内面に棱を持ち、外反する。 ○端部は外傾する平坦面を持つ。	○内外面とも、刷毛目の中ナデ。	No19	淡茶褐色
-2.	壺	— — 15.0 10.0	○肩の張る胴部か。 ○内面に棱を持ち、「く」の字に外反する。	○内面はヘラ削り 外面は刷毛目	No24・25	赤乳白色
-3	壺(Bi)	16.6 3.0 26.2 27.2	○肩の張る扁平な球形 ○内面に棱を持ち、「く」の字に外反する。 ○端部は外傾する平坦面を持つ。 ○球形で丸底。	○内面は指ナデと指頂圧痕が顯著である。 ○外面は叩きのうちナデ ○内面は刷毛目多面はナデ ○内面はヘラ削りのちナデ ○外面は刷毛目	No21	赤茶褐色
-4	壺	11.0 2.0 16.6 —	○内面に鋸い棱を持ち、「く」の字に外反する。外面が肥厚し、端部は丸く終わる。 ○球形	○内外面ともナデ ○内面は指ナデであるが、砂粒が若干動いている。 ○外面は叩きのうちナデ。	—	淡茶褐色 肩下半二次焼成により剥落
-5	壺(B2)	12.9 3.3 21.8 —	○内面に鋸い棱を持ち、「く」の字に外反する。端部は外傾する平坦面を持つ。 ○球形	○内外面ともナデ。 ○内面は肩部までヘラ削り、上半は指ナデ。 ○外面は刷毛目。	No 3	暗淡赤褐色
-6	高杯(A)	18.8 4.8 12.6 8.0	○やや外上方に伸びる底部から段を持ち、内溝しながら立ちあがり端部で背外反する。端部は丸く終わる。 ○徐々に膨らんだら角度を変え、直線的に脚端に至る。端部は内傾し、やや中央が凹む。	○内外面ともナデ。 ○柱状部内面はしづり目、外面は指ナデ ○底部内外面ともナデ	No12 No21	赤乳白色
-7	高杯(B)	(推)17.0 5.8 12.0 7.6	○やや外上方に伸びる底部から鋸角の段を持ち、内溝しながら立ちあがり端部で再び外反する。端部は丸く終わる。 ○徐々に膨らんだら角度を変え直線的に脚端に至る。端部は内傾する平坦面を持つ。	○内・外面ともナデ。 ○柱状部内面はしづり目、外面はヘラミガキ。 ○底部内外面ともナデ。一部内面に刷毛目が見られる。	No 9	赤乳白色 くさり縫
-8	高杯	— — 13.6 7.0	○直線的に下外方に伸び角度を変え直線的に脚端に至る。端部は平坦である。	○柱状部内面はヘラ削り、外面はナデ。底部内面はナデ、外面は刷毛目。 柱状部に凹孔が三孔見られる。	No29	明淡赤褐色
-9	高杯	— — 11.0 7.0	○やや外上方に伸びる底部を持つ。 ○直線的に下外方に伸び角度を変えやや膨んで脚端に至る。端部は丸く終わる。	○内外面ともナデ ○柱状部内面ヘラ削り、他刷毛目。	No 7, 8	淡赤褐色
-10	高杯?	16.8 5.1 —	○ほぼ水平な底座から内溝しながら立ち上がり端部で外反する。端部は丸く終わる。	○内面は指ナデが顯著で外面はナデ	No26	淡チョコレート色
-11	高杯(D)	— — 14.8 5.9	○柱状部ではなく、下外方に直線的に伸びて脚端に至る。端部は平坦である。	○内外面ともナデ。	No004	淡赤褐色

-12	小型丸底壺 (C)	8.8 2.9 9.6 6.5 (0.92, 0.4)	○内面の縁は丸く、「く」の字に外反する。 ○剥が張り、やや扁平な球形。	○内外面ともナデ。 ○内面は指ナデ、外面は刷毛目。	No002	淡褐色
-13	小型丸底壺 (C)	9.3 3.0 9.3 —	○内面に鋸い縁を持ち、「く」の字に外反する。 ○扁平な球形。	○内外面ともナデ。 ○内面はヘラ削り、外面は刷毛目のち指ナデ。	No003	淡褐色
-14	小型丸底壺 (B <sub>1</sub> )	10.0 2.3 8.5 4.8 (1.17, 0.48)	○内面に鋸い縁を持ち、外反する。 ○剥部が張り、小さな体部を持つ。	○内外面ともナデ。 ○内面は指ナデ、外面は刷毛目。	No001	茶褐色
-15	小型丸底壺 (D)	8.4 2.0 9.8 7.5 (0.8, 0.26)	○外上方に直線的に短く伸び端部は丸い。 ○球形。	○内外面ともナデ。 ○内面指ナデ、外面刷毛目のち指ナデ。	No 4	暗茶褐色
-16	小型丸底壺 (D)	8.3 2.0 9.2 6.8 (0.9, 0.3)	○内面に鋸い縁を持ち外上方に短く伸びる。端部は丸く終わる。 ○球形。	○内外面ともナデ。 ○内面は指ナデ、外面には一部刷毛目が見られる。	No 2	暗灰色
-17	小型丸底壺 (D)	7.8 1.8 9.5 6.7 (0.82, 0.28)	○内面に鋸い縁を持ち、外上方に短く伸びる。端部は丸く終わる。 ○やや肩の張る扁平な球形。	○内外面ともナデ。 ○内面は指ナデ、外面は刷毛目。	No 3	暗灰色
-18	小型丸底壺 (D)	8.2 1.7 9.1 6.4 (0.9, 0.27)	○外上方に短く伸びる。端部は丸く終わる。 ○やや扁平な球形。	○内外面ともナデ。 ○内面は指ナデ、外面は刷毛目。	No 1	淡灰色
-19	小型丸底壺	9.0 2.0 8.8 5.6 (1.0, 0.36)	○外上方にやや内湾しながら伸びる。端部は丸い。 ○やや扁平な球形。	○内外面ともナデ。 ○内面は刷毛目、外面は一部刷毛目が見られる。	No27	淡褐色
-20	手づくね土器	10.0 1.9 8.0 2.8	○外上方に直線的に伸び、端部は平坦に終わる。 ○小さな体部を持つ。	○内面は刷毛目	No006	茶褐色
-21	手づくね土器	6.7 0.9 6.6 4.1	○内面に鋸い縁を持ち外反する。端部は丸く終わる。 ○やや扁平な球形。		No 5	淡褐色
-22	製塙土器	8.0 最大径(9.4) 9.0	○中位が膨らむ、丸底	○内面ナデ、多面叩き、内底にヘラ痕を残す。	No14	灰赤褐色
-23	製塙土器	8.8 最大径(9.4) 8.8	○中位がやや膨らみ尖底気味になる。	○内面ナデ、外面叩き。	No010	黄土色
-24	製塙土器	9.0 2.5 11.0 7.1	○ほぼ直立気味に伸び、端部は丸く終わる。 ○最大径が中位よりもさりやや下ぶくれで平底。	○内面ナデ、外面叩き。 ○内面ナデ、外面上半は叩き、下半はナデ。叩きのち口縁部を形成か。	No 4	灰褐色

第15表 G-11区土器溜出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形の特徴	出土地点	備考
第47図-1	壺(B <sub>1</sub> )	18.0 5.1 31.0 29.4	○「く」の字に外反し、端部は外傾する平坦面をもつ。 ○球形	○内面はナデ、外面はヘラミガキのちナデ。 ○内面はヘラ削り、内底に刷毛目が見られる。 ○外面はナデ。指頭圧痕が顯著である。	No 2・12・27	赤乳白色
-2	壺(B <sub>2</sub> )	17.0 4.0 25.8 24.0	○「く」の字に外反し、端部は丸く終わる。 ○球形	○内面は刷毛目、外面はナデ。 ○内面は指ナデ、外面は叩きのちナデ。上半には刷毛目が見られる。	No 24～27	淡赤乳白色
-3	壺(E)	12.0 3.3 15.0 10.5	○内面に長い縦を持ち、「く」の字に外反する。端部は丸く終わる。 ○やや扁平な球形。	○内外面ともナデ。 ○内面は指ナデ、内底と刷毛目が見られる。 ○外面は側下半とヘラ削り、他は刷毛目。	No 1・16・17・ 20・21・22・24・ 27	暗赤褐色
-4	壺(A)	11.0 2.8 17.1 14.7	○内面に縦を持ち、やや内溝しながら外上方に伸び、端部は丸い。 ○球形	○内外面ともナデ。 ○内面はヘラ削り、外面は刷毛目。	No 1・2・5・ 8・10・17	暗灰褐色
-5	壺(D)	16.2 3.6 20.1 17.2	○内面に縦を持ち、「く」の字に外反する。端部は外傾して平坦である。 ○球形	○内外面ともナデ。 ○内面は指ナデ、外面は叩きのちナデ。	No 11・25・6・ 7・16・5・ I・V	淡赤褐色
-6	高杯(A)	17.0 4.5 12.6 7.5	○やや外上方に伸びる底部から、外溝して端部にいたる。端部は丸く終わる。 ○柱状部はやや膨らみ、角度を変えて脚削りに端部に至る。端部は丸く終わる。	○内面はヨコナデ、外面は刷毛目。 ○柱状部内面はヘラ削り、端部は刷毛目。 ○柱状部外面はヘラミガキ、端部はナデ。	No 18・19・24・26	暗茶褐色
-7	高杯(A)	17.0 5.1 11.2 8.4	○ほぼ水平な底面から外反しながら端部にいたる。端部は丸く終わる。 ○柱状部はやや膨らみ、角度を変えて脚削りにいたる。端部は丸く終わる。	○内面は刷毛目、外面は刷毛目のちナデ。 ○柱状部内面はヘラ削り、端部は刷毛目。 ○外面は接合部刷毛口。柱状部はヘラミガキ、端部はヘラミガキ。	No 11・15・18・ 22・27	茶褐色
-8	高杯(B)	19.4 5.8 12.6 6.5	○やや外上方に伸びる底部から、丸い突窓を持ち、外反して端部を丸く終わる。 ○柱状部はやや膨らみ、角度を変えてやや膨らみながら脚削りに至る。端部は丸く終わる。	○内外面とも刷毛目のちナデ。 ○柱状部内面はヘラ削り、他はナデ調整。	下部No 1・2	淡赤褐色
-9	高杯(C)	22.0 4.9 16.4 9.5	○ほぼ水平な底面から三角形の突窓を持ち、外反しながら端部にいたる。端部は丸く終わる。 ○柱状部はやや膨らみ、角度を変えてほぼ直線的に端部にいたる。端部は丸く終わる。	○内面は刷毛目、外面はナデ。 ○内面は柱状部が指ナデ、端部は刷毛目。 ○外面は柱状部が刷毛目、端部はナデ。	No 10・17・21・ 22・27 IV・V	明淡赤褐色
-10	小型丸底壺(C <sub>2</sub> )	8.0 6.2 8.2 ( ) 5.9	○「く」の字に外反して、端部は丸く終わる。 ○肩部がやや張る球形。	○内・外面ともナデ。 ○内面は指ナデ、外面は不明。	No 26	暗茶褐色
-11	小型丸底壺(D)	9.2 2.2 9.3 5.8	○短く外上方に伸び、端部は丸い。 ○やや扁平な球形。	○内・外面ともナデ。 ○内面は指ナデ、外面は刷毛目。	No 28	暗黄土色
-12	小型丸底壺(D)	10.0 3.0 9.8 7.1	○外上方に伸び、端部は丸く終わる。 ○やや凹の張る扁平な球形。	○内面は刷毛目、外面はナデ。 ○内面は指ナデ、外面は刷毛目。	No 8・10・22・ 23	明褐色

第16表 古式土器器観察表(1)

器種番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形の特徴	出土地区	備考
第1山岡-1	壺(D)	16.0 4.0 —	○頭部から外反して端部に至る。端部はやや尖りぎみに終わる。 ○質の強る長脚か。	○内面ともナデ ○内面はヘラ削り、外面はナデ。	C-51 3層 ③	はだ色
		16.5 1.5 18.0 —	○「く」の字に外反し、端部は丸い。 ○上位に最大径を持ち長脚。	○内面はナデ、外面は叩きののちナデ。 ○内面は下半がヘラ削り、上半は刷毛目、外面は叩きののち下半のみナデ。	B-50 3層(土器群)	茶褐色 折りまげ口縁
		17.6 1.8 20.2 —	○内面に棱を持ち、「く」の字に外反する。端部は丸い。 ○質が強り長脚。底部は平底。	○内面はナデ、外面は叩き。 ○内面は下半がヘラ削り、上半は刷毛目、外面は叩きののち刷毛目底部にも刷毛目。	B-50 3層(土器群)	淡黄土色 折りまげ口縁
-2	壺(B)	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-3	壺(H)	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-4	壺(B)	12.6 1.6 14.6 —	○「く」の字に外反し、端部は丸い。 ○上位に最大径を持ち長脚。	○内面はナデ、外面は叩きののちナデ。 ○内面は下半がヘラ削り上半がナデ、外面は叩きののちナデ。	B-50 3層 ② 土器群	明褐色 折りまげ口縁
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-5	壺(E)	12.6 2.5 17.4 —	○「く」の字に外反したのち上方に伸び、端部は丸い。円縁部に7本のクサ目を持つ。 ○上位に最大径を持つ。	○内・外ともにナデ。 ○内面はヘラ削り、外面はナデ、一部ヘラミガキが見える。	A-51 3層 ② 第2群	暗茶褐色 「吉備系」
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-6	高杯(A)	19.4 6.7 —	○外上方に伸び、棱を形成して外反する。端部は丸く終わる。	○内・外ともナデ。	B-50 3層 ②	淡いだいだい色
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-7	高杯脚部	—	○接合部からなだらかに脚部に至る。端部は丸く終わる。円孔を四孔持つ。	○内・外ともナデ。	B-50 3層	茶褐色
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-8	高杯脚部	—	○接合部から下外方に伸び、なだらかに脚部に至る。端部は丸く終わる。円孔持つ。	○内・外ともナデ。	B-50 3層 ①	淡茶白色
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-9	鉢	27.0 6.1 24.2 4.3 —	○直線的に外方に伸び、端部はほぼ平坦に終わる。 ○丸底。	○内・外ともナデ。 ○内・外ともナデ。	A-50 3層 ②	淡黄茶褐色
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-10	鉢(A)	16.2 8.2 —	○やや丸い平底から内側しながら端部に至る。端部は外傾する平底面を持つ。	○内面はナデ、外面は叩きののちナデ。底部付近のみヘラ削り。	B-50 3層 ①	—
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-11	壺(C)	28.2 10.2 31.8 —	○やや膨らみながら内側し、角度を変えて直線的に伸び、上方に弧張した端部を持つ。端部には凹縫が見られる。 ○上位に最大径を持ち、やや長脚か。	○口縁部内・外ともナデ。 ○頸部内面はナデ、外面は刷毛目。底部のナデ。 ○底部内面はヘラナデ、外面は刷毛目。	ヤケヤマ東麓 J-3古式土器 層	茶褐色
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-12	鉢(B)	31.3 1.8 29.2 17.5 —	○内面に深い棱を持ち、直線的に外上方に伸び、端部は平坦である。 ○上位に最大径を持ち、丸底になる。	○内面は刷毛目、外面は叩き。 ○内面は指ナデ、外面は叩きののち指ナデ。底部付近ヘラ削り。	G-8区 第6層上部	淡赤褐色 折りまげ口縁
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
-13	高杯(D)	21.5 7.4 13.8 6.3 —	○外上方に伸びる底部から、三角形の突部をへて、内湾しながら脚部へ至る。端部は水平方向に外方へ弧張る。 ○ほぼ直線的に脚部に至る。端部は内側した平面面を持つ。	○内・外ともナデ。 ○内・外ともナデ。部分的に刷毛目が見られる。	G-9 第3層	淡乳白色
		—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—

-14	鉢(A)	20.0 6.8	○外方に伸びたもの内湾しながら上方に伸び、平坦な端部を持つ。	○内面は刷毛目、外面は指ナデ、底部付近のみヘラ削り。	G-5 第4層	淡乳茶灰色
-15	台付鉢?	— 11.0 2.1	○台部は外方に踏んぱり、ほぼ平坦な端部を持つ。	○内面は指ナデ、外面はヘラ削り。 ○台部は内・外とも指頭圧痕と指ナデ。	G-5 第4層	淡赤灰褐色 剣塙土器と同様の調査

第16表 古式土器観察表(2)

図版番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形の特徴	出土地区	備考
第15図-1	高杯	16.5 7.5 13.2 4.2	○内湾しながら外方に伸びる。底部から、棱を形成したの外反する。端部は丸い。 ○ほぼ垂直に下方に伸びたもの、角度を変えて直線的に端部に至る。端部は丸い。円孔が凹孔。	○内・外面ともナデ。 ○柱状部は内・外面ともナデ、底部は内面がナデ、外面は刷毛目。	F-6 第5層	明赤褐色
-2	小型丸底壺	10.3 2.3 8.6 6.6	○外溝したのち、稜を形成し、再び外反して丸く終わる。端部に平ら。 ○球形。	○内・外面ともナデ。 ○内・外面ともナデ。底部付近のみヘラ削りのち刷毛目。	第5土器群 21	茶褐色
-3	小型丸底壺(C)	9.6 3.0 9.0 6.4	○やや内湾ぎみに外方にのび端部は丸く終わる。 ○球形。	○内・外面ともナデ。 ○内面は指ナデ、外面は刷毛目。	J-14 N2	淡黄土色
-4	壺	10.4 2.0 9.6 6.5	○内面に稜を持ち、「く」の字に外反して平坦な端部を持つ。 ○扁平な球形に突出した平底を持つ。	○内面は不明、外面は叩きののちナデ。 ○内面は指ナデ、外面は叩き。	第5群 18	淡褐色 折りまげ口縁か
-5	高杯	21.0 6.2 14.0 9.0	○やや内湾ぎみに外方に伸びる底部から、突窓を形成して直線的外方に伸び、端部は丸く終わる。 ○やや広がりながら外下方に伸び角度を変えて直線的に脚窓に至る。	○内面は刷毛目のちナデ、外面はナデ。 ○内面は柱状部がヘラ削り、端部は刷毛目、外面は柱状部がヘラミガキのちナデ、脚窓は刷毛目のちナデ。	J-18 第4群 ①	淡茶褐色
-6	高杯	19.3 5.9 13.0 7.7	○やや内湾しながら外方に伸びる底窓から段を形成したのちやや内湾ぎみ外方に伸びる。端部は内傾する平底面を持つ。 ○直線的に下外方に広がったのち、角度を変えて直線的に脚窓に至る。端部は丸く終わる。	○内・外面ともナデ。 ○内面柱状部はしづり目、脚窓部はナデ。 ○外面柱状部が指ナデ、脚窓部はナデ	第4群 ④	暗赤褐色
-7	高杯	19.2 6.2 13.2 7.7	○やや内湾した底部から外方に伸びて丸く終わる端部に至る。 ○直線的に下外方に伸び、角度を変えて直線的に脚窓に至る。端部は丸い。	○内面はナデ、外面は刷毛目のちナデ。 ○内面柱状部はしづり目、脚窓部はナデ、被部は刷毛目のちナデ、外面は指ナデによる調整のある刷毛目を施し、再度ナデ。	第4群 ②	淡茶乳白色
-8	高杯	22.0 6.3 15.6 7.8	○直線的に外方に伸びる底部から段を形成し、外反して丸く終わる端部に至る。 ○やや膨らんだ柱状部から角度を変えてやや膨らみながら脚窓に至る。	○内・外面とも刷毛目のちナデ。 ○内面柱状部はしづり目、脚窓部はナデ。外面は柱状部がナデ、脚窓部は刷毛目のちナデ。	第4群 ③	淡茶乳白色
-9	高杯	25.5 6.9 14.8 7.5	○内湾しながら外方に伸び段を形成したのち外反して丸く終わる端部に至る。 ○やや膨らみながら外下方に伸び、角度を変えて直線的に丸く終わる脚窓に至る。	○内面は不明、外面は刷毛目のちナデ。 ○内面柱状部はヘラ削りのちナデ、脚窓部は刷毛目のちナデ。外面柱状部はナデ、脚窓部は刷毛目のちナデ。	第4群 ⑤	茶褐色

第17表 G・H-34区集中窓所出土の須恵器観察表

実測図 番号	種類	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
第75回 -1	蓋杯(盃)	復元口径 器 高	14.6 3.8	口縁部は丸く内側しながら下がる。端部はやや丸くおさまる。天井部はほとんど平坦である。	天井部外周を回転へテ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外青灰色。 胎土 密だが、2mmの砂粒を若干含む。 焼成風。
-2	蓋杯(盃)	口 径 器 高	15.6 4.1	口縁部はやや外びらきに下る。端部は若干丸く、内面に段を有する。天井部はほとんど平坦である。口縁部と天井部の端部に段をもつ。	天井部外周を回転へテ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外青灰色。 胎土 2mmの砂粒を含む。 焼成風や不良。
-3	蓋杯(盃)	口 径 器 高	14.7 3.7	口縁部は外びらきに下り、端部は丸く終わる。 口縁部外周に枕状の凹みが3箇ある。 天井部外面はくぼんでいる。	天井部外周を回転へテ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外青灰色。 胎土 密、小砂粒を若干含む。 焼成風や不良。
-4	蓋杯(盃)	復元口径 器 高	14.4 3.7	口縁部は直垂に下り、端部内面にへクによる一条の沈線を有する。 大井部と口縁部との間に棱をもつ。	天井部外周を回転へテ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 天井部外面は、自然釉のため黒みがかった青灰色。内面は青灰色。 胎土 小砂粒を若干含む。 焼成風、堅緻。
-5	蓋杯(盃)	口 径 器 高	15.0 4.5	口縁は八字形で、内側しながら下る。 端部はよい。 天井部と口縁部の境に凹窪を有する。	天井部外周を回転へテ削り調整。他の回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 外面は自然釉のため黒みがかった青灰色。内面は灰褐色。 胎土 2~3mmの大砂粒をわずかに含む。 焼成良好、堅緻。
-6	蓋杯(盃)	口 径 器 高	15.0 4.8	口縁部は八字形で端部は丸い。 外面には横の施路が残る。	天井部外周を回転へテ削り調整。 他の回転ナダ調整。	色調 内外面青灰色。 胎土 密。 焼成 良好。
-7	蓋杯(盃)	口 径 器 高	14.2 4.2	口縁部は直く垂直に下がり、端部は若干丸い。端部内面に棱を有する。	天井部外周を回転へテ削り調整。その他回転ナダ調整。	色調 内外面青灰色。 胎土 やや大粒の砂粒を多く含む。 焼成 やや不良。
-8	蓋杯(盃)	口 径 器 高	14.4 4.4	口縁部はなだらかに内側しながら下り、端部は丸い。端部内面に段を有する。	天井部外周を回転へテ削り調整。 その他回転ナダ調整。	ロクロ回転 左方向。 色調 内外面青灰色。 胎土 黃砂粒を含む。 焼成 やや不良。 外面は自然釉がかかり、若干磨滅している。
-9	蓋杯(盃)	口 径 器 高	14.6 4.5	口縁部はほぼ直垂に下がる。端部はやや外反ぎで内傾し、まん中が凹んでいる。 隔壁は厚く、体部には焼き笠がある。	天井部外周を回転へテ削り調整。その他回転ナダ調整。	ロクロ回転 左方向。 色調 内面は黄味をおびた青灰色。 外面は灰褐色。 胎土 密。砂粒をあまり含まない。 焼成 良好、堅緻。
-10	蓋杯(盃)	口 径 器 高	14.8 4.4	口縁部は外開きに下り、端部を丸くおさめる。口縁端部内面にかすかな棱を有する。天井部と口縁の間にかすかな段をもつ。	天井部外周を回転へテ削り調整。その他回転ナダ調整。	色調 内面は灰褐色、外表面は淡青灰色。 胎土 砂粒を若干含む。 焼成 良好。
-11	蓋杯(盃)	口 径 器 高	13.7 4.7	口縁部はほぼ直垂に下がり、端部はとがりぎである。口縁端部内面に棱をもつ。口縁部外面に一条の沈線がはしる。	天井部外周を回転へテ削り調整。 その他回転ナダ調整。	色調 内外細黄色みがかった青灰色。 胎土 密。2mm程度の砂粒若干混入。 焼成 良好。

実測回数 番号	種類	法 量	形態の特徴	手法の特徴	備考	
-12	蓋杯(身)	□ 径 器高(復元) 受部径 たちあがり高	17.0 5.3 19.6 1.3	たちあがりは内傾し、端部はやや丸い。 受部はやや外方に傾くのがある。 器薄で大腹である。	底部外面%回転ヘラ削り調整。 その他は回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外面青灰色。 胎土 砂粒をほとんど含まない。 焼成 良好、堅致。
-13	蓋杯(身)	□ 径 器高 受部径 たちあがり高	13.6 3.9 16.0 1.0	たちあがりは外反ぎみで内傾し、端部 内側に一条の紋様を有す。 受部は廻り、端部は丸い。 器厚是比较的薄い。	底部外面%回転ヘラ削り調整。他は回 転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外面青灰色。 胎土 2~4mmの砂粒を若干含む。 焼成 良。
-14	蓋杯(身)	□ 径 器高 受部径 たちあがり高	14.0 3.9 16.2 1.0	たちあがりは内側ぎみで内傾する。内 面のたちあがり基部にへら状工具で壠 をつける。 受部は外上方にのび、端部を丸くおさ める。	底部外面%回転ヘラ削り調整。 その他は回転ナダ調整。	ロクロ回転 左方向。 色調 内外面青灰色。 胎土 3mmの砂粒を若干含む。 焼成 良。
-15	蓋杯(身)	□ 径 器高 受部径 たちあがり高	13.2 4.5 15.4 1.0	たちあがりは内側ぎみで内傾し、端部 を丸く上げる。廻り受部は外上方に のびる。底は丸みをもつ。	底部外面%回転ヘラ削り調整。その他 は回転ナダ調整。	ロクロ回転 色調 内外面青灰色。 胎土 1mmの砂粒を含む。 焼成 良。
-16	蓋杯(身)	□ 径 器高 受部径 たちあがり高	13.0 4.8 15.6 1.3	たちあがりはやや内側ぎみで内傾し、 端部は丸い。受部はほぼ水平で、端部 は丸い。	底部外面%回転ヘラ削り調整。 内面は未調整で、底部附近を棒状のも ので突いた凹部がある。	色調 内外面明黄褐色。 胎土 2~3mmの大砂粒を若干含む。 焼成 不良、軟質。
-17	蓋杯(身)	□ 径 器高 受部径 たちあがり高	12.3 4.3 14.6 1.5	たちあがりはやや長く、外反ぎみであ る。内傾部はやや圓く、内面口端部 に一条の紋様を施す。受部は外上方に 廻りくのび、丸みをおりた端部を有する。	底部外面%回転ヘラ削り調整。 その他は回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外面灰色。 胎土 砂粒を若干含む。 焼成 良。
-18	蓋杯(身)	□ 径 器高 受部径 たちあがり高	12.6 4.3 14.5 1.0	たちあがりの断面は三角形である。受 部は水平からやや外方にのばる。	底部外面%回転ヘラ削り調整。その他 は回転ナダ調整。	色調 内外面青灰色。 胎土 磨砂粒を若干含む。 胎土 良好。
-19	蓋杯(身)	□ 径 器高 受部径 たちあがり高	13.0 4.6 16.0 1.1	たちあがりはなだらかに内傾し、端部 はややとがりぎみである。受部はやや 水平にのび、端部を丸くおさめる。	底部外面%回転ヘラ削り調整。その他 は回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外面青灰色。 胎土 厚。 焼成 良好、堅致。
-20	蓋杯(身)	□ 径 器高 受部径 たちあがり高	13.8 5.0 16.0 1.1	たちあがりは若干内傾し、端部は丸い。 受部はほぼ水平にのびる。	底部外面%回転ヘラ削り調整。その他 は回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外面灰色。 胎土 砂粒を若干含む。 焼成 良。
-21	蓋杯(身)	□ 径 器高(復元) 受部径 たちあがり高	13.0 3.7 15.6 1.2	たちあがりは内側ぎみに内傾し、端部 はややとがる。受部は水平から若干下 廻りくのび、端部は比較的シャープで ある。体部は焼き歪みが著しい。	底部外面は廻り回転ヘラ削り調整。内 面は回転ナダ調整が明確でない。内 面ともに粗緻圧痕が残る。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外面青灰色。 胎土 2~3mm程度の砂粒を若干含む。 焼成 やや不良。
-22	高 杯	□ 径 (残存高) 受部径 脚部径	12.5 4.2 4.1 4.0	確正形で口縁はゆるく広がる。杆外 面には2段の棱を有し、その間に点列 文を施す。 脚部で2段の透し孔をもつものと思わ れる。	内外面とも回転ナダ調整。	色調 内面は青灰色。外側は淡青灰 色。 胎土 2~3mm程度の砂粒を若干含む。 焼成 良。 内面に自然粋がかかる。
-23	高 杯	(残存高 底部径)	6.0 7.0	脚部は外反しながらのび、端部で2度 屈曲し、内傾する。	内外面とも回転ナダ調整。	色調 内外面灰色。 胎土 細砂粒をやや含む。 焼成 良。
-24	器 台	(残存高 (復元器径28.0)	6.5	外面は丁寧な、ヨコナダが施され後を つける。縁と縁との間に繩縫き、波 状文が施される。 25はこの口縁と思われる。	内外面とも回転ナダ調整。	色調 内外面青灰色。 胎土 微細粒を若干含む。 焼成 良好。

第18表 古墳時代の須恵器観察表

実測番号	名 称	出土地点	法 番(cm)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考	
第113回 1	蓋杯(蓋)	B-51 第3層	口 径 器 高 横 径 天井部高	14.0 4.5 12.5 2.2	口縁部は下外方に下り、縁部は浅い(不明線)で段をもつ。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部高	マキアグ。 天井部外側5/4回転、ヘラ削り。 他は、回転ナダ調整(内蓋天井部、若干横ナダが残る)。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外黒灰色。 胎土 1~2mmの砂粒を含む。 焼成 良好、堅敏。
2	蓋杯(蓋)	H-34 第4層	口 径 器 高 横 径	14.5 3.8 14.0	大井部と口縁部の間にかすかに段がある。口縁部はほぼ垂直に下がり、縁部を丸くおさめる。 施き墨みが美しい。	天井部外側5/4回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	色調 内外面暗灰。 胎土 精妙な砂粒を若干含む。 焼成 良。
3	蓋杯(蓋)	B-51 第3層上	口 径 器 高 横 径 天井部高	15.0 4.8 14.0 3.0	口縁部はやや下外方に下り、縁部は内傾する浅い段をもつ。 大井部やや高く、平坦。	マキアグ。 天井部外側5/4回転ヘラ削り。 他は回転ナダ調整。(内蓋天井部若干横ナダが残る)	ロクロ回転 右方向。 色調 内外黒灰色。 胎土 1~2mmの砂粒を含む。 焼成 良好、堅敏。 残存 少。
4	蓋杯(蓋)	H-35 第4層	口 径 器 高 横 径	15.2 4.1	口縁部は内齊ぎみに下がり、縁部を丸くおさめる。	天井部外側5/4回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内面灰赤、外面暗灰色。 胎土 1~2mmの砂粒をかなり含む。 焼成 良。
5	蓋杯(蓋)	H-34 第4層	口 径 器 高 横 径	13.6 4.8	口縁部はほぼ垂直に下がり、縁部は丸い。口縁部内面に段を有する。天井部にヘラ痕がある。	天井部外側5/4回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	ロクロ回転 左方向。 色調 内外黒灰色。 胎土 2mm程度の砂粒を少し含む。 焼成 良。
6	蓋杯(蓋)	B-51 第3層	口 径 器 高 横 径 天井部高	15.0 4.6 14.0 2.7	口縁部はほぼ垂直に下り、縁部は丸い。 天井部はやや高く、平坦。	マキアグ。 天井部外側5/4回転ヘラ削り。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外黒灰色。 胎土 1~2mmの砂粒を含む。 焼成 普通。 残存 多反転復元。
7	蓋杯(蓋)	G-39 第3層	口 径 器 高 横 径	13.5 4.2	口縁部は若干かくばる。 2ヶ所焼き墨みによるくぼみがある。	天井部外側5/4回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	色調 内外黒青灰色。 胎土 黒色の鉱物や2mm程度の砂粒を若干含む。 焼成 やや不良。 15とセットで出土。
8	蓋杯(蓋)	B-51 第3層	口 径 器 高 横 径 天井部高	11.0 3.7 10.5 2.1	口縁部や外反ぎみに下り、縁部や内傾する。 天井部やや低く丸い。	マキアグ。 天井部外側は全体にヘラ削り。 他は、回転ナダ調整(内蓋天井部横ナダが残る)。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外黒青色。 胎土 1~2mmの砂粒を含む。 焼成 良好、堅敏。 残存 少。
9	蓋杯(蓋)	B-50 第3層	口 径 器 高 横 径	10.4 2.8	口縁部内齊ぎみにはほぼ垂直に下り、縁部は内傾する。 天井部やや低く平坦。	マキアグ。 天井部外側は全体にヘラ削り。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転 左方向。 色調 内外黒灰色。 胎土 1~2mmの砂粒を含む。 焼成 良好、堅敏。
10	蓋杯(身)	K-37 第4層	口 径 器 高 受 部 径 たちあがり高	11.0 5.6 12.5 2.0	たちあがりは長く、やや内傾する。受部は若干上方に粗くのび、その底部を丸くおさめる。 口縁部は角ばる。	底部外側5/4回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	ロクロ回転 左方向。 色調 内外黒灰色。 胎土 2mm程度の砂粒を少し含む。 焼成 良。
11	蓋杯(身)	F-33 第4層	復元口径 器高(復元) 受部径(復元) たちあがり高	11.2 5.3 13.4 1.9	たちあがりは長く、やや内傾する。受部は若干上方に粗くのび、その底部を丸くおさめる。 口縁部は角ばる。	マキアグ。	色調 青灰色。 胎土 焼成 良。
12	蓋杯(身)	J-28 第4層	口 径 器 高 受 部 径 たちあがり高	12.1 4.4 14.5 0.9	たちあがりは低く、内傾する。 受部は上方にはだし、縁部を丸くおさめる。たちあがり基部に凹線を有する。	底部外側5/4回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外青灰色。 胎土 2~5mmの砂粒を含む。 焼成 良。

実測番号	名 称	出土地点	法 量(cm)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
13	蓋杯(身)	I-29 第4層	口 径 12.6 器 高 4.1 受 部 径 14.7 たちあがり高 0.7	たちあがりは低く、内傾する。 受部は外上方にはりだし、縁部を丸くおさめる。たちあがり基部に凹線を有する。	底部外面汚回転ヘラ削り調整。 その他は回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外側濃青灰色。 胎土 1cm程度の細砂粒を含む。 焼成 良。
14	蓋杯(身)	O-30 第4層	口 径 11.8 器 高 4.2 受 部 径 14.5 たちあがり高 0.8	たちあがりは短く、低い。縁部はやや鋸くとがる。	底部外面汚はへら削りで調整しているが、非常に粗糙で、凹凸がはげしい。その他は回転ナダ調整。	色調 青灰色。 胎土 1~4mmの砂粒を含む。 焼成 良好。
15	第113回 蓋杯(身)	G-30 第3層	口 径 12.4 器 高 4.2 受 部 径 14.6 たちあがり高 1.1	たちあがりは張り付けて内傾する。 底部は平坦である。	底部外面汚回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外側淡灰色。 胎土 密。 焼成 良好、堅緻。 丁度もセッタで出土。
16	蓋杯(身)	H-34 第4層	口 径 12.8 器 高 4.7 受 部 径 15.0 たちあがり高 1.2	たちあがりはやや長く、内傾する。	底部外面汚回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外側濃青灰色。 胎土 1~3mm程度の砂粒を若干含む。 焼成 良好。
17	蓋杯(身)	H-34 第4層	口 径 13.4 器 高 4.5 受 部 径 15.4 たちあがり高 1.1	たちあがりの基礎内面に、へら状工具で境をつける。	底部外面汚回転ヘラ削り調整。 その他は回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内面淡灰色。外側青灰色。 胎土 1~3mmの砂粒を少し含む。 焼成 良。
18	蓋杯(身)	H-34 第3層	口 径 12.8 器 高 4.5 受 部 径 15.8 たちあがり高 1.0	たちあがりはやや外反気味で、 縁部を丸くねじめる。 受部は外上方にのびる。全体的に たわみがある。	底部外面汚回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内面淡灰色。外側青灰色。 胎土 1~2mm程度の砂粒を含む。 焼成 良。
19	蓋杯(身)	G-35 第4層	口 径 12.3 器 高 4.2 受 部 径 14.2 たちあがり高 1.1	たちあがりは外傾しながら直底 ぎみにたちあがる。たちあがり 底部は内外面とともにへら状工具 で境をつける。	底部外面汚回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内面青灰色。外側青灰色。 胎土 5mm大の砂粒を含む。 焼成 良。
20	蓋杯(身)	K-34 第4層	復元口座 18.0 器 高 5.2 受 部 径 20.4 たちあがり高 1.5	たちあがりは吳く、若干内傾する。 縁部は丸い。全体的に腰膨 だが大型である。	底部外面汚回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外側とも青灰色。 胎土 小砂粒を含む。 焼成 良。
21	蓋杯(身)	C-51 第3層	口 径 11.2 残 存 高 4.2 たちあがり高 0.7 受 部 径 13.5	たちあがりは短く、内傾した後 直立する。縁部はシャープである。 立ちあがりと受部が口字状 を成す。	マキアグ。 立ちあがりはハリツケ手法によ る直面ヘラ切り。 他のは回転ナダ調整。 ○内側は横ナダ(仕上げナダ)が ない。	色調 内外面灰白色 胎土 1~3mmの砂粒を含む。 焼成 良。 強強、反転復元。
22	壺(蓋)	G-27 第2層下	口 径 3.5 器 高 2.6 つまみ径 0.8	器壁が厚手である。口縁部はや や厚く引け出され、縁部は丸く終る。 かえりは内傾し又尖る。つまみは、やや扁平である。	天井部外面汚回転ヘラ削り調整。 その他のは、回転ナダ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内外側とも青灰色。 胎土 1~2mm程度の砂粒を多 く含む。 焼成 良。
23	高杯(蓋)	I-39 第4層	口 径 12.2 器 高 5.0 つまみ径 4.7 つまみ高 0.5	口縁部はほぼ直面に下り、縁部 は内傾する凹面をなす。 口縁外縁に一条の旋線をめぐら し、縁を浮かびあがらせる。 天井部に扁平で凹状のつまみを 付す。	天井部外面汚回転ヘラ削り調整。 その他は、回転ナダ調整。	色調 内面淡灰色。外側自然積 がかり、暗灰。

実測番号	名 称	出土地点	法 量(cm)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
24	高 杯	I-39 第4層	口径 13.7 基部径 6.6 脚部径 5.4 脚部高 8.9 脚基部内にそ状のくぼみがある。	脚部は直線的に大きく広き、端部は圓弧をもち内傾する。 杯部は同時期の杯蓋を転用した ような形態である。	杯部の脚基部付近は、回転ヘラ削り調整。その他は、回転ナガ調整。	色調 杯部内面灰色。その他は青灰色。 胎土 1mm程度の砂粒を少數含む。 焼成 良好、堅緻。
25	高 杯	M-34 第4層	口径 13.6 基部径 15.6 残存器高 4.9 脚部径 4.4	杯部は同時期の杯蓋を転用した ような形態である。 脚部と杯部の接合が粗雑である。	杯部の脚基部付近は回転ヘラ削り調整。その他は回転ナガ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 淡灰色。 胎土 1mm程の砂粒を多く含む。 焼成 やや不良。
26	高 杯	I-29 第3層	残存高 5.0 基部径 4.9 脚底部 9.1 脚部高 4.0	脚部は脚基部よりやや直線的に 外下方に下り、底部近くで斜め 上方に屈曲する。端部は若干外 傾する。	脚部内外面ともに丁寧な回転ナ ガ調整。	色調 淡灰色 胎土 備砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。
27	盃	I-37 第5層	復元口径 10.4 残存高 8.8	口縁部はややひらき気味にたちあ がり、周縁は丸い。 体部にやや張り感あり。だし 上方に屈曲する。肩部は均等するが底部に到って厚くなる。 縦高の低い小さな盃である。	体部外表面下は回転ヘラ削り調 整。その他は、回転ナガ調整。	色調 内面灰色、外側暗青灰色、 一部自然釉がかかる。 胎土 粘土。 焼成 良好。
28	盃	K-35 第4層下	復元口径 8.2 残存高 12.0	口縁部は短く、直立してたちあ がり。体部上位に丸みを持った 口を張りだす。	体部外表面部付近は、回転ヘ ラ削り調整。内面底部付近は、 不整方向のナガ調整。その他は、 回転ナガ調整。	ロクロ回転 右方向。 色調 内面青灰色、外側灰色。 胎土 1~2mm程度の砂粒を含 む。 焼成 良好、堅緻。
29	盃	K-30 第4層	復元口径 9.6 残存高 10.5	口縁部は直線にたちあがり。周 縁部は丸く上げる。周縁上面に わずかに凹面がみられる。 体部上位になだらかな丸みをも つた肩を有す。 周縁に径約1.2cmのはりつけと 思われる痕跡がある。	内面・外表面の肩より上は、回転 ナガ調整。外側の肩より下にかけ てはカキ目が施される。	色調 内面白灰色、外側黄味が かった灰色。肩部に自然 釉。 胎土 2mm大の石粒が若干混じ る。 焼成 良。

第19表 土師質土器観察表

博物館番号	出土地点	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	手 法	形 塗
			口径	高さ	底径					
第125図 1	D-1 第3層 土 器	高台付瓶	14.6	4.9	6.1	内面、淡黄褐色 外面、淡黄褐色	1mm弱の砂粒 を多く含む。	やや 不良	内面、窓誠により調整不明。 外側、ヨコナギが残るが表面が粗 い。 高台、貼り付け。 底部、外側調整不明。	体部内部、外面に窓い縫。 上縫部、やや厚身し側外反。 高台、断面三角形。
2	C-03 第3層 土 器	高台付瓶		4.6		内面、黒灰色 外面、淡黄褐色	1mm弱の砂粒 を含む。	良	高台、貼り付け。 底部、外側調整不明。	高台、断面三角形。
3	C-0 第3層 土 器	高台付瓶		6.2		内外面、淡黄褐色	1mm弱の砂粒 を含む。	良	内面、窓誠のため調整不明。 高台、貼り付けヨコナギ残る。	高台、断面三角形。
4	C-0 第3層 土 器	高台付瓶		6.2		内外面、明黄褐色	微砂粒を含み 2~4mm人の 砂粒をまじむ。	良	内面、底部外側調整のため調整不 明。 高台、貼り付けヨコナギ残る。	高台、断面三角形。
5	B-02 第3層下層	高台付瓶		6.6		内面、淡黄褐色 外側、淡黄褐色	1mm弱の砂粒 を多く含む。	やや 不良	内外面とも窓誠のため調整不明。 高台、貼り付けヨコナギ残る。	高台、断面三角形。
6	B-02 第3層上層	高台付瓶		6.0		内面、淡黄褐色 外側、淡黄褐色	1mm人の砂粒 を多く含む。	不良	内外面とも窓誠のため調整不明。 高台、貼り付け。	高台、断面2角形。
7	C-02 第3層下層	小 瓶	8.1	1.5	5.0	内外面、淡黄褐色	微砂粒わずか に含む。	良	内外面、ヨコナギ。 底部、ヘタ切り痕無著。	体部、やや外薄。 底部、厚。
8	C-02 第3層	小 瓶	7.8	1.5	5.3	内外面、白灰色	微砂粒わずか に含む。	良	内外面、ヨコナギ。 底部、右より回転ヘタ切り。	体部、外薄。
9	C-02 第3層	小 瓶	7.7	1.4	5.6	内外面、明黄褐色	微砂粒わずか に含む。	良	内外面、ヨコナギ。 底部、右より回転ヘタ切り。	体部、やや外薄。 底部、くぼみ。
10	C-01 第3層下層 上	小 瓶	7.0	1.1	5.0	内外面、明黄褐色	1mm大の砂粒 多く含む。	良	内面、窓誠調整不明。 外側、ヨコナギ。 底部、ヘタ切り。	体部、底部とも窓誠が厚い。
11	C-0 第3層 土 器	小 瓶	9.0	1.7	6.8	内外面、乳白色	微砂粒わずか に含む。	良	内面、窓誠調整不明。 外側、ヨコナギ。 底部、ヘタ切り。	体部、やや外薄。他より大形。
12	C-01 第3層	小 瓶	8.0	1.5	5.7	内面、乳白色 外側、淡黄褐色	1mm大の砂粒 を含む。	良	内外面、ヨコナギ。 底部、右よりヘタ切り。	上縫部内尚し縫部丸い。
13	C-01 第3層	小 瓶	7.6	1.3	5.7	内外面、明黄褐色	1mm大の砂粒 を多く含む。	不良	内外面、ヨコナギ。 底部、ヘタ切り。	底部、中央が厚くな。
14	B-01 第3層	小 瓶	8.0	1.4	5.8	内外面、淡灰白色	1mm大の砂粒 を含む。	良	内外面、ヨコナギ。	体部、側外薄。
15	B-01 第3層	小 瓶	8.0	1.2	5.6	内外面、淡黄白色	微砂粒をわずか に含む。	良	内面、ヨコナギ。 外側、窓誠のため調整。 底部、ヘタ切り。	体部、側外薄。
16	C-02 第3層	小 瓶	7.6	1.4	5.3	内外面、明黄褐色	1~2mm大の 砂粒をわずか に含む。	良	内外面、回転ナギ。 底部、右よりヘタ切り。	体部、側外薄。
17	C-01 第3層上層	小 瓶	7.0	1.7	5.0	内外面、青褐色	砂粒を多く含 む。	不良	内外面、ヨコナギ。 底部、ヘタ切り。	底部、体部とも窓誠が厚い。 体部、外薄。
18	C-02 第3層	小 瓶	7.7	1.3	5.3	内外面、明黄褐色	2~3mm大の 砂粒を含む。	良	内外面、回転ナギ。 底部、回転ヘタ切り。	体部、側外薄。
19	B-01 第4層上層	高台付瓶			5.7	内外面、素黄色	微砂粒を含む。	良	高台、貼り付け。	高台、断面、長三角形。
20	C-03 第4層上層	瓶	13.0			内面、淡褐色 外側、暗褐色	微砂粒を含む。	良	内外面、ヨコナギ。	体部内部、上縫部脛外反し、外面 に窓い縫。
21	B-0 第4層上層	瓶	13.1			内外面、淡白灰褐色	1mm弱の砂粒 を含む。	不良	内外面、窓誠調整平明。	体部、内薄。 外面に窓い縫。

種別番号	出土地点	器種	法 量(cm)			色 調	輪 上	焼成	手 法	形 態
			口徑	高さ	底径					
22	H-01 第4層上層 土壌	碗	17.5			内面、乳白色 外壁、明褐色	微砂粒を含む。	良	内面、輪文わずかに残る。 外壁、ココナデ。	口縁部、外周。
23	B, C-01 S K 1	高台付瓶	14.0	4.6	6.4	内外面、乳白色	1~2mm大の 砂粒を含む。	不良	輪文著しく調整不明。 高台、貼り付け。	高台断面、台形状。 体部断面直し、口縁部斜外曲。
24	C-02 pit8	小 皿	16.8	1.7	6.3	内面、淡黃褐色 外壁、暗黃褐色	1~2mm大の 砂粒多く含む。	不良	外壁、ココナデ。 外壁、口縁にココナデ残る。 底部、ヘラ切り。	体部内外面、ココナデによる模。 底部、直線的に伸び、ナゲによる凹凸。
25	H, C-01 S K 1	杯	12.7	3.5	8.6	内外面、淡黃褐色	微砂粒を含む。	良好	内面、ココナデ。 底部、ヘラ切り。	体部、直線的に伸び、ナゲによる凹凸。
26	B-02 S K 3	杯			8.6	内面、淡褐色 外壁、黄色	微砂粒を含む。	良好	内面、ココナデ。 底部、ヘラ切り。	体部、直線的に伸び、ナゲによる凹凸。
27	B, C-01 S K 1	碟	11.0			内面、暗赤茶褐色	1~3mmの砂 粒含む。	不良	輪文により調整不明。 頭部にわずかにココナデ残る。	頭部、内向し、頭部外曲。
28	B, C-01 S K 1	碟?				内外面、茶褐色	1mm大の砂粒 多く含む。	不良	内面、ココナデ。 外壁、指痕残る。	
29	B, C-01 S K 1	碟	16.7			内外面、暗茶褐色	1mm大の砂粒 多く含む。	不良	頭部、外壁に指痕、内面ココナ デ。 体部、外面ココナデ、内面指痕後 のココナデ。	頭部、内向し、頭部外曲。
30	C-02 pit7	碟	14.0	11.2		内外面、淡黃褐色	1~2mm大の 砂粒多く含 む。	不良	頭部、内外面ココナデ。 くびれ部、外壁に指痕、 体部指痕、ハサウエ工具でナゲ上げ。	肩部、直立ぎみに立ち上がり複数 外曲。
31	B-04 渓水層内	高台付瓶		7.4		内外面、乳白色	微砂粒わずか に含む。	良	輪文著しく調整不明。 底部、外壁ココナデ。	腹壁厚い。
32	B-03 渓水層内	高台付瓶	7.8	2.5	4.6	内外面、乳白色	微砂粒わずか に含む。	良	内面、ココナデ。 底部、外壁ココナデ。 高台、貼り付け。	高白、肥厚で横にふんばり断面丸 形。 体部、外側に模、内面なめらかに 内凹。
33	B-03 渓水層内	高台付瓶		5.8		内外面、明乳白色	1mm大の砂粒 を含む。	良	輪文著しく調整不明。 高台、貼り付け。	高白、断面尖角形。
34	B-04 渓水層内	高台付瓶		5.6		内外面、乳白色	1mm大の砂粒 多く含む。	良	輪文のため調整不明。 高台、貼り付け。	高台、断面正三角形。
35	A-03 渓水層内	高台付瓶		6.0		内外面、淡黃褐色	3mm大の砂粒 混じる。	良	輪文のため調整不明。 底部、外壁ココナデ。 高台、貼り付け。	高台、断面長二角形。
36	C, B-03 渓水層内	小 皿	7.2	1.1	5.7	内外面、淡灰白色	1~4mmの砂 粒を含む。	良	輪文のため調整不明。 底部、底まわり回転ヘラ切り。	体部、直線的に立ち上がり、頭部 まるい。
37	C, B-04 渓水層内	小 皿	8.0	1.2	4.8	内外面、明黃褐色	砂粒含む。	良	輪文している。 底部、外壁ヘラ切り。 体部、内面ココナデが部分的に現 れる。 体部、外壁にココナデによる模。	体部、ゆるやかな立ち上がり。 底部、直線的な立ち上がり。
38	B-04 渓水層内	小 皿	8.8	1.0	7.2	内外面、乳白色	砂粒含む。	良	輪文のため調整不明。	口徑に比べ器高が低い。 体部、直線的な立ち上がり。
39	C-03~04 B-03~04 渓水層内	小 皿	8.2	1.7	5.6	内外面、黃褐色	1~2mm大の 砂粒含む。	不良	底部、左まわりのヘラ切り。 底部内凹、らせんの凹槽。 内面、ココナデ。	焼きひずみ著しい。 外側の凹凸著しい。 体部、器く外反し頭部まよい。
40	C-03~04 B-03~04 渓水層内	小 皿	8.0	1.0	5.5	内外面、乳白色	砂粒を含む。	良	輪文のため調整不明。 底部、ヘラ切り。	口徑に比べ器高低い。 体部、ゆるやかに立ち上がり、口 縁部で頭部内凹。

探査番号	出土地点	層	法 量(cm) (上部 高さ 底厚)	色 調	崩 上	構成 手	法	形 態
41	B-01 第4層中層	高台付桿 基盤		6.6 内面、黒灰色 外面、黄褐色	砂粒を含む。 良	内面、全面に縦文。露風のため詳 細不明。	高台、断面長二角形で横にふんば る。	
42	B-01 第4層中層	高台付桿		6.3 内面、白色 外面、暗茶褐色	1mm弱の砂粒 多く含む。	不良 内面、崩落のため調整不明。 底部、外側へ少しきずり落ちる。	高台、断面正三角形で直に立つ。	
43	B-01 第4層中層	高台付桿		6.3 内外面、灰黃色	1mm弱の砂粒 多く含む。	不良 内面、整備のため調整不明。 底部、外側へ少しきずり落ちる。 高台、貼り付け。	高台、断面長二角形で横にふんば る。	
44	C-01 第4層中層	高台付桿		6.1 内外面、白黄色	1mm以下の砂 粒を含む。	良 内面、露風のため調整不明。 高台、貼り付けヨコナガ残る。	高台、断面長二角形で横にふんば る。	
45	B-01 第4層中層	高台付桿	14.0 4.9 6.5	内外面、淡黄灰色	1mm弱の砂粒 多く含む。	不良 内面、露風のため調整不明。 底部、外側へ少しきずり落ちる。 高台、貼り付けヨコナガ残る。	体部、下半部内側、中央の棒を 端に上半部は直線的に立ちあ がる。	
46	C-01 第4層中層	高台付桿		5.8 内外面、灰白色	1~2mm大の砂粒 を含む。	不良 内面、露風のため調整不明。 高台、貼り付け。	高台、断面長三角形。	
47	B-C-01 第4層中層	桿	14.0	内外面、灰白色	1mm大の砂粒 多く含む。	不良 内面、露風のため調整不明。	体部、筋内溝。 体部、外側に焼。	
48	C-01 第4層中層	基盤	16.8 2.6 3.9	内面、黄褐色 外面、明褐色	1mm大の砂粒 を多量に含む。	不良 内面、ナガ部にヘラ切り。 外側、露風にヨコナガ残るが、 底部にかけては露風のため 不明。	体部、上部に焼、白緑部にかけて 堅壁うきくなる。	
49	B-01 第4層中層	土 部	8.4 1.2 5.8	内外面、黄褐色	1mm弱の砂粒 を多く含む。	不良 内面、ヨコナガ。 底部、ヘラ切り。	体部、外側、口緑部丸い。	
50	C-01 第4層中層	土 部	7.8 1.6 5.8	内面、白灰色 外面、黄茶褐色	砂粒を含む。	良 内面、露風で少しく調整不明。 外側、ヨコナガ。 底部、右まわりヘラ切り。	當壁、肥厚。 体部、直線的に伸び屈曲丸い。	
51	C-01 第4層中層	土 部	8.6 1.4 5.5	内外面、明白褐色	1mm以上の砂 粒を多く含む。	良 内面、ヨコナガ。 底部、ヘラ切り。	口緑部、側内溝。 体部、外側にナガによる凹縫。	
52	C-01 第4層中層	土 部	16.6 2.1 14.0	内外面、明褐色	砂粒を少量含む。	不良 内面、露風。 底部、外側へ少しきずり。	口緑部、外側。 底部、外側へ所により焼。	
53	C-01 第4層中層	土 部	9.4 -	内面、黒褐色 外面、暗茶褐色	砂粒を少量含む。	不良 内面、露風不明。 底部、わずかに指間隙残る。	当壁、直立せでや内側、底部 外側、口緑部丸い。	
54	C-01 第4層中層	土 部	10.8	内面、淡茶褐色 外面、淡茶色	1mm弱の砂粒 を多く含む。	良 内面、外側調整不明。 底部、内側指間隙が顯著。	当壁、外側。 くびれ部、肥厚し断端外済。	
55	D-01 第4層中層	土 部	11.0	内外面、茶褐色	微砂粒を含む。	良 外側、露風のため調整不明。 内側、ハサエ工具のナガ痕わざか に残る。	難壁多い。 手球状の形。	
56	C-01 Pit53	桿	14.6	内面、黄褐色 外面、灰褐色	1mm大の砂粒 を多く含む。	良 露風らしい。 1mm弱にヨコナガ残る。	手球状の形。	
57	C-01 Pit13	高台付桿	16.0 4.5 5.2	内外面、淡黄褐色	1~3mm大の 砂粒を含む。	良 体部、内面削減。 1mm弱にヨコナガ。 体部外側、対方向ナガ残る。 貼り付けによる高台。	近部、肥厚。 体部、内側、口緑部外済。 体部外側にナガによる焼。 高台、高く直立。	
58	C-01 S K 9	高台付桿	15.8 5.7 8.4	内外面、灰黃色	砂粒を少量含む。	良 体部、外側ヨコナガ。 内側、口緑部にナガによるナガ。 底部にかけて1mm弱なナガ仕 上げ。 底部外側はヘラ切り後にナガ仕上 げ。 高台、貼り付けヨコナガ残る。	口緑部、肥厚や外済。 高台、非常にじっかりした作り。 断面丸み形状で横にふんば る。	

第20表 瓦器観察表

検査番号	出土地点	器種	基盤			色調	胎土	施成	手法	形態
			口径	高さ	厚さ					
1 1	B-0 第4層上層	瓦	碗	12.9		内面灰色 外面青灰色	微粉粒を含む。	不良	内面堅膜調整不明。 外面部指痕後ヨコナダ。	体部直線的に立ち上がる。
2 2	B-0 第4層上層	器	碗	14.6		内外面白灰色	微粉粒を含む。	良	内面全体中央に暗文。 外面凸凹痕後ヨコナダ。(凹 凸著しい)。	体部直線的に立ち上がる。
3 3	B-01 第4層上層		碗	15.2		内外面黒灰色	微粉粒を含む。	不良	内面は縁まで不定方向に暗 文。 外面凸凹痕後ヨコナダ。	体部器内溝。
4 4	C-0 pit 4		碗	13.8		内面灰白色 外側暗灰色	砂粒あまり含ま ない。	不良	体部内外ヨコナダ。	
5 5	B-03 過水層内		碗	14.0		内外面灰白色	砂粒はとんど含 まない。	不良	磨耗著しく調整不明。 口縁部内面に一条の状線。	
6 6	B-0 第4層中層	高台付碗	14.6 4.4	5.0		内外面白灰色	微粉粒を含む。	良	体部内面削減。 底部内面平行に暗文。 底部内面指痕が残る。 高台小きく三角形。	体部器内溝。
7 7	B-01 第4層中層		碗	11.9		内外面暗褐色	微粉粒を含む。	不良	内面全体に捺文削減のため 詳細不明。 外面部指痕残る。	体部外周指痕による様。
8 8	C-0 第4層中層	高台付碗	15.2 4.8	4.0		内外面淡灰黄色	微粉粒を含む。	不良	内外ヨコナダ。体部外周 に指痕。	高台断面正三角形。 底部内面口縁部外溝。
9 9	B-0 第4層中層		碗	13.2		内外面白褐色	砂粒を含む。	良	内外面磨耗のため調整不明。 外周による指痕残る。	体部内溝し、旋有り。
10 10	B-0 第4層中層		碗	17.6		内外面白灰色 外側暗灰色	微粉粒含む。	不良	内面捺文削減のため詳細 不明。 口縁部ナダ。 体部外周指痕が残る。	外周にヨコナダと指頭痕の間に円錐状。 体部やわらかに内溝。 口径が大きい。
11 11	C-0 第4層中層	高台付碗			5.2	内外面黒灰色	砂粒あまり含ま ない。	不良	底部内面に太い暗文。 高台筋付。	高台正三角形。
12 12	C-03 第4層中層	小皿	11.4	1.5	9.9	内外面黒灰色	微粉粒含む。	不良	磨耗著しく調整不明。 底部内面に放状のヘラ痕 わずかに残る。 体部外周ヨコナダ。	体部器壁うすく、角度を持って立ち上がる 器内溝。
13 13	B-01 第4層中層	小皿	9.4	1.3	5.1	内面青緑 外側黒灰色	微粉粒含む。	不良	内外面磨耗著しく調整不明。	体部ゆるやかに立ち上がる。

検査番号	出土地点	器種	基盤			色調	胎土	施成	手法	形態
			口径	高さ	厚さ					
59 C-1 S K 10		小皿	7.8	1.4	6.0	内面、乳白色 外面、白灰色	微粉粒を含む。	不良	内面、磨耗のため調整不明。 外周、ヨコナダ残る。	体部、直線的で塊部ない。
60 C-1 S K 10	七 面	小皿	7.8	1.2	5.4	内外面、暗褐色	1mm弱の砂粒 含む。	良	外周、ヨコナダ残る。	口縁部、やや外周し、器壁うすく なる。
61 C-1 S K 9	面	小皿	9.4	1.3	6.0	内外面、淡青褐色	1mm弱の砂粒 多く含む。	良	内外面、ヨコナダ。	口縁部や内溝ぎみ。
62 C-1 第5層	底	碗	11.9			内外面、暗褐色	1~2mm大の 砂粒含む。	不良	内面から口縁部にかけてヨコナダ。 体部外周ナダ。	体部上面にナダによる様。 (口縁部、肥厚)
63 B-1 第5層		碗	16.2			内面、暗褐色 外面、灰黄色	微粉粒を含む。	良	外周面、ヨコナダ。	口縁部にナダによる様。 (口縁部や外周)

## 付載4. 樅石島大浦浜遺跡採集標本と花粉分析結果

香川大学教授 坂東祐司

樅石島大浦浜遺跡地の下地区トレントにおいて地表より深度約1.8mまでの堆積層標本をほぼ10cm間隔において採集した。その結果、各標本についての堆積土の性質と花粉化石分析の詳細は次の通りである。

以下地表より下部にむかって順に記す。

〔F-30-1〕 黄白土(砂) 中～細粒砂

1～2mm径の石英粒を含む。その他、長石と雲母片を含む。有機物はほとんど含まれない。全体として、海浜の砂丘砂と似た性質の砂で、陶汰はかなり良い。砂中には磁鉄鉱の細片が認められる。粒土分はほとんどなし。花粉化石は分析処理するも、ほとんど含まれていない。現世堆積層と認められる。

〔F-30-2〕 黄白土(砂) 中～細粒砂

1～2mm径の石英、長石粒を含む。雲母のフレークが多い。粒土分はほとんど含まれず陶汰はかなり良い。堆積物の性質はF-30-1とほぼ同一である。有機物はほとんど含まれていない。全体として、海浜砂の砂と類似している。花粉化石は有機質粘土のほとんど含まれないこともあって、処理したが皆無に近い。現世堆積層と認められる。

〔F-30-3〕 黄白土(砂) 中～細粒砂

1～2mm径の石英、長石、及び雲母の細片が含まれて見える。粒土分はほとんど含まれず、有機物も含まれない。陶汰はかなり良好く、海浜砂の性質を示している。花粉化石は上記2ヶのサンプルと同じく、有機質粘土を含まないためほとんど含まれず処理するも検出されない。現世堆積物と認められる。

〔F-30-4〕 黄白土(砂) 中～細粒砂

1～2mmの石英、長石粒を含む。雲母のフレークを含む。石英、及び長石粒には黒雲母片が付着しているのが認められる。有機物、粘土分はほとんど認められない。陶汰は良い。花粉化石は皆無である。現世堆積物と認められる。

〔F-30-5〕 黄白土(砂) 中～細粒砂

1～4mm径の石英、長石の粒子を含む。雲母片のフレーク多し。有機物、粘土はほとんど含まれていない。陶汰はおおむね良好。全体として、海浜砂の特徴を示す。採集地点の本標本の含まれる地層はク

ロスパッドを示し海成の有機物を含まないことから風成砂と考えられる。現世堆積物と認められる。花粉化石は処理する粘土、又はシルト分をほとんど含まず、検出されない。

〔F-30-6〕 褐色 粗～中粒砂

石英、長石、及び雲母のフレークよりなる砂で粗粒砂を構成する砂粒は花崗岩の碎屑物が大部分である。また、前記1～5のサンプルの砂とくらべて、褐色を帶びて、陶汰がやや悪い点で異なっている。有機物、粘土、シルト等はほとんど含まれていない。花粉分析処理を行ったが化石は検出されなかった。繩文後期堆積物の可能性があろう。

〔F-30-7〕 褐色 粗～中粒砂

石英、長石、雲母(黒雲母)のフレークよりなる砂、磁鉄鉱の小鉱物を含む。特に、雲母のフレークが多い。有機物、粘土、シルトはほとんど含まれていない。陶汰はやや良。石英粒は2～3mm径のものが最大である。花粉化石は検出されない。

〔F-30-8〕 褐色 細粒砂

石英、長石、黒雲母の細片による陶汰の非常に良い褐色砂である。砂を構成する鉱物は石英がもっと多く、雲母のフレークは少い。現地では滯水しており、地下水の滯水層となっている。有機物、粘土、シルトなどは皆無に近い。これらは、地下水の流れにより失われたものと思われる。花粉化石は検出されない。

〔F-30-9〕 灰褐色 中～細粒砂

石英、長石、雲母細片よりなる砂、陶汰はやや良好。有機物、粘土はほとんど含まれない。本砂層は地下水の滯水層となっており、水を多く含んでいる。花粉化石は処理するもほとんど皆無に近い。これは有機質な泥がほとんどなく、仮に残存していても、地下水流により流失したものと思われる。

〔F-30-10〕 灰黑色 粘土混り砂

石英、長石、黒雲母、粘土により構成されている。石英、黒雲母、長石の鉱物粒は粘土により充填されている。上記1～9までのサンプルの中にはほとんど粘土が含まれていなかったが、本標本より粘土を含むことに大きな相異が認められる。鉱物粒は1～2

怪のものが多く、中～細粒である。粘土は灰黒色であるが有機物はほとんど含まれていない。鉱物粒と粘土の比は約7：3である。花粉化石はほとんど含まれていない。

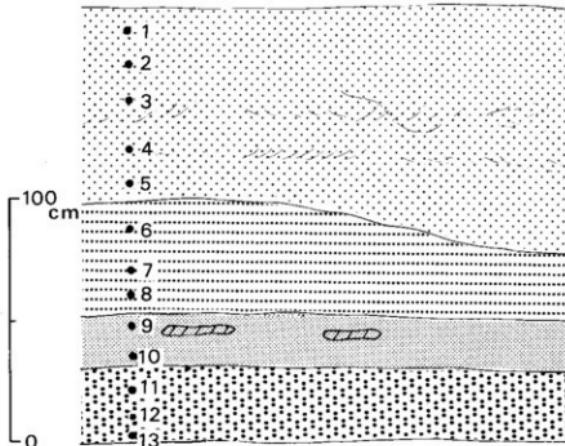
〔F-30-11〕 灰黒色 粘土混り砂

石英、長石、雲母(黒雲母)、粘土により構成されている。前者三鉱物粒は、灰黒色粘土により粒子間充填されている。全体としてF-30-10のサンプル

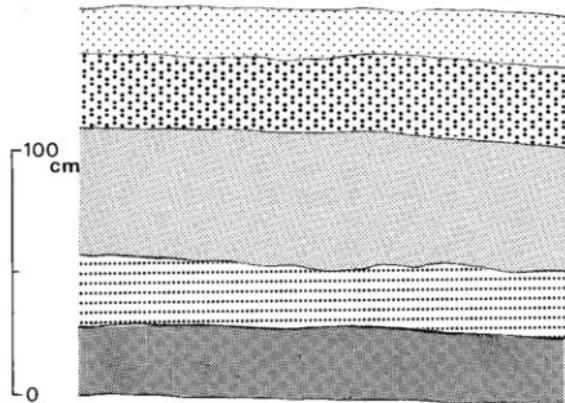
と類似している。粘土の量はF-30-10のサンプルよりやや少く、鉱物と粘土の量比は7：3～8：2程度である。また、鉱物粒に混じて有機物(材木片)の破片が認められる。しかし、花粉化石は非常に少なく、鑑定に耐えるものは認められない。

〔F-30-12〕 灰黒色 粘土混り砂

石英、長石、雲母(黒雲母)、及び粘土からなる。前後の鉱物粒は粘土により充填されているが、粘土



第1図 横石F-30トレンチプロファイル



第2図 横石M-38トレンチプロファイル

中には炭質物を比較的多く含んでいる。鉱物と粘土物の比は約6:4である。有機物は炭質物と木材片の化石からなり球果の化石も多く含まれている。(付図参照)又、珪藻化石も認められる。

## 化石内容

材化石:長さ30cm、径5~10cmのやや炭化した材化石で、薄片で検鏡した結果、二葉松に属するものと思われる。

球果化石:やや炭火し、変形している。化石は二葉松(多分アサマツ)に属するもので、他は含まれていない。

花粉化石:数は少いが、次の花粉化石 pinus, Quercus, Pteridium, Hystrichosphaeridium, Monosulcate type pollen, sporesが含まれている。

動物化石:小型 Gastropods (淡水性)

## 珪藻化石:Diatom Fragments.

(F-30-13) 灰黑色 粘土混り砂

石英、長石、雲母、及び粘土からなる。鉱物粒は中~細粒。粘土はこれから鉱物粒間を充填している。粘土中には有機物(炭質物)を含んでいる。鉱物と粘土の量比は、約6:4である。化石は珪藻化石片や花粉化石、材化石片を含んでいる。

## 化石内容

材化石:やや炭化した材化石で、二葉松に属するものと思われる。

花粉化石:全体として量は極めて少く、pteridium, Elaeagnus等が認められた。

珪藻化石:Diatom Fragments, coscidodiscus類の珪藻と思われる Fragment が認められる。

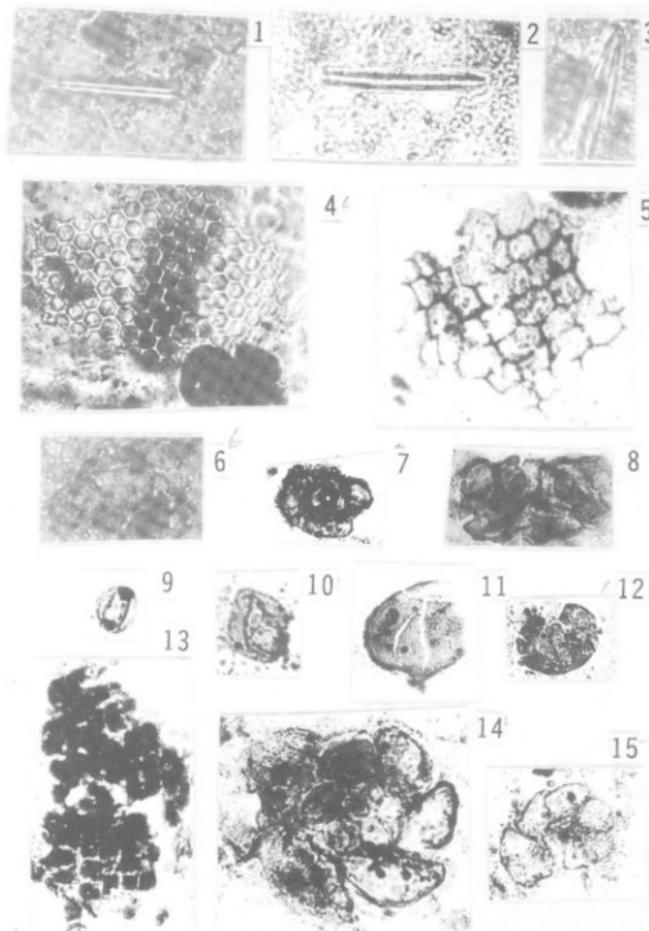
## 含有化石についての考察

F-30-12, F-30-13の両サンプル中に含まれている化石について考察すれば、次の通りである。

1)材化石はほとんど二葉松に属するものであり、気候環境の面では、現在とほぼ類似したものであろう。

2)花粉化石は非常に少いが、マツ、コナラなどが含まれている。

3)珪藻化石片が含まれているが、完全なものは認められない。特にcoscinodiscus類の網目模様の細胞壁をもった化石片が認められる。淡水性のものと思われる。



1-3 : 檜類化石  
 4 : 遠縞化石 (Coscidodiscus) F-30-12  
 5 : 藤懸化石 F-30-13  
 6-7 : 松類(Pinus)花粉化石 F-30-13  
 8 : Spore F-30-12  
 9-10 : クロモリ (Cryptomeria) F-30-12  
 11, 13, 14, 15 : Spore F-30-13  
 12 : Taxodiaceae? F-30-13

植石島・大湊浜地区冲積層花粉。および珪藻化石写真、 $\times 300$ 。

## 付載 5. 大浦浜遺跡粘土成分分析結果

香川大学教授 坂 東 祐 司

## まえがき

櫛石島の大浦浜に分布する遺跡は今日、砂丘砂により埋没していたが、南端において発見された製塙場の釜跡と思われる遺跡から粘土を採集し、X線分析、ならびに顕微鏡観察を行った。これらのサンプルは塩水の貯水用の釜と、燃焼用の釜の二種があり、それぞれ2点づつ、計4点採集されたものである。

貯水用の釜は、濃縮された塩水を一時貯留するために用いられたものと思われ、釜の表面は約10cmの壁土で被われ、その下は5~10cmの厚さの黒色粘土に供された釜は深さ約0.5m、直徑約3mのタコツボ状で、釜の表面は厚さ約10mの黒色焼土となっている。前者の貯水用のものは形状が楕円形であるのに対して、後者のものはほぼ円形である。

## 標本と分析結果

サンプルは貯水釜の内壁の2層から各1ヶと燃焼釜の内壁より2ヶ採集した。すなわち、付図の通りである。

## サンプルの顕微鏡観察結果

## (1) SX-09: 黄灰色土

造岩鉱物: 石英、長石、黒雲母のフレーク

その他の鉱物: ザクロ石

粘土鉱物: ベントナイト質粘土

粘土は上記鉱物粒間にマトリックスとして充填している。粘度と鉱物の比は6:4である。長石は風化しているが、鉱物粒として残存している。固結度の高いマサ土風化土に属する。

## (2) SX-12: 黒灰色土

造岩鉱物: 石英、長石

その他の鉱物: 腐植土様粘土

鉱物粒子間の粘土は二次的に溶解して去られた形跡があり、孔隙として残されている。また、鉱物粒子に岩塙?の小結晶が多数付着している。この結晶は二次的に付着、充填したものと思われる。

## (3) SX-13: 黒褐色土

造岩鉱物: 石英、長石、雲母

その他の鉱物: なし

粘土鉱物: 腐植土性粘土

鉱物: 粘土の割合は6:4、粘土は鉱物粒子間を

充填しているが、二次的な溶解作用を受けており、空隙がみられる。又、岩塙の微晶も見られる。

## (4) SX-14: 黒灰色土

造岩鉱物: 石英、長石、雲母の小片

その他の鉱物: なし

粘土鉱物: 腐植土性粘土、ベントナイト質粘土

鉱物: 粘土比は約5:5、二次的溶解により鉱物間の粘土は溶解し、空隙として残されている。岩塙の微晶が見られる。全体として非常にコンパクトである。

造岩物の中で長石は多少熱による風化作用を受けた形跡が見られる。

## X線分析結果

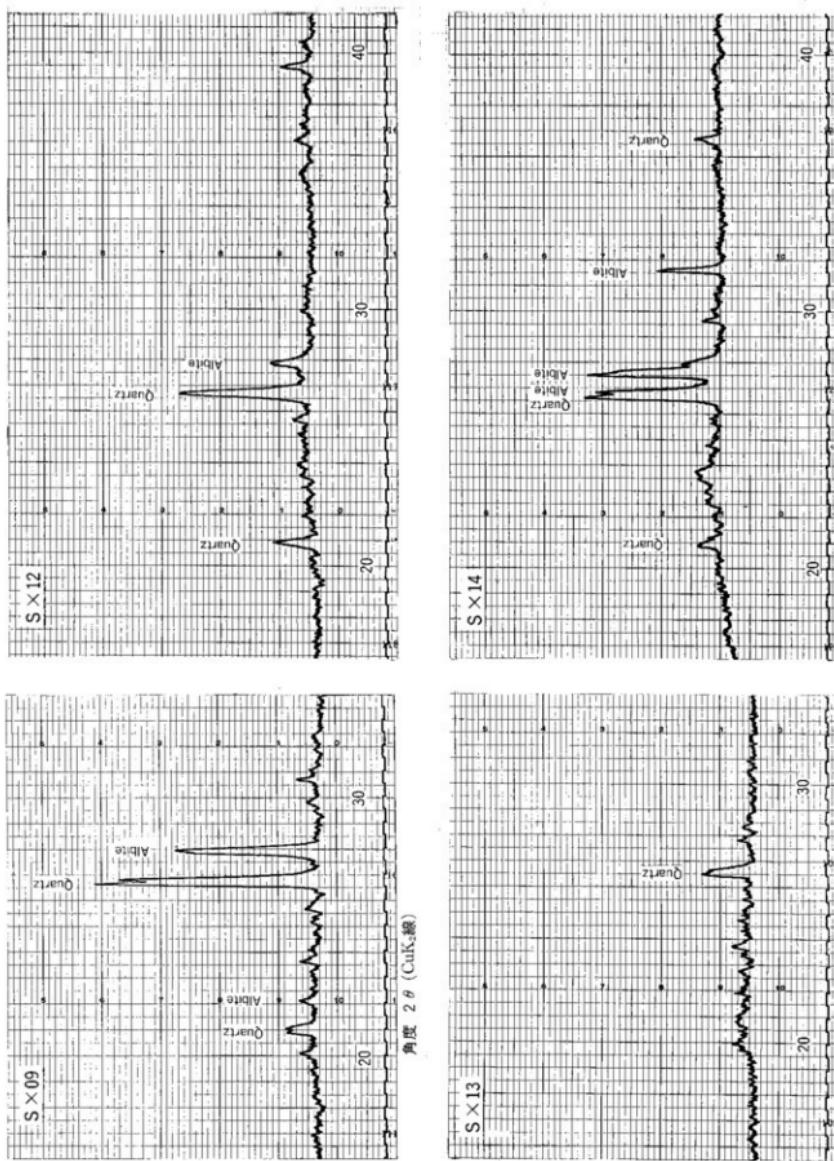
X線による分析結果を付図1図に示したが、結論として次のような事項を挙げることが出来る。

1. 4ヶの粘土のサンプル共に原料はマサ土粘土である。

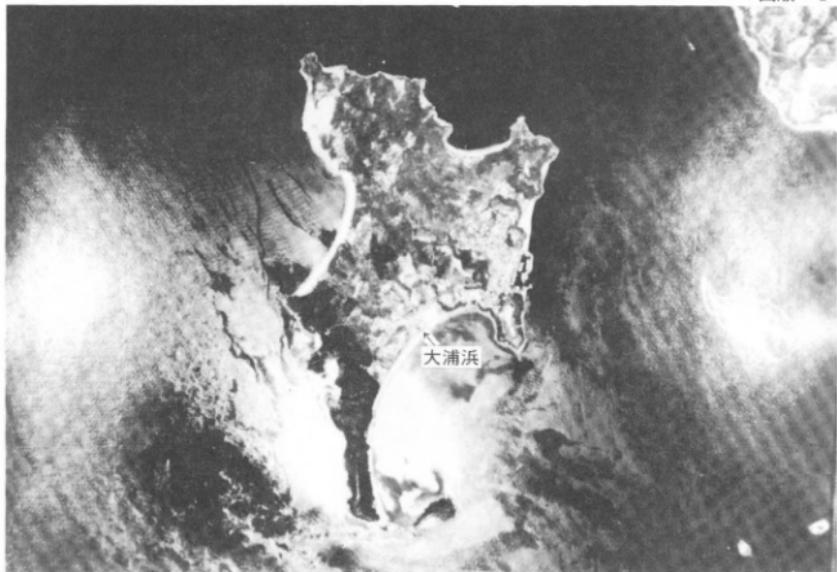
2. 残存鉱物は石英、曹長石である。

3. SX-09のサンプルは普通のマサ土に近い成分を示すが、他の3ヶのサンプル(SX-12, SX-13, SX-14)は熱、あるいは热水による風化を受けている可能性がある。

第 1 図 X 線分析グラフ



# 図 版



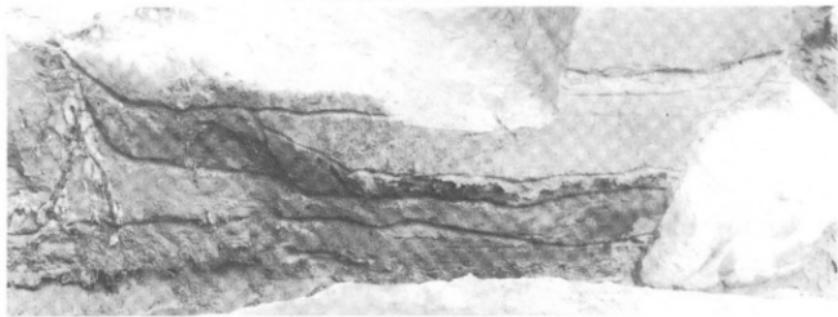
(1) 横石島航空写真



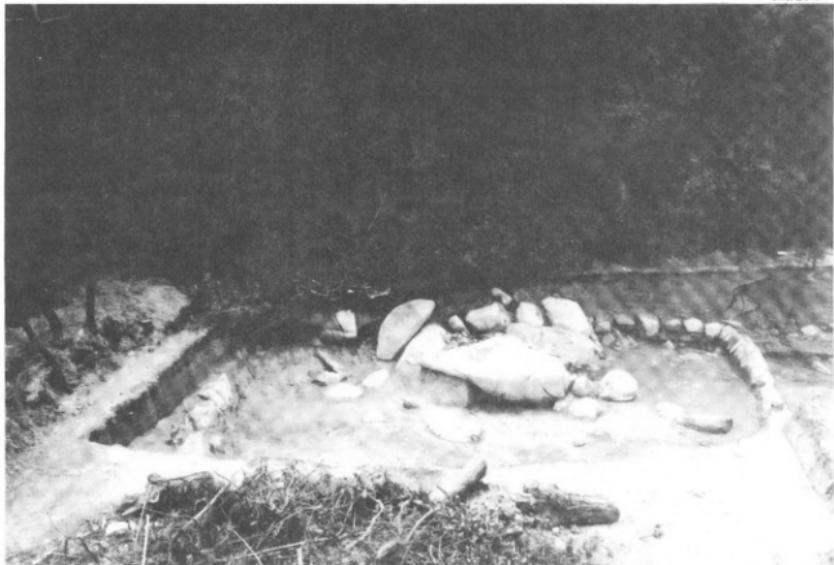
(2) 調査区遠景（北西から）



(1) 南端地区第2遺構群



(2) 南端地区湧水溜東西断面 (A-05断面)



(1) 南端地区湧水溜全景

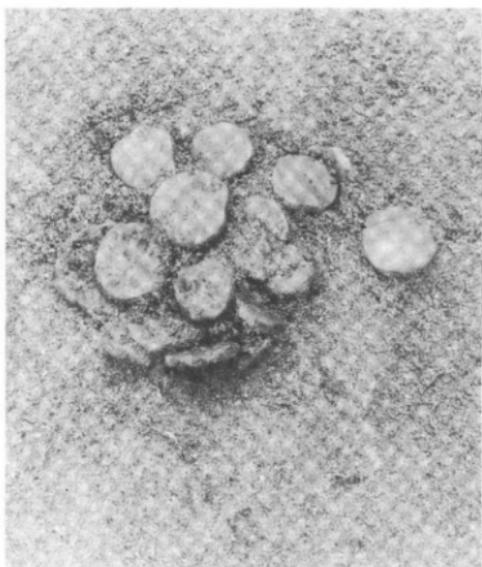


(2) 南端地区湧水溜北西部分

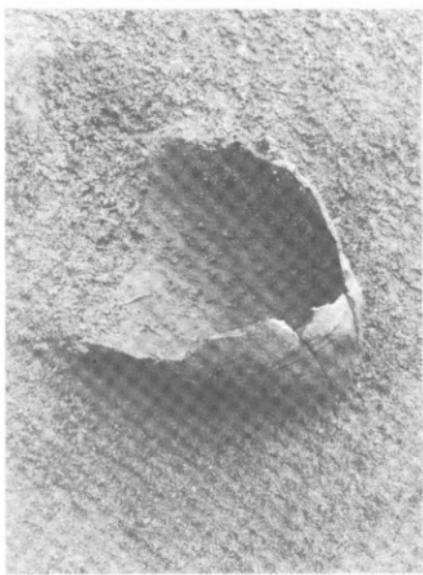
図版 4



(1) 南端地区黃金具出土状態



(2) 南端地区円板状土製品出土状態



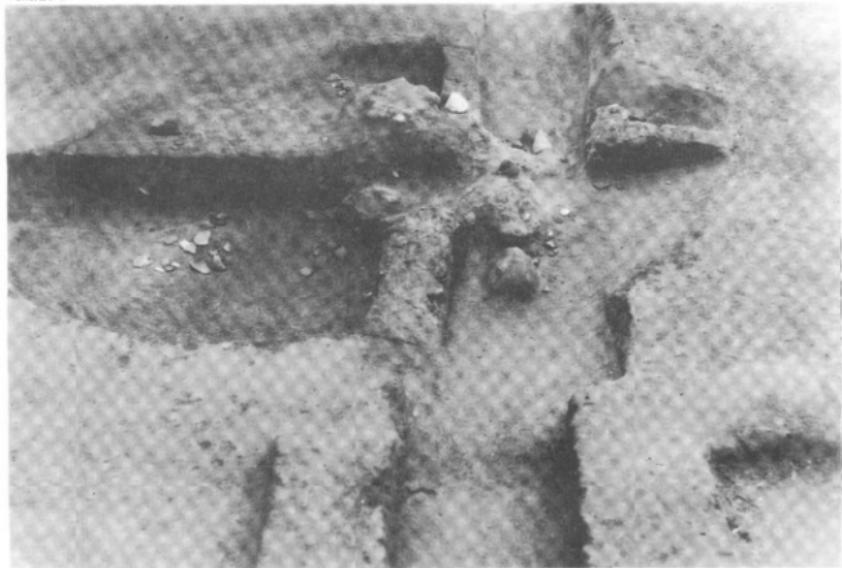
(3) 南端地区製塩土器出土状態



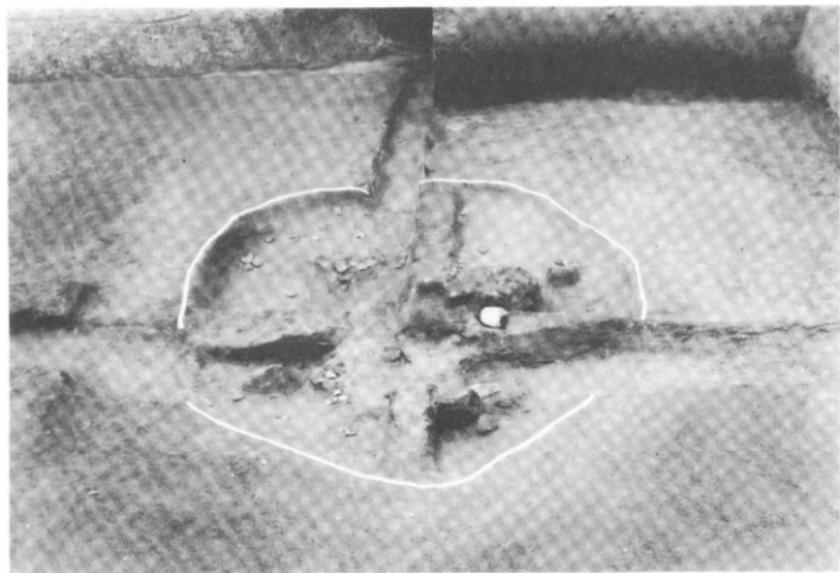


B～D-3～8区第4層上面（北から）

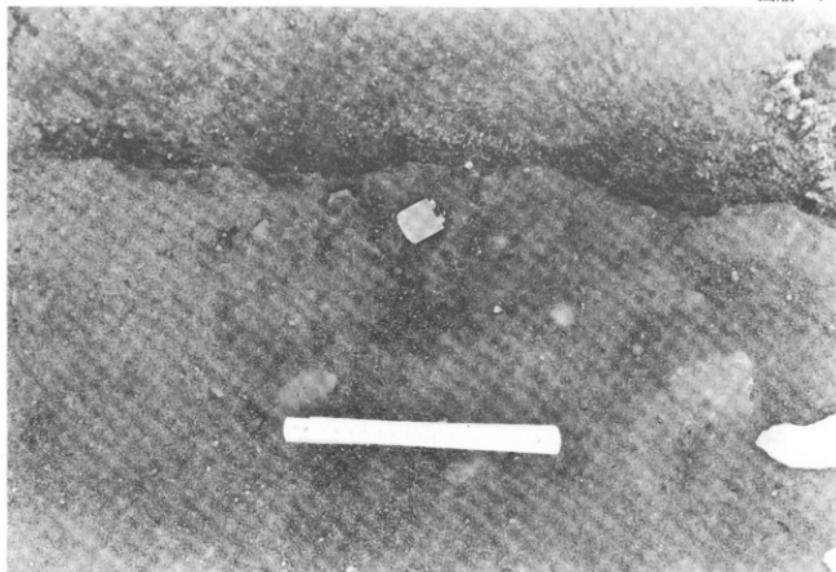
図版 6



(1) C-4区SK11(南から)



(2) C-4区SK11(北から)



(1) B-8 区鉗具出土状態



(2) B-6 区SK 1 神功開宝出土状況